Pioneer sound.vision.soul

AVマルチチャンネルアンプ

VSA-AX5Ai

AUDIO/VIDEO MULTI-CHANNEL AMPLIFIER

インターネットによる登録のお願い

http://www3.pioneer.co.jp/

お買い上げの製品について、上記URL「お客様のページ」でお客様登録をお願いします。

この「お客様のページ」は、お客様とのコミュニケーションを目的としたウェブサイトです。新規登録されたお客様にはID・パスワードを発行させていただき、新製品のカタログや取扱説明書のダウンロード、メールマガジンの購読など各種サービスをご利用いただけます。

取扱説明書

はじめに

このたびは、パイオニアの製品をお買い求めいただきましてまことにありがとうございます。
この取扱説明書をよくお読みになり、正しくお使いください。特に、本書および別冊の「安全上のご注意」は必ずお読みください。なお、「取扱説明書」および「安全上のご注意」は「保証書」、「修理窓口・ご相談窓口のご案内」と一緒に必ず保管してください。

安全上のご注意

●安全にお使いいただくために、必ずお守りください。
●ご使用の前にこの「安全上のご注意」をよくお読みのうえ、正しくお使いください。

この取扱説明書および製品への表示は、製品を安全に正しくお使いいただき、あなたや他の人々への危害や財産への損害を未然に防止するために、いろいろな絵表示をしています。その表示と意味は次のようになっています。
内容をよく理解してから本文をお読みください。

警告

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が死亡または重傷を負う可能性が想定される内容を示しています。

注意

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が損害を負う可能性が想定される内容および物的損害のみの発生が想定される内容を示しています。

絵表示の例

△ 記号は注意(警告を含む)しなければならない内容であることを示しています。
図の中に具体的な注意内容(左図の場合は感電注意)が描かれています。

⃠ 記号は禁止(やってはいけないこと)を示しています。
図の中や近くに具体的な禁止内容(左図の場合は分解禁止)が描かれています。

● 記号は行動を強制したり指示する内容を示しています。
図の中に具体的な指示内容(左図の場合は電源プラグをコンセントから抜け)が描かれています。

⚠ 警告

異常時の処置

- 万一煙が出ている、変なにおいや音がするなどの異常状態のまま使用すると火災・感電の原因となります。すぐに機器本体の電源スイッチを切り、必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。煙が出なくなるのを確認して販売店に修理をご依頼ください。お客様による修理は危険ですから絶対おやめください。

- 万一内部に水や異物等が入った場合は、まず機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

- 万一本機を落としたり、カバーを破損した場合は、機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

設置

- 電源プラグの刃および刃の付近にほこりや金属物が付着している場合は、電源プラグを抜いてから乾いた布で取り除いてください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

- 電源コードの上に重いものをのせたり、コードが本機の下敷きにならないようにしてください。また、電源コードが引張られないようにしてください。コードが傷ついて、火災・感電の原因となります。コードの上を敷物などで覆うことにより、それに気付かず、重い物をのせてしまうことがあります。

- 放熱をよくするため他の機器、壁等から間隔をとり、またラックに入れる時はすき間をあけてください。また、次のような使い方で通風孔をふさがないでください。内部に熱がこもり、火災の原因となることがあります。
→あおむけや横倒し、逆さまにする。
→押し入れなど、風通しの悪い狭いところに押し込む。
→じゅうたんやふとんの上に置く。
　テーブルクロスなどをかける。

- **着脱式の電源コード(インレットタイプ)が付属している場合のご注意:**
付属の電源コードはこの機器のみで使用することを目的とした専用部品です。他の電気製品ではご使用になれません。他の電気製品で使用した場合、発熱により火災・感電の原因となることがあります。また電源コードは本製品に付属のもの以外は使用しないでください。他の電源コードを使用した場合、この機器の本来の性能が出ないことや、電流容量不足による発熱から火災・感電の原因となることがあります。

使用環境

- この機器に水が入ったり、ぬらさないようにご注意ください。火災・感電の原因となります。雨天、降雪中、海岸、水辺での使用は特にご注意ください。

- 風呂場・シャワー室等では使用しないでください。火災・感電の原因となります。

- 表示された電源電圧（交流100ボルト50/60 Hz）以外の電圧で使用しないでください。火災・感電の原因となります。

- この機器を使用できるのは日本国内のみです。船舶などの直流（DC）電源には接続しないでください。火災の原因となります。

使用方法

- 本機の上に花びん、植木鉢、コップ、化粧品、薬品や水などの入った容器または小さな金属物をおかないでください。こぼれたり、中に入った場合、火災・感電の原因となります。

- ぬれた手で（電源）プラグを抜き差ししないでください。感電の原因となることがあります。

- 本機の通風孔などから、内部に金属類や燃えやすいものなどを差し込んだり、落とし込んだりしないでください。火災・感電の原因となります。特にお子様のいるご家庭ではご注意ください。

- 本機のカバーを外したり、改造したりしないでください。内部には電圧の高い部分があり、火災・感電の原因となります。内部の点検・整備・修理は販売店にご依頼ください。

- 電源コードを傷つけたり、加工したり、無理に曲げたり、ねじったり、ひっぱったり、加熱したりしないでください。コードが破損して火災・感電の原因となります。コードが傷んだら（芯線の露出、断線など）、販売店に交換をご依頼ください。

- 雷が鳴り出したらアンテナ線や電源プラグには触れないでください。感電の原因となります。

- 製品に付属の電源コンセントには、そのパネルおよび取扱説明書に表示された容量を超える消費電力を持つ電気機器を接続しないでください。火災の原因となります。電熱器具、ヘアードライヤー、電磁調理器などは接続しないでください。また表示してある電力以内であっても、電源を入れた時に大電流の流れる機器などは接続しないでください。

⚠ 注意

設置

- 電源プラグはコンセントに根元まで確実に差し込んでください。差し込みが不完全ですと発熱したり、ほこりが付着して火災の原因となることがあります。また、電源プラグの刃に触れると感電することがあります。

- 電源プラグは、根元まで差し込んでもゆるみがあるコンセントに接続しないでください。発熱して火災の原因となることがあります。販売店や電気工事店にコンセントの交換を依頼してください。

- ぐらついた台の上や傾いたところなど不安定な場所に置かないでください。落ちたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。

- 本機を調理台や加湿器のそばなど油煙、湿気あるいはほこりの多い場所に置かないでください。火災・感電の原因となることがあります。

- キャスター付きの場合にはキャスター止めをしてください。動いたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。

- テレビ、オーディオ機器、スピーカー等に機器を接続する場合は、各々の機器の取扱説明書をよく読み、電源を切り、説明に従って接続してください。また、接続は指定のコードを使用してください。

- 電源を入れる前には音量を最小にしてください。突然大きな音がでて聴力障害などの原因となることがあります。

- 本機の上に重いものや外枠からはみ出るような大きなものを置かないでください。バランスがくずれて倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。

- 本機の上にテレビを置かないでください。放熱や通風が妨げられて、火災や故障の原因となることがあります。（取扱説明書でテレビの設置を認めている機器は除きます。）

はじめに

異常時の処置

- 電源プラグを抜く時は、電源コードを引っ張らないでください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。必ずプラグを持って抜いてください。

- 電源コードを熱器具に近づけないでください。コードの被ふくが溶けて、火災・感電の原因となることがあります。

- 移動させる場合は、電源スイッチを切り必ず電源プラグをコンセントから抜き、外部の接続コードを外してから、行ってください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。

- 本機の上にテレビやオーディオ機器を載せたまま移動しないでください。倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。重い場合は、持ち運びは2人以上で行ってください。

- アンテナ工事には技術と経験が必要ですので、販売店にご相談ください。

→送配電線から離れた場所に設置してください。アンテナが倒れた場合、感電の原因となることがあります。

→ＢＳ，ＣＳ放送受信用アンテナは強風の影響を受けやすいので、堅固に取りつけてください。

- 窓を閉め切った自動車の中や直射日光が当たる場所など異常に温度が高くなる場所に放置しないでください。火災の原因となることがあります。

使用方法

- ディスクを使用する機器の場合、ひび割れ、変形、または接着剤などで補修したディスクは使用しないでください。ディスクは機器内で高速回転しますので、飛び散ってけがの原因となることがあります。

- レーザーを使用している機器では、レーザー光源をのぞきこまないでください。レーザー光が目に当たると視力障害を起こすことがあります。

- 長時間音が歪んだ状態で使わないでください。スピーカーが発熱し、火災の原因となることがあります。

- 本機に乗ったり、ぶら下がったりしないでください。特にお子様はご注意ください。倒れたり、こわれたりしてけがの原因になることがあります。

- お子様がカセットテープ、ディスク挿入口に、手を入れないようにご注意ください。けがの原因になることがあります。

- ヘッドホンをご使用になる時は、音量を上げすぎないようにご注意ください。耳を刺激するような大きな音量で長時間続けて聞くと、聴力に悪い影響を与えることがあります。

- 旅行などで長期間、ご使用にならない時は安全のため必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。

電池

- 指定以外の電池は使用しないでください。また、新しい電池と古い電池を混ぜて使用しないでください。電池の破裂、液もれにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。

- 電池を機器内に挿入する場合、極性表示（プラス（＋）マイナス（ー）の向き）に注意し、表示通りに入れてください。間違えると電池の破裂、液もれにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。

- 長時間使用しない時は、電池を取り出しておいてください。電池から液がもれて火災、けが、周囲を汚損する原因となることがあります。もし液がもれた場合は、電池ケースについた液をよくふきとってから新しい電池を入れてください。また万一、もれた液が身体についた時は、水でよく洗い流してください。

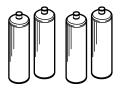
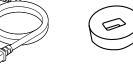
- 電池は加熱したり分解したり、火や水の中にいれないでください。電池の破裂、液もれにより、火災、けがの原因となることがあります。

保守・点検

- 5年に一度くらいは内部の掃除を販売店などにご相談ください。内部にほこりがたまったまま、長い間掃除をしないと火災や故障の原因となることがあります。特に湿気の多くなる梅雨期の前に行うとより効果的です。なお掃除費用については販売店などにご相談ください。

- お手入れの際は安全のために電源プラグをコンセントから抜いて行ってください。

付属品を確認する

リモコン

オートセットアップ用マイク

単3形アルカリ乾電池（LR6）×4

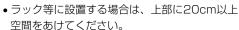
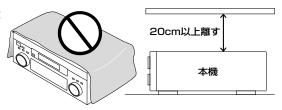
電源コード

オートセットアップ用マイクスタンド

- 取扱説明書（本書）
- 修理窓口・ご相談窓口のご案内
- 保証書

設置について

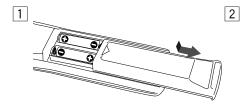
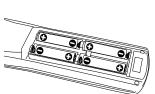
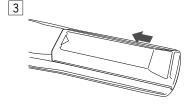
警告

放熱性を十分に確保してください。異常発熱は故障や事故の原因となります。
- 本機の上に物を置いたり、布やシートなどを被せた状態でのご使用は絶対におやめください。
- ラック等に設置する場合は、上部に20cm以上空間をあけてください。

リモコンの準備

リモコンに電池を入れる

1

2

3

メモ

- 電池を交換するときは、なるべく5分以内に交換することをお勧めします。5分以内に交換しないと、各種リモコン設定が解除される可能性があります。設定が解除されてしまった場合は、再度設定し直してください。
- リモコンの操作範囲が極端に狭くなってきたら、電池を交換してください（4本とも新しい単3形アルカリ乾電池をお使いください）。

電池の残りが少ない目安です

注意

電池を誤って使用すると、液漏れしたり破裂する危険性があります。以下の点について特にご注意ください。

- 新しい乾電池と使用した乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 乾電池のプラスとマイナスの向きを電池ケースの表示どおりに正しく入れてください。
- 乾電池には同じ形状のものでも電圧の異なるものがあります。種類の違う乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 不要となった電池を廃棄する場合は、各地方自治体の指示（条例）に従って処理してください。

目　次

はじめに

ホームシアター入門ガイド

各部の名称

各機器の接続

サラウンドの設定

入力信号/ファンクションの設定

目　次

基本操作

応用操作

リモコンによる他機器の操作

リモコンの便利な機能

技術資料

困ったとき

特長

高音質・多機能な本機VSA-AX5Aiの主な特長をまとめました。「本書の掲載ページ」に進むと、それぞれの機能や操作を楽しんでいただけます。

本書の掲載ページ

i.LINK 端子を搭載

i.LINKを使用すると、DVDオーディオやSACDの再生が下記のように手軽に楽しめます。

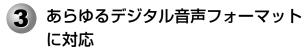
・マルチチャンネル入力もケーブル１本による簡単接続
・デジタルによる高品質な伝送
・ジッターレスによる高音質な再生

P.22
「i.LINK 対応機器の接続」
P.70
「i.LINK 入力の設定」

Advanced MCACC を搭載

聴感のみでは正確な調整が難しいマルチチャンネル（サラウンド）の設定を自動化しました。レコーディングスタジオの現場で行われる調整技術を家庭内で実現するため、音場を正確に測定し、チャンネル間の空間情報の歪みを補正します。残響特性を考慮した周波数特性の補正や残響特性のグラフ表示（パソコンまたはOSD画面）が可能です。

P.40
「Auto Setting
(サラウンドの自動設定)」
P.53
「Acoustic Cal EQ(視聴環境の周波数特性の補正)」
P.58
「Acoustic Cal EQ Professional
(視聴環境の残響特性の測定と周波数特性の補正)」

あらゆるデジタル音声フォーマットに対応

96kHz/24bit の高音質 5.1ch フォーマット「DTS96/24」、BS デジタル標準音声「MPEG-2 AAC」、「Dolby Digital EX」、「Dolby Pro Logic II」、「Dolby Pro Logic IIx」、「DTS-ES」など現存するデジタルサウンドフォーマット再生に対応したデコーダーを搭載しています。

P.76
「96kHz/24bit フォーマットディスクの再生について」
P.113
「サウンドフォーマットについて」

その他の主な特長

- **フロントスピーカーの Bi-Amp 対応：**
  スピーカーがバイワイヤ対応であれば、バイアンプ接続により高品位な再生が楽しめます。
- **高品質スピーカー端子：**
  より良い音質のための新設計スピーカー端子を使用しています。
- **パイオニアビデオコンバーター搭載：**
  接続の自由度を拡大し、伝送ロスの少ない接続を可能にします。

P.32
「フロントスピーカーの
Bi-Amp 接続」
P.39
「SurrBack System(サラウンドバックシステムの設定)」
P.20
「映像機器の接続について（パイオニアビデオコンバーター）」

Advanced MCACC(Multi Channel ACoustic Calibration system)とは

MCACC(Multi Channel Acoustic Calibration system)は、「スタジオと同等の調整」を「一般家庭」において「簡単かつ高精度」に行うことを目標に、当社研究所で開発されたものです。
映画制作のスタンダードであるルーカスフィルム社と、音楽レコーディング業界の最高峰エアースタジオ社（ロンドン）といった、実際の制作現場の技術者との徹底的なヒアリングと、当社の長年の研究成果の相乗効果により実現されました。Advanced MCACCはこの機能をさらに高め、視聴環境の残響特性を測定し、それに適した周波数特性の補正を行うことで、これまでよりも一層スタジオ環境に近づいた、高精度な音場の自動解析、最適補正が可能となりました。

AIR STUDIOS

ホームシアター入門ガイド

サラウンドサウンドを楽しむ一般的な機器の組み合わせ（テレビ、DVD プレーヤー、マルチチャンネル用スピーカー）を例にあげて、それらと本機の接続、設定から再生までの基本手順を説明します。

入門ガイドは以下の３ステップで進みます。

Step1 接続する ――「テレビ／ DVD プレーヤーの接続」「スピーカーの接続」

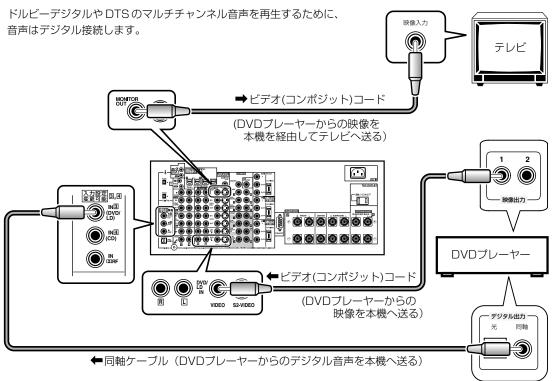
Step2 設定する ――「サラウンドの自動設定」

Step3 再生する ――「接続した機器の再生」

Step1　接続する

機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

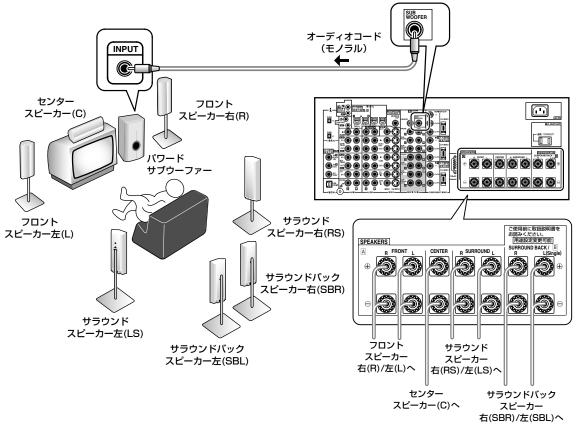
テレビ／ DVD プレーヤーの接続

ドルビーデジタルや DTS のマルチチャンネル音声を再生するために、音声はデジタル接続します。

メモ

- お持ちのDVDプレーヤーのデジタル出力が光端子のみの場合は、光ケーブルでの接続とともにデジタル入力の設定が必要です。（⇨**P.68**）
- 同軸ケーブルには、ビデオ（コンポジット）コードを使用できます。
- 映像の接続は、コンポジットの他にSビデオやコンポーネントなどでもできます。
- 「MULTIROOM & SOURCE」のMONITOR OUT端子からは、本機の設定画面は出力されません。

スピーカーの接続

7本のスピーカーとサブウーファーをつないだ例です。お持ちのスピーカーに合わせて（サラウンドバック、センタースピーカーがない場合でも）接続してサラウンドサウンドが楽しめます。

INPUT
オーディオコード
（モノラル）
SUB WOOFER
センター
スピーカー(C)
フロント
スピーカー右(R)
パワード
サブウーファー
フロント
スピーカー左(L)
サラウンド
スピーカー右(RS)
サラウンドバック
スピーカー右(SBR)
サラウンド
スピーカー左(LS)
サラウンドバック
スピーカー左(SBL)
SPEAKERS
FRONT
CENTER
SURROUND
SURROUND BACK /
L(Single)
フロント
スピーカー
右(R)/左(L)へ
サラウンド
スピーカー
右(RS)/左(LS)へ
センター
スピーカー(C)へ
サラウンドバック
スピーカー
右(SBR)/左(SBL)へ

メモ

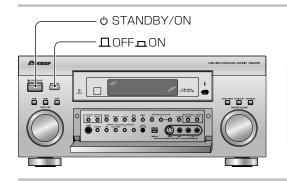
- 各機器の接続が終わったら、電源コードをコンセントへ差し込みます。（⇨**P.36**）
- スピーカーの配置については**P.30**～**31**をご覧ください。

Step2　設定する

本機の「サラウンドの自動設定」を行うと、マニュアルでは難しかったサラウンドの環境設定が簡単に行えます。

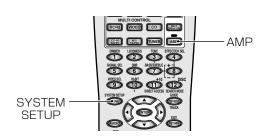
サラウンドの自動設定(Auto Setting)

1 **オートセットアップ用マイクを接続／設置する**

三脚や台などを使って、リスニングポジションの耳の位置にマイクを設置します。

2 本機とテレビの電源を入れる

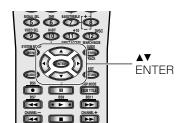
本体の[OFF/ON]ボタンを押してから[STANDBY/ON]ボタンを押します。

メモ

サブウーファーを接続しているときは、測定のためサブウーファーの電源を入れてボリュームレベルを適度に上げておいてください。

3 テレビに本機のメニュー画面を表示させる

AMPボタンを押してからSYSTEM SETUPボタンを押します。

メモ

SYSTEM SETUPボタンを押したあとに、テレビにメニュー画面が表示されるようテレビ側の入力切換を合わせてください。

4 オートセットアップを開始する

以下の画面に従って進めます。

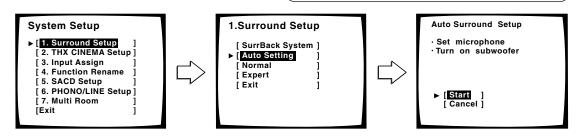
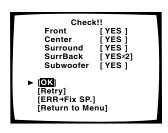
メニュー操作は▲▼でカーソルを移動して、(ENTERボタン)で決定します。

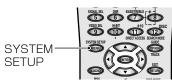
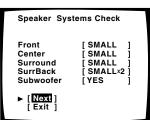
[Start]を選んでENTERボタンを押すと、測定を開始します。

メモ

正確な測定のため、測定のときは以下のようにしてください。

- 騒音をたてない
- 各スピーカーと測定用マイクの間を遮らない場所に立つ

注意 測定中は大きな音でテストトーンが出力されます。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします。

5 スピーカー有り／無しの確認をする

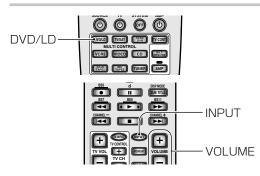
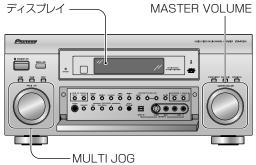
左の「Check!!」画面が表示されます。
[OK]を選んでENTERボタンを押すと、測定を再開します。

6 オートセットアップを終了する

左の画面が表示されたら、オートセットアップは完了です。SYSTEM SETUPボタンを押して、メニュー操作を終了します。

メモ

- もしオートセットアップの途中でエラー画面が出るなどうまくいかなかったときは、「Auto Setting (サラウンドの自動設定)」(⇨ **P.40**)をご確認ください。
- 部屋の残響特性を考慮した、より高度な補正を行いたいときは、[Professional]で補正を行ってください。(⇨**P.58**)

Step3 再生する

接続した機器の再生

1 DVDプレーヤーの電源を入れる

2 入力ファンクションを切り換える

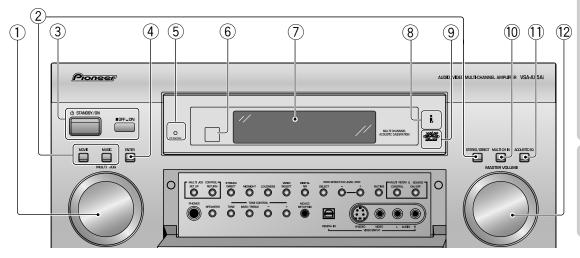
リモコンのMULTI CONTROLボタンでDVD/LDを選ぶ。またはリモコンのINPUTボタン、本体のMULTI JOGを使ってDVD/LDを選びます。

3 DVDを再生する

4 音量を調節する

リモコンのVOLUMEボタンまたは本体のMASTER VOLUMEを使って、−80dB(最小)から+12dB(最大)で調節できます。

これで入門ガイドは終了です。
もし本機の接続、設定、操作で困ったときは、「故障かな？と思ったら」(⇨P.119)もご覧ください。

フロントパネル

① MULTI JOG（マルチジョグ）

通常は入力ソースを選択します。本体のSET UPボタンまたはリモコンのSYSTEM SETUPボタンを押したときはシステムセットアップの設定項目を選択します。また、MOVIEやMUSICなどのリスニングモードの選択にも使用します。

② リスニングモードボタン（⇨P.77~80）

MOVIEボタン

リスニングモードをムービーモードにします。

MUSICボタン

リスニングモードをミュージックモードにします。

STEREO/DIRECTボタン

リスニングモードをステレオモードまたはダイレクトモードにします。

③ ▮OFF▬ONボタン(主電源)

このボタンがOFF(▮)の状態ではフロントパネルおよびリモコンでの操作ができません。

⏻STANDBY/ONボタン

本機の電源を入れたり、スタンバイモードにします。

④ ENTERボタン

システムセットアップの設定項目の決定やリスニングモード(MOVIE、MUSIC)を決定するときに押します。

⑤ STANDBYインジケーター

スタンバイモード時に点灯します。

⑥ リモコン受光部(⇨右記参照)

リモコン信号はここで受信されます。

⑦ ディスプレイ（⇨P.15）

⑧ i.LINKインジケーター

i.LINKケーブルで接続されているi.LINK対応機器が選ばれているときに点灯します。

⑨ Advanced MCACCインジケーター（⇨P.86）

Acoustic Cal EQがONのときに点灯します。また、音場補正の自動測定中も点灯します。

⑩ MULTI CH INボタン（⇨P.90）

リアパネルのMULTI CH IN端子に接続した機器を再生するときに押します。

⑪ ACOUSTIC EQボタン（⇨P.86）

「視聴環境の周波数特性の補正」での設定をON/OFFします。

⑫ MASTER VOLUME

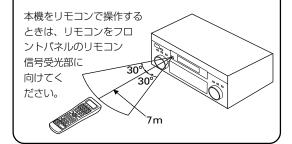
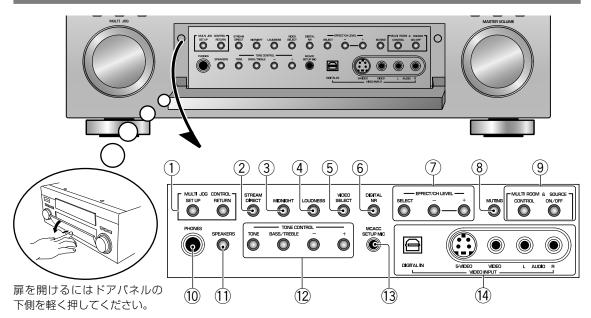
本機の音量を調節します。

リモコンの操作範囲

- リモコンと本機との間に障害物があったり、リモコン受光部との角度が悪いと操作ができない場合があります。
- リモコン受光部に直射日光や蛍光灯などの強い光が当たると誤動作することがあります。
- 赤外線を発射する機器の近くで本機を使用したり、赤外線を利用したほかのリモコン装置を使用したりすると、本機が誤動作することがあります。逆にこのリモコンを操作すると、他の機器を誤動作させることもあります。

本機をリモコンで操作するときは、リモコンをフロントパネルのリモコン信号受光部に向けてください。

フロントパネルドア内部

扉を開けるにはドアパネルの
下側を軽く押してください。

① MULTI JOG CONTROL

SET UPボタン

システムセットアップモードにします。

RETURNボタン

システムセットアップモードのときに1つ前の手順に戻します。

② STREAM DIRECTボタン（⇨P.77）

ストリームダイレクトモードをON/OFFします。

③ MIDNIGHTボタン（⇨P.87）

ミッドナイトリスニング機能をON/OFFします。

④ LOUDNESSボタン（⇨P.88）

ラウドネス機能をON/OFFします。

⑤ VIDEO SELECTボタン（⇨P.96）

音楽を聞きながら他のファンクションのビデオ映像を見るときに押します。

⑥ DIGITAL NRボタン（⇨P.87）

デジタルノイズリダクションをON/OFFします。

⑦ EFFECT/CH LEVEL（⇨P.72, 81~83, 89, 95）

SELECTボタン

SACDダイレクトモード設定、SACDゲイン機能、サウンドディレイ機能、サラウンドモードのエフェクトレベルや出力レベルを調整するスピーカーを選択するときに押します。

＋/ーボタン

サウンドディレイ値やリスニングモードの効果、スピーカー出力レベルなどを調整します。

⑧ MUTINGボタン

音を一時的に消すときに押します。もう一度押すと、ミュートは解除されます。

⑨ MULTI ROOM & SOURCE（⇨P.91）

別の部屋で本機につないだ機器を再生する機能（マルチルーム機能）に使用します。

CONTROLボタン

MULTI JOG ダイヤルとともに、別の部屋（サブルーム）で再生する入力ファンクションを選んだり、MASTER VOLUMEダイヤルで別の部屋の音量を調節します。

ON/OFFボタン

マルチルーム機能を入／切します。

⑩ PHONES（ヘッドホン）端子

ヘッドホンを差し込む端子です。ヘッドホンを使用すると、スピーカーから音声は再生されません。

⑪ SPEAKERSボタン（⇨P.85）

スピーカーシステムのAとB、OFFを切り換えます。

⑫ TONEボタン（⇨P.88）

BASS/TREBLEボタン

＋/ーボタン

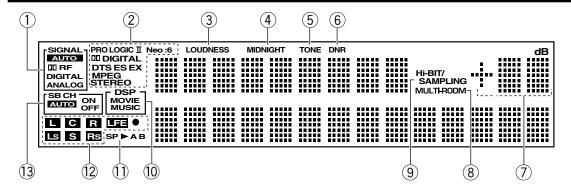
トーンコントロール機能を設定するときに押します。

⑬ MCACC SETUP MIC端子（⇨P.10,40）

オートセットアップを行う際、オートセットアップ用マイクを差し込みます。

⑭ VIDEO INPUT端子（⇨P.26）

VIDEOファンクション用の接続端子です。（光デジタル接続も可能です。）
ポータブルDVDやゲーム機の接続に便利です。

ディスプレイ

① SIGNAL SELECTインジケーター
（⇨P.76）
現在選択されている機器の入力信号の種類が点灯します。

② デジタルフォーマットインジケーター
（⇨P.113～115）
PROLOGIC II: ㏈プロロジックIIまたは㏈プロロジックIIxを処理をしているときに点灯。
Neo :6: Neo: 6処理をしているときに点灯。
㏈DIGITAL: ドルビーデジタル信号を入力しているときに点灯。
DTS: DTS信号を入力しているときに点灯。
ES: ES信号を入力しているときに点灯。
EX: EX信号を入力しているときに点灯。
MPEG: MPEG-2 AAC信号を入力しているときに点灯。
STEREO: 再生出力がフロント2ch（設定によってはサブウーファーも含む）のみの場合と、ヘッドホン挿入時に点灯。

③ LOUDNESSインジケーター
ラウドネス機能がONのときに点灯。

④ MIDNIGHTインジケーター
ミッドナイトリスニング機能がONのときに点灯。

⑤ TONEインジケーター
トーンコントロール機能がONのときに点灯。

⑥ DNRインジケーター
デジタルノイズリダクション機能がONのときに点灯。

⑦ VOLUME（音量レベル）表示部
音量レベルを表示します。－80dBが最小レベル（－－－dBは無音）を表し、＋12dBが最大レベルを表します。

⑧ MULTI-ROOMインジケーター
マルチルーム機能が選ばれているときに点灯します。

⑨ Hi-BIT/SAMPLINGインジケーター
オーディオスケーラー機能がONのときに点灯。

⑩ DSPインジケーター
MOVIE: リスニングモードでMOVIEを選択しているときに点灯。
MUSIC: リスニングモードでMUSICを選択しているときに点灯。
DSP MOVIE MUSIC：MOVIE、MUSICモードでパイオニアオリジナルサラウンドモードを選択しているときに点灯。

⑪ スピーカーインジケーター（⇨P.85）

⑫ プログラムフォーマットインジケーター
㏈DIGITALやDTS信号等が入力された時、そのソースに含まれるチャンネルの情報を点灯します。
L: 左フロントチャンネル
C: センターチャンネル
R: 右フロントチャンネル
LS: 左サラウンドチャンネル
S: サラウンドチャンネル（モノラル）またはサラウンドバックチャンネル
RS: 右サラウンドチャンネル

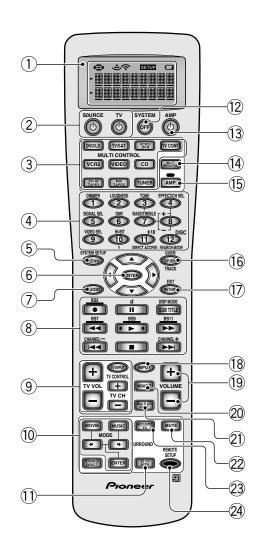
LFE: Low Frequency Effect（超低音の効果音）チャンネル

●：実際にLFE信号が入ってきたときに点灯します。

「6.1ch再生検出信号」の入ったソースが再生されると「LS」「S」「RS」の3つのインジケーターが点灯します。

⑬ SB CHインジケーター（⇨P.84）
サラウンドバックチャンネルの状態を表します。
AUTO:サラウンドバックチャンネルまたはバーチャルサラウンドバック機能がAUTOのときに点灯。
ON: サラウンドバックチャンネルまたはバーチャルサラウンドバック機能がONのときに点灯。
OFF: サラウンドバックチャンネルまたはバーチャルサラウンドバック機能がOFFのときに点灯。

リモコン

本機に付属しているリモコンのボタンとその機能について説明します。ここでは本機の操作に関する機能についてのみ記載します。ソース機器やモニターTVを操作する場合の使用例は「他機器のリモコン操作」（⇨**P.102**）をご覧ください。

以下のボタンはMULTI CONTROLボタンに応じて用途が変わります

② (SOURCE ⏻ のみ)

④ ～ ⑧、⑰

（⇨**P.102**）

以下のボタンはどのMULTI CONTROLボタンが選ばれていても、TV CONTに設定された機器を操作することができます

② (TV ⏻ のみ)、⑨

① リモコンディスプレイ

さまざまな情報を表示します。

：⑥ ▲/▼/◄/►/ENTERボタンを使用するときに点灯します。REMOTE SETUPのときにどのボタンで選択、決定するかを表示します。

：リモコンコードの送受信を知らせます。

SETUP：リモートセットアップのときに点灯します。

：電池の残りが少なくなったときに点灯します。

② ⏻SOURCE電源ボタン

ソース機器の電源をON/OFFします。

⏻TV電源ボタン

テレビの電源をON/OFFします。

③ MULTI CONTROL他機器操作ボタン

リモコンで他機器を操作するとき、または本機の入力を切り換えるとき押します。

④ 数字ボタン

リモコンの操作モードにしたがってさまざまな目的に使用します。ＡＭＰボタン(⑮)を押してリモコンがアンプ操作モードの場合は、それぞれのボタンが以下の働きをします。

DIMMERボタン（⇨**P.96**）

本体のディスプレイの明るさを調整するとき押します。

LOUDNESSボタン（⇨**P.88**）

ラウドネス機能をON/OFFします。

TONEボタン（⇨**P.88**）

BASS/TREBLEボタン

トーンコントロールを設定するときに押します。

EFFECT/CH SELボタン（⇨**P.72,81～83,89,95**）

SACDダイレクトモード設定、SACDゲイン機能、サウンドディレイ機能、サラウンドモードのエフェクトレベルや出力レベルを調整するスピーカーを選択するときに押します。

＋/－ボタン

サウンドディレイ値やリスニングモードの効果、スピーカー出力レベル、トーンコントロールなどを調整します。

SIGNAL SELボタン（⇨**P.76**）

入力信号の種類(DIGITAL/ANALOGなど)を切り換えるとき押します。

DNRボタン（⇨**P.87**）

デジタルノイズリダクション機能をON/OFFします。

VIDEO SELボタン（⇨**P.96**）

音楽を聞きながら他のファンクションのビデオ映像を見るときに押します。

HI-BITボタン（⇨P.89）
オーディオスケーラー機能をON/OFFします。

⑤ SYSTEM SETUP/MENUボタン
システムセットアップモードにします。リモコンがDVD/LDの操作モードのときはメニュー画面を表示します。

⑥ ▲/▼/◄/►/ENTERボタン
各種設定、メニュー画面で項目を選択したり、決定するときに押します。

⑦ AUDIOボタン
リモコンがDVD/LDの操作モードのときに、ディスクに記録されている音声を選択します。

⑧ ソース機器操作ボタン
③ 他機器操作ボタンで選択した他の機器を操作するときに押します。

⑨ TV CONTROLボタン
テレビを操作するボタンです。
③他機器操作ボタンのTV CONTに登録された機器をいつでも操作することができます。

INPUT ボタン
テレビの入力を切り換えます。

TV VOL(＋/－)ボタン
テレビの音量を調節します。

TV CH(＋/－)ボタン
テレビのチャンネルを切り換えます。

⑩ リスニングモードボタン（⇨P.77~80）

MOVIEボタン
リスニングモードをムービーモードにします。

MUSICボタン
リスニングモードをミュージックモードにします。

⬅ ➡ボタン
MOVIEやMUSICなどのリスニングモードを選択します。

ENTERボタン
MOVIEやMUSICなどのリスニングモードを決定します。

STEREO/DIRECTボタン
リスニングモードをステレオモードまたはダイレクトモードにします。

⑪ SB CH MODEボタン（⇨P.84）
サラウンドバックチャンネルのON/OFF/AUTOを選択します。またサラウンドバックスピーカーをNO（無し）で設定しているときは、バーチャルサラウンドバック機能のON/OFF/AUTOを選択します。

⑫ SYSTEM OFFボタン（⇨P.106）
あらかじめ設定したコマンドと、すべてのパイオニア機器の電源を切るとき押します。

⑬ ⏻AMP電源ボタン
本機の電源をＯＮまたはＯＦＦ（スタンバイ状態）にするとき押します。

⑭ MULTI OPERATIONボタン（⇨P.106）
マルチオペレーションを実行するときに押します。

⑮ AMPボタン
リモコンをアンプ操作モードにします。

⑯ TOP MENU/GUIDEボタン（⇨P.102）
リモコンがDVD/LDの操作モードのときはトップメニュー画面を表示します。また、リモコンがTV/ＳＡＴの操作モードのときはＢＳデジタル放送の番組表を表示します。

⑰ RETURN/EXITボタン
本機のシステムセットアップやDVDのメニュー画面の操作などで1つ前の手順に戻したり、解除したりします。

⑱ INPUTボタン
入力ソースを選択します。USB、PHONO、i.LINKに接続した入力ソースも選べます。

⑲ VOLUME(+/－)ボタン
本機の音量を調節するとき押します。

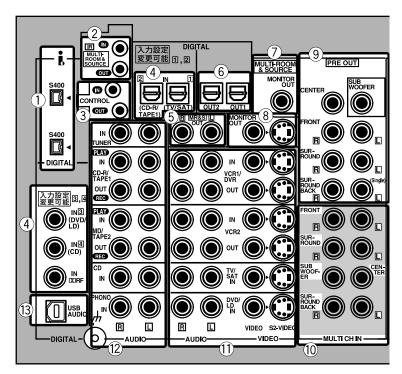
⑳ MIDNIGHTボタン（⇨P.87）
ミッドナイトリスニング機能をON/OFFします。

㉑ MULTI CH INPUTボタン（⇨P.90）
MULTI CH IN端子に接続した機器を再生するときに押します。

㉒ MUTEボタン
音を一時的に消すときに押します。もう一度押すと、ミュートは解除されます。

㉓ ACOUSTIC EQボタン（⇨P.86）
「視聴環境の周波数特性の補正」での設定をON/OFFします。

㉔ REMOTE SETUPボタン（⇨P.98～111）
リモコンの各種設定に使用します。

リアパネル

① i.LINK端子（⇨P.22）
② MR&S IR IN/OUT端子（⇨P.35）
③ CONTROL IN/OUT端子（⇨P.35）
④ デジタル入力端子（⇨P.28）
端子に表示された機器と違う機器を接続するときは入力設定が必要です。（⇨P.68）
⑤ MR&S L/R OUT端子（⇨P.33）
⑥ デジタル出力端子（⇨P.28）
⑦ MR&S MONITOR OUT端子（⇨P.33）
⑧ MONITOR OUT端子（⇨P.21）
⑨ PRE OUT端子（⇨P.34）
⑩ MULTI CH INPUT端子（⇨P.22,27）
⑪ AV機器入出力端子（⇨P.21,24~26）
⑫ アナログ音声入出力端子（⇨P.27）
⑬ USBデジタル入力端子（⇨P.92）
USBケーブルでPCと接続します。

接続コード/ケーブルについて （コード／ケーブルはすべて別売りです。）

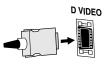
■ビデオコード

一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。

■Sビデオケーブル

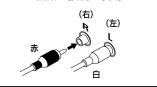
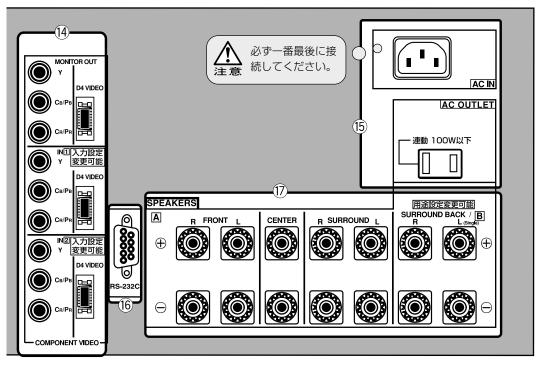
映像信号のYとCの2つの信号からなり、コンポジットよりも高品位な映像品質を楽しむのに適しています。

■D端子ケーブル

映像色差信号とフォーマット識別制御信号を、1つのコネクタで接続できるケーブルです。コンポーネント映像ケーブルと同等の映像品質を楽しめます。

■コンポーネント映像ケーブル

映像信号のY、CB/PB、CR/PRの3つの信号からなり、S ビデオケーブルよりも高品位な映像品質を楽しむのに適しています。（ビデオコード3本での接続も可能です）

■オーディオコード

オーディオ機器の接続に使用します。

⑭ COMPONENT VIDEO入出力端子（⇨**P.21,25**）
接続するときは、必ず入力設定が必要です。（⇨**P.69**）

⑮ AC OUTLET/AC IN（⇨**P.36**）

⑯ RS-232C端子（⇨**P.64**）
パソコンの接続端子です。Advanced MCACCに使用するグラフィック信号を出力します。

⑰ スピーカー端子（⇨**P.29**）

メモ

本機リアパネルのS端子にはS2-VIDEOと書かれていますが、S、S1、S2と書かれた機器すべてと接続が可能です。また同様に本機のD端子にはD4 VIDEOと書かれていますが、D1、D2、D3、D4と書かれた機器すべてと接続が可能です。

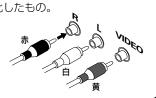
■同軸ケーブル/光ファイバーケーブル

デジタル機器の接続に使用します。

同軸ケーブル（またはビデオコード）　光ファイバーケーブル

- 接続の際は端子の向きを合わせてください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉まらなくなることがあります。
- 長さは3m以下のものを使用してください。
- プラグにホコリが付着したときは、柔らかい布で拭いてから接続してください。

■AVコード

オーディオコードとビデオコードの一体化したもの。

■i.LINKケーブル

ケーブルに表示されている⬆を、本体に表記されている▲と合わせてまっすぐ挿入してください。斜めから無理に挿入すると端子が故障する恐れがあります。

本機は最大転送速度が400Mbpsのため、S400対応で長さ3.5m以下の4ピンi.LINKケーブルを使用してください。

※推奨ケーブル：オーディオテクニカ製
AT-DVC44/1.0(長さ1.0m)
AT-DVC44/1.5(長さ1.5m)
AT-DVC44/2.0(長さ2.0m)
AT-DVC44/3.0(長さ3.0m)

各機器の接続

機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

映像機器の接続について(パイオニアビデオコンバーター)

本機は入力された映像信号を異なる種類の信号に変換することのできるビデオコンバーターを搭載していますので以下のようにビデオ機器との接続方法が選べます。各接続コード/ ケーブルについては「接続コード/ ケーブルについて」(⇨**P.18**)をご覧ください。

映像をテレビに表示する

ソース機器からの映像信号をテレビで表示するには下記の「○」の組み合わせで接続できます。

映像コードの組み合わせ

TV(モニター)側の映像コード / ソース側の映像コード	ビデオ(コンポジット)	Sビデオ	コンポーネント/D
ビデオ(コンポジット)	○	○	○
Sビデオ	○	○	○
コンポーネント/D	×	×	○*注

* この組み合わせの場合、システムセットアップのComponent-In select設定(⇨**P.69**)で、つないだ入力機器を割り当てる必要があります。

映像を録画する

ソース機器からの映像信号を録画するには必ず同じコードで接続します。

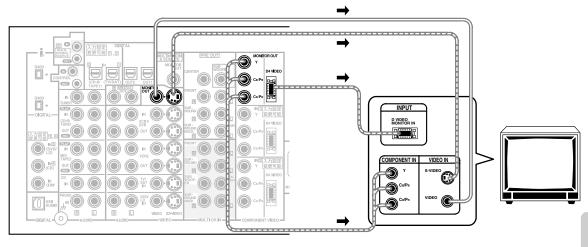
映像コードの組み合わせ

映像機器 / ソース機器	ビデオ(コンポジット)	Sビデオ
ビデオ(コンポジット)	○	×
Sビデオ	×	○
コンポーネント/D	×	×

メモ

- 入力機器とテレビの両方にSビデオ端子/コンポーネント端子が付いているときは、Sビデオ端子/コンポーネント端子で接続すると、より鮮明な映像を再生することができます(コンポーネント端子どうしの接続が最も良い画質となります)。
- テレビによっては、Sビデオ入力とコンポジットビデオ入力の両方を接続していると、信号の有無にかかわらず常にSビデオ入力が優先され、本機とコンポジットビデオ入力端子でのみ接続している機器の映像を見ることができない場合があります。詳しくはテレビの取扱説明書をご覧ください。

TV(モニター)の接続

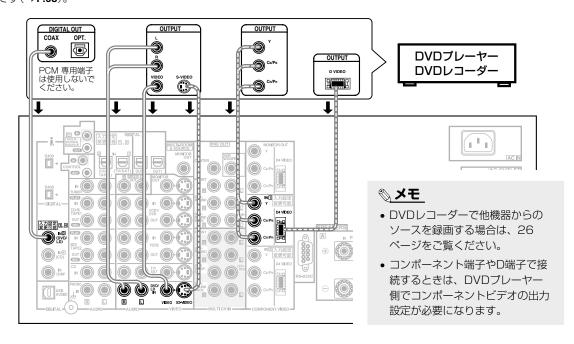
「映像機器の接続について」(⇨**P.20**)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(⇨**P.18,19**)をご覧ください。

メモ

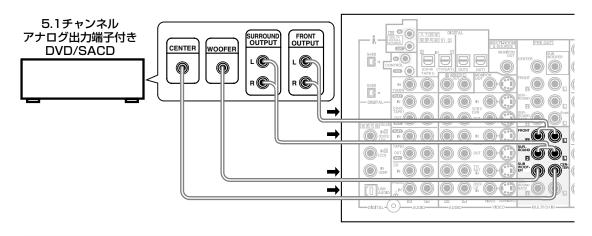
TV(モニター)の1つの入力にSビデオやコンポーネントビデオなど数種類のコードを複数接続すると映像が乱れたり汚く映ることがあります。詳しくはTV(モニター)の取扱説明書をご覧ください。

DVDプレーヤー/DVDレコーダーの接続

「映像機器の接続について」(⇨**P.20**)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(⇨**P.18,19**)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは、必ず「コンポーネントビデオ入力の設定」を行ってください(⇨**P.69**)。
同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(⇨**P.68**)。

メモ

- DVDレコーダーで他機器からのソースを録画する場合は、26ページをご覧ください。
- コンポーネント端子やD端子で接続するときは、DVDプレーヤー側でコンポーネントビデオの出力設定が必要になります。

5.1chアナログ接続

DVD／SACDプレーヤーに5.1chアナログ出力端子がある場合は、本機のMULTI CH INPUT端子と接続してDVDオーディオ／SACD再生を行うことができます。DVDオーディオまたはSACDを再生するには入力モードの切り換えが必要です。詳しくは「DVDオーディオ／SACD（マルチチャンネル入力）の再生」（⇨ P.90）をご覧ください。また、i.LINK接続を行っても、お楽しみいただけます。

メモ

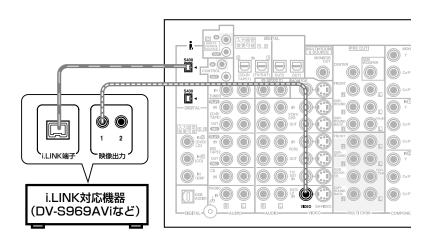
DVD／SACDプレーヤー側の設定で、5.1chアナログ出力をONに設定しないと音が出ません。詳しくはDVD／SACDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

i.LINK対応機器の接続

接続には、S400対応の4ピンi.LINKケーブルを使用してください（⇨P.19）。

i.LINK AUDIOインターフェースでは、映像信号は伝送されないため、ビデオ機器と接続する場合は映像信号の接続も必要になります。「映像機器の接続について」（⇨ P.20）をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。またコンポーネント端子やD端子で接続したときには、必ず「コンポーネントビデオ入力の設定」を行ってください（⇨ P.69）。（すでにその機器の映像信号が本機と接続されている場合は兼用することができます。）

接続後、「i.LINK入力の設定」（⇨P.70）を行ってください。その際、機器からの映像信号を接続した端子と同じ入力ファンクションにi.LINK対応機器を割り当ててください。（正しく割り当てられないと、映像と音声を同時に選択できません。）

必要に応じて再生機器側の出力設定を行ってください。詳しくは、再生機器側の取扱説明書を参照してください。

i.LINKについて

i.LINKとは、デジタル音声などのデータ転送や接続した機器に対して操作なども行えるシリアル転送方式のデジタルインターフェース IEEE1394の呼称で、IEEE1394は、米国電子電気技術協会(IEEE) によって標準化された国際標準規格です。i.LINKとi.LINKロゴ i. は、ソニー株式会社の商標です。
本機はi.LINK AUDIO(A&Mプロトコル)に対応しているので、本機とi.LINK対応機器とをi.LINKケーブルで接続すると、DVDオーディオやSACDなどのマルチチャンネル音声も、1本のケーブルだけでデジタルでやり取りすることができます。また複数のi.LINK対応機器をつないだときは、他の機器を介してつないでも、操作やデータのやりとりができます。このため接続順序は、あまり気にする必要ありません。
また本機でi.LINK接続したSACDやCDの再生を行うとき、接続した再生機器がPQLS*または同様のレートコントロール機能に対応していれば、デジタル音声部分はジッターレスで伝送することができます。

＊PQLS(レートコントロール)
PQLS(Precision Quartz Lock System)とは、本機の高精度な水晶発振器を使用することで、ジッターのない状態にてデジタル/アナログ変換を行うことができるi.LINKインターフェース上のデジタルオーディオの伝送技術です。この技術を動作させるには、本機とPQLSまたは同様のレートコントロール機能に対応したプレーヤーとが、i.LINK接続されている必要があります。

著作権保護システム

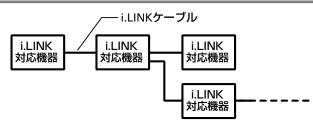
i.LINK接続を通してDVDオーディオ、SACD、DVD(コピー自由なディスクは除く)の音声を再生するには、プレーヤーとアンプの双方がDTCP(Digital Transmission Content Protection)とよばれる著作権保護システムに対応している必要があります。DTCPはデータの暗号化と相手機器の認証からなるコピープロテクション技術です。本機はDTCPに対応しています。お手持ちのプレーヤーについてはプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

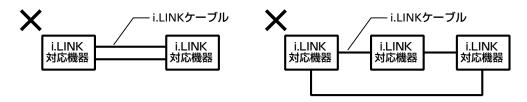
この機器のi.LINKインターフェースは、以下の規格に基づいて設計されています。
1) IEEE Std 1394a-2000, Standard for a High Performance Serial Bus
2) Audio and Music Data Transmission Protocol 2.0
この規格のAM824 sequence adaptation layersの中の、IEC60958 bitstream、DVD-Audio、SACDに対応しています。

i.LINKネットワーク

下図のようにして複数のi.LINK機器を接続することができます。

デイジー・チェーン型(数珠つなぎ)で接続の場合は、最大17台まで接続できます。

i.LINK端子が3個以上ある機器の場合、途中から分岐してツリー型に接続することもできます。ツリー型で接続の場合は、最大34台まで接続できます。

接続が輪(ループ)にならないように接続する。

デジタル信号は、接続したすべてのi.LINKケーブルに流れます。信号を出力した機器に同じ信号が戻らないよう、輪にならないようにつないでください。接続が輪(環状)になることを「ループ」と呼びます。

メモ

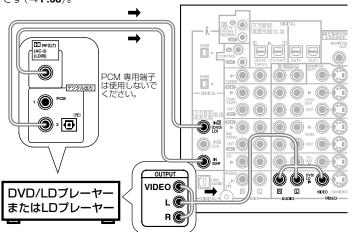
- i.LINKの伝送フォーマットには、本機のような「i.LINK AUDIO(A&Mプロトコル)」、BSデジタルのような「MPEG-2 TS」、DVDレコーダーやデジタルビデオのような「DV」といった種類があります。i.LINK AUDIO以外の機器やパソコン周辺機器を本機と接続したときには、正常にデータ転送ができません。また、誤動作する場合もあります。
- i.LINK対応機器の再生中は、他の機器のi.LINKケーブルを外したり、新しい機器を接続したり、電源のオン/オフは行わないでください。
- i.LINK対応機器の中には、電源がスタンバイ状態やオフになっていると、データを中継できない機器があります。接続するi.LINK対応機器の取扱説明書もご覧ください。本機はスタンバイ状態のとき、i.LINKのデータを中継できません。
- i.LINK対応機器には、その機器が対応している最大データ転送速度がi.LINK端子の周辺に表記されています。i.LINKの最大データ転送速度は、約100/200/400Mbps*が定義されており、200MbpsのものはS200、400MbpsのものはS400と表記されます。本機の i.LINK最大データ転送速度は、400Mbpsです。S100やS200の機器をつないだ場合や、機器の仕様により、実際の転送速度が400Mbpsより遅くなる場合があります。できるだけ、最大データ転送速度が同じ機器どうしを並べて接続してください。

  * Mbps(メガビーピーエス)とは、「Mega bits per second」の略で、1秒間に通信できるデータの容量を示しています。400Mbpsでは、1秒間に400メガビットのデータを転送します。

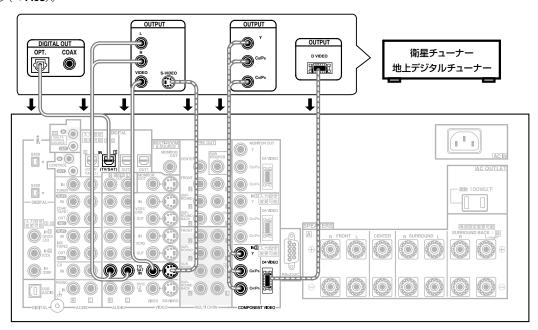
- i.LINK機能は、すべてのi.LINK対応機器間での接続動作を保証するものではありません。i.LINK対応機器間でデータやコントロール信号がやりとりできるかどうかは、それぞれの機器の機能によって異なります。

DVD/LDコンパチブルプレーヤーまたはLDプレーヤーの接続

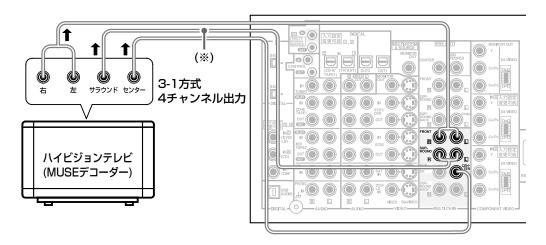
DVD/LDプレーヤーまたはLDプレーヤーにDD RF出力端子がある場合は、DD RF端子も接続します。これは、ドルビーデジタルLDソフトの再生に必要です。また、LDのアナログオーディオ信号はデジタル出力されませんのでアナログオーディオ接続も行ってください。
同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(⇨**P.68**)。

メモ

- DDRF端子の接続は同軸ケーブルで行います。
- DDRF端子に接続した機器を再生するときは、リモコンのSIGNAL SELECTボタンで入力信号をDDRFに切り換えてください(DDRFはDDRF端子が割り当てられている入力ファンクションを選んでいるときのみ選択することができます)。

BS/CS/地上デジタルチューナーの接続

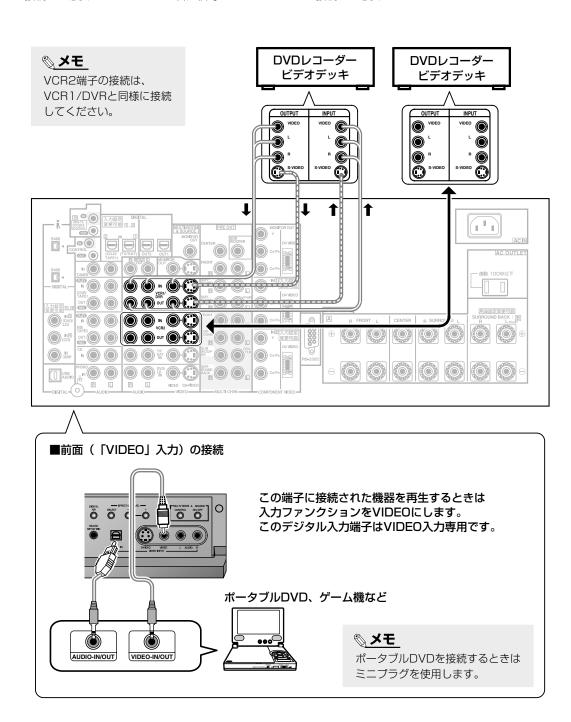
「映像機器の接続について」(⇨**P.20**)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(⇨**P.18,19**)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは、必ず「コンポーネントビデオ入力の設定」を行ってください(⇨**P.69**)。
同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(⇨**P.68**)。

ハイビジョンテレビ(またはMUSEデコーダーの3-1方式4チャンネル放送)との接続

本機リアパネルのMULTI CH IN端子に、オーディオコード(別売)で接続します。
この端子に接続した機器の音声を再生するには、入力モードの切り換えが必要です。詳しくは「DVDオーディオ／SACD(マルチチャンネル入力)の再生」(⇨**P.90**)をご覧ください。

メモ

サラウンドの接続(※)は1P→2Pの分岐コード(モノラル→ステレオ)をお使いください。
(ハイビジョンテレビ(ＭＵＳＥデコーダー)側にサラウンド右／左の出力がある場合は、通常のステレオオーディオコードをお使いください。)

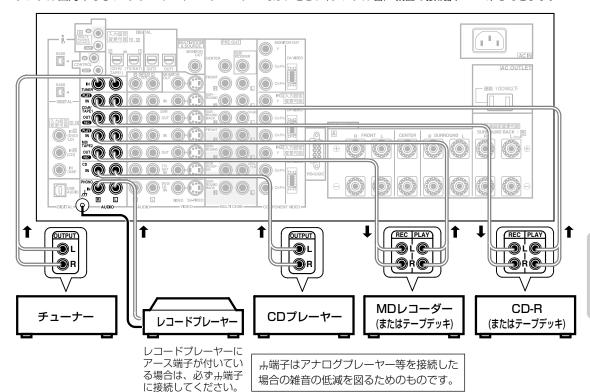
接続

DVDレコーダーやビデオデッキの接続

「映像機器の接続について」(⇨**P.20**)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(⇨**P.18,19**)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは、必ず「コンポーネントビデオ入力の設定」を行ってください(⇨**P.69**)。
録画をすることを前提とする場合は、ソース機器と録画機器の映像信号をコンポジットかSビデオのどちらかに統一して接続する必要があります。また音声信号についてもアナログ接続する必要があります。

アナログ音声機器の接続

デジタル出力のあるCDプレーヤーやMDレコーダーでは、さらに「デジタル音声機器の接続」（⇨**P.28**）もできます。

レコードプレーヤーにアース端子が付いている場合は、必ず⏚端子に接続してください。

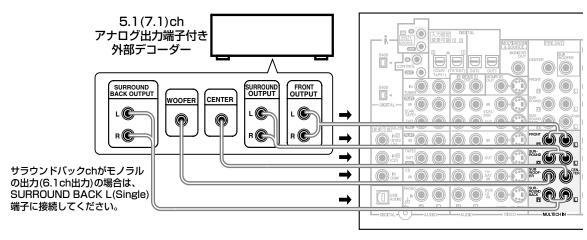
⏚端子はアナログプレーヤー等を接続した場合の雑音の低減を図るためのものです。

メモ

カセットデッキを設置する場所によっては、再生したときに雑音などが発生する場合があります。これはアンプのトランスによるリーケージフラックス（漏れ磁束）の影響によるものです。このようなときには、設置する場所を変えるか、アンプから離して設置してください。

注意

工場出荷時の設定のままでPHONO/LINE端子にレコードプレーヤー以外を接続しないでください。大音量を出力し、スピーカー等を破壊する恐れがあります。PHONO/LINE端子にレコードプレーヤー以外の機器またはイコライザ内蔵レコードプレーヤーを接続する際は、「PHONO/LINE Setup」（⇨**P.73**）でPHONO/LINE端子をLINEに設定してください。

外部デコーダーのアナログ接続

マルチチャンネルアナログ出力端子（5.1chまたは7.1ch）を持つ外部デコーダーとの接続には、本機のMULTI CH INPUT端子を使用します。この端子に接続した機器の音声を再生するには、入力モードの切り換えが必要です。詳しくは「DVDオーディオ／SACD（マルチチャンネル入力）の再生」（⇨**P.90**）をご覧ください。

デジタル音声機器の接続

ドルビーデジタルやDTSソフトを再生するには、デジタル接続が必要です。接続は同軸ケーブルまたは光ファイバーケーブルで行います(1つの機器に対してどちらか一方のみで接続します)。

✎メモ

DIGITAL OUT(1,2)端子はデジタル入力された信号を出力しますので、デジタル録音をするには光デジタル入力を持つデジタル録音機器と接続してください。

衛星チューナー
(⇨P.25)

CD-R
(またはテープデッキ、MD)

CDプレーヤー

DIGITAL OUT
DIGITAL IN
DIGITAL OUT
DIGITAL OUT

i.LINK対応機器
(DV-S969AViなど)
(⇨P.22)

Bタイプ

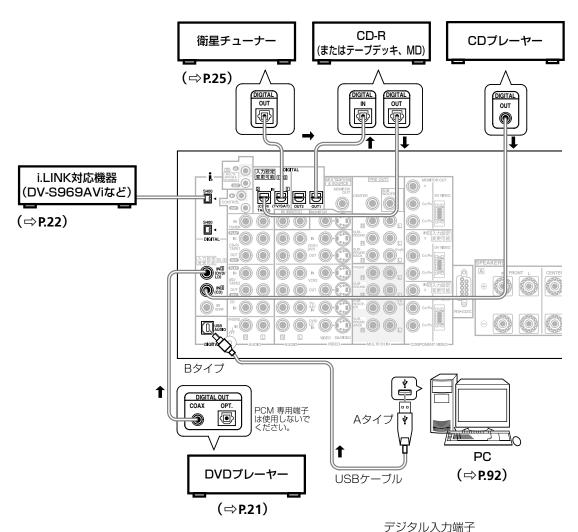
DIGITAL OUT
COAX OPT.

PCM 専用端子は使用しないでください。

Aタイプ

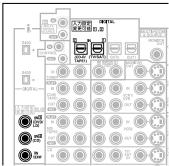
DVDプレーヤー
(⇨P.21)

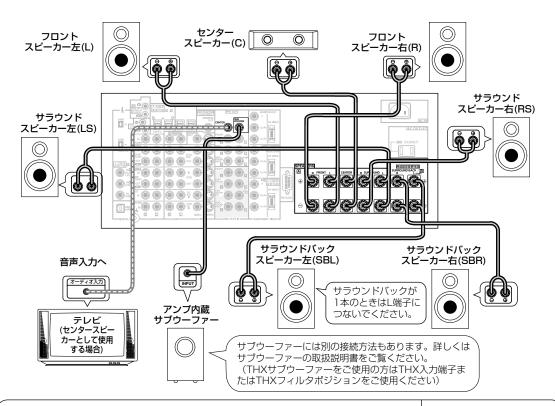
USBケーブル

PC
(⇨P.92)

デジタル入力端子

✎メモ

どのデジタル入力端子をどの機器に使用するかは自由に変更することができます。ただし、工場出荷時の設定(右図)と異なる接続を行う場合は「Digital-In Select(デジタル入力の設定)」(⇨**P.68**)にて設定の変更を行ってください。

- Digital-1~4には[TUNER]、[PHONO/LINE]、[VIDEO]、[USB]を選ぶことができません。
- RF INには[TUNER]、[PHONO/LINE]、[VIDEO]、[CD]、[CD-R]、[MD]、[USB]を選ぶことができません。

スピーカーの接続

以下のように各スピーカーを接続します。本機でサラウンドを楽しむためには、7本のスピーカーとサブウーファーを接続することをお勧めします。

■SPEAKER(スピーカー)端子

① 線をねじる。

② スピーカー端子をゆるめ、スピーカーコードを差し込む。

③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます(詳しくはプラグの説明書をお読みください。)

- **公称インピーダンスが6Ω〜16Ωのスピーカーをご使用ください。**
  本機ではスピーカーインピーダンスを変更することができます。工場出荷時は8Ω〜16Ωですが、お手持ちのスピーカーが6Ω以上8Ω未満の場合は設定を変更してください。変更のしかたは、「スピーカーインピーダンスの切り換え」(次ページ)をご覧ください。
- スピーカーと本機の⊕および⊖端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕および⊖が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

✎メモ

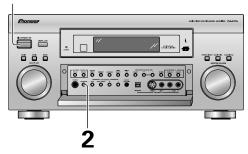
また、以下のようなときはサラウンドバックスピーカーをスピーカー端子Bとして使用することもできます。

- メインのリスニングルーム以外の場所(キッチンなど)でも聴きたいとき。(この場合はステレオ再生になります)
- フロントスピーカーをBi-Ampで使いたいとき。
- マルチルーム機能で、サブルームのスピーカーを接続するとき。

サラウンドバックスピーカーをスピーカー端子Bとして使用するときは「スピーカーの応用接続」(⇨**P.32**)をご覧ください。

接続

スピーカーインピーダンスの切り換え

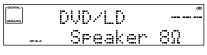
スピーカーインピーダンスの設定は、6Ω以上8Ω未満の設定と8Ω～16Ωの設定の2通りあります。お手持ちのスピーカーが6Ω以上8Ω未満の場合は以下の手順で設定を変更してください。(工場出荷時は8Ω～16Ωに設定されています。)

1 本機をスタンバイ状態にする。

スタンバイインジケーターが点灯します。

2

SPEAKERSボタンを押しながらSTANDBYボタンを押す。

スピーカーインピーダンスが変更されます。

再度、設定を変更したいときは手順1からやり直してください。

スピーカーインピーダンスが8Ω～16Ωの場合

スピーカーインピーダンスが6Ω以上8Ω未満の場合

スピーカーの配置について

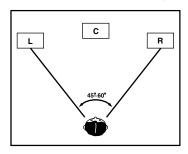
スピーカーの配置はマルチチャンネルサラウンド再生において重要な役割を果たします。

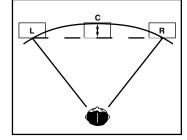
一般家庭における各スピーカーの配置の例は以下のとおりです。以下の図を参考にしながらリスニングルームに合わせたスピーカーの配置をお試しください。

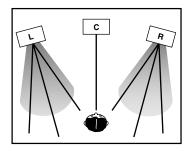
メモ

スピーカーを床に直接設置すると、建物に直接振動が伝わり音質が変わってしまうことがあります。また、柔らかすぎる棚の上なども音質に影響がありますので、専用スタンドやコンクリートブロックなどの使用をお勧めします。

フロント & センター

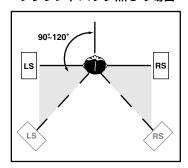
リスニングポイントからの角度

センター(C)を使用する場合は広めに、センター(C)を使用しない場合は狭く配置することをお勧めします。(上図の範囲)

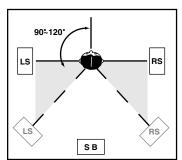
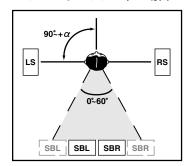
奥行き

センター(C)はフロント(L/R)と同一面からフロントまでの距離を超えない位置に。フロントよりも前方だと音場感を損ねます。

スピーカーの向き

中抜け感を防ぐために多少内振りに。ただし、あまり内振りにしすぎると広がり感などを損ねます。

サラウンド & サラウンドバック

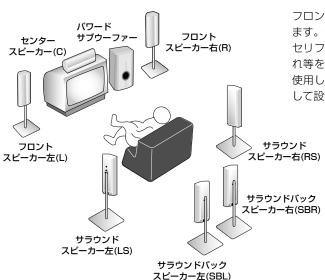
サラウンドバック無しの場合

サラウンドバック1本の場合

サラウンドバック2本の場合

サラウンドスピーカー(LS/RS)は耳の位置より上方60cm〜1mでやや下振りにします。マルチチャンネルの音楽再生と両立したいときは後方寄りに配置します。LSとRSが真正面で向き合わないように多少左右に振ったりしてみてください。

サラウンドバックスピーカー(SB/SBL/SBR)も耳の位置より上方60cm〜1mでやや下振りにします。サラウンドバック2本の場合はSBLとSBRを隣接させリスニングポジションから等距離に設置(設定)するとTHXモード(⇨**P.77~79**)の効果が最大限発揮されます。

サブウーファー

特に制限はありませんが、他のスピーカーの低音出力との打ち消し合いが起こらないような場所に配置してください。また、壁の近くに設置すると建物との共振により低音が極端に増強される場合がありますのでご注意ください。

モニターTVとスピーカーの位置関係

フロントスピーカーはテレビから等距離になるようにします。センタースピーカーはモニターＴＶ画面に近い方がセリフなどが自然に聞こえます。ただし、テレビが色ずれ等を起こすのを防止するため、防磁型のスピーカーを使用してください。防磁型でない場合は、テレビから離して設置してください。

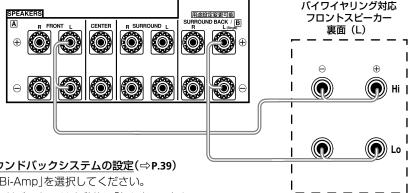
センタースピーカーをテレビの上に設置するときは、適切な方法で固定してください。固定しないと地震などの外部の振動により、スピーカーが落下してケガをしたり、スピーカーを破損する原因となります。

スピーカーの応用接続（バイアンプ/別エリアでのステレオ再生）

リアパネルのSURROUND BACK端子は、サラウンドバックスピーカーを接続するだけでなく、フロントスピーカーの高音質化や、別エリアでのステレオ再生に使用できます。

フロントスピーカーのBi-Amp接続

フロントch用スピーカーがバイワイヤリング対応であれば、さらに高品位なBi-Amp再生が可能です。ただし、スピーカーシステムは最大5.1chまでとなります。
バイアンプ接続は、バイワイヤリング対応の高域用と低域用の出力を、それぞれ別のパワーアンプに接続して駆動する方法です。（下記のバイワイヤ接続を、さらに進めた方法です。）

・接続

スピーカー端子AのフロントとスピーカーB端子からは同じ音が出力されますので、Hi/LoはA/Bのどちらとでも接続できます。

・サラウンドバックシステムの設定（⇨P.39）
「Front Bi-Amp」を選択してください。
サラウンドバックchは自動的に「無し」に固定され、最大5.1chのシステムになります。

・スピーカーシステムA/Bの切り換え（⇨P.85）
A+B(SP►AB)が通常再生状態となります。
このシステムではサラウンドバックch用の回路をスピーカー端子Bに使用しますので、サラウンドバックchのプリアウト端子は端子Bと同じ出力になります。（マルチチャンネル信号はダウンミックスされて、2ch出力になります。）

注意
フロントスピーカーのBi-Amp接続をするときはアンプへの悪影響を防ぐため、スピーカーに付属されているHi-Loのショート金具は必ず外してください。詳しくはスピーカーの取扱説明書もご覧ください。

メモ
ネットワークが着脱できるスピーカーの場合、ネットワークが外れたままだと効果が得られませんのでご注意ください。

Bi-wire(バイワイヤ接続の場合)

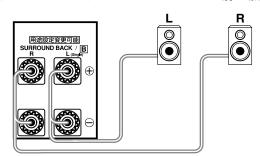
スピーカーの高音域／低音域用端子を、それぞれ独立したケーブルにてアンプと接続する方法です。
高音域と低音域を独立させることで、低音域の逆起電力による高音域への影響を最小限とし、より一層の高音質をお楽しみいただけます。

「Normal System」または「Second Zone」でシステムを組む場合は、Bi-AmpではなくBi-wire接続にします。スピーカー端子Aに、バイワイヤリング対応スピーカーのHiとLoの2本を並列に接続してください。

この方法で異なる2つのスピーカーを接続しないでください。

Second Zone(別エリアでのステレオ再生)接続

寝室やキッチンなど、メインのリスニングルームとは別の場所のステレオ再生が可能です。

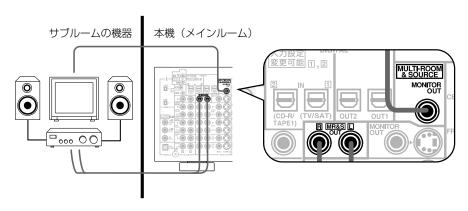
・接続

・サラウンドバックシステムの設定(⇨P.39)
「Second Zone」を選択してください。
サラウンドバックchは自動的に「無し」に固定され、最大5.1chのシステムになります。

・スピーカーシステムA/Bの切り換え(⇨P.85)
BまたはA＋Bを選択してください。

スピーカーの応用接続(マルチルーム)

本機を操作して、本機のある部屋(メインルーム)とは別の部屋(サブルーム)で本機につないだ機器の再生を楽しめます(マルチルーム機能)。メインルームとサブルームで同時に同じソースを再生することはもちろん、別々のソースを再生することもできます。

基本的なマルチルーム接続

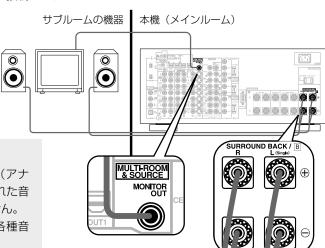
本機に別のアンプとテレビモニターを図のように接続します。

SURROUND BACK端子を使用したマルチルーム接続

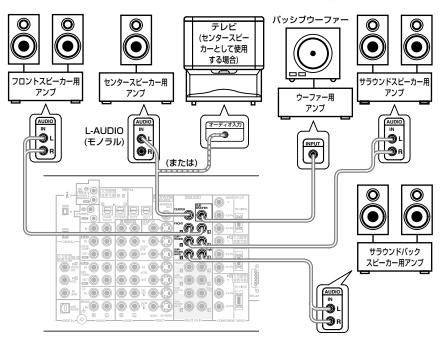
本機にテレビモニターとスピーカーを図のように接続します。

・サラウンドバックシステムの設定(⇨P.39)
「MR & S」を選択してください。
サラウンドバックchは自動的に「無し」に固定され、最大5.1chのシステムになります。

・スピーカーシステムA/Bの切り換え(⇨P.85)
スピーカーシステムはAまたはOFFになります。

メモ

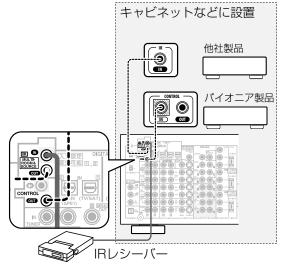
- サブルームで再生できる音声はステレオ(アナログ)音声で、i.LINKやデジタルで入力された音声、マルチチャンネル音声は再生できません。
- リスニングモードやコントロールなどの各種音声機能は使えません。

他のパワーアンプの接続

他のアンプをパワーアンプとして本機と組み合わせることができます。各プリアウト端子から出力される音はスピーカーシステムによって変わります。詳しくは「スピーカーシステムA/Bの切り換え」(⇨**P.85**)をご覧ください。

✎ メモ

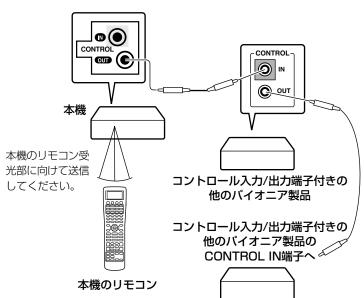
この接続を行った場合、個々のアンプの能力やボリューム位置などにより音場補正を正確に行うことができない場合があります。

IRレシーバーの接続

ステレオ機器などをキャビネット内などのリモコン信号が届かない場所に設置している場合でも、市販のIRレシーバーを使用して、リモコンでシステムの操作ができます。本機や接続した機器(パイオニア製品だけでなく、他社製品も含む)が操作できます。

メモ

- IR接続は、IR端子が付属している機器を使用してください。
- 接続に必要なケーブルの種類については、IRレシーバーに付属の取扱説明書を参照してください。
- IRレシーバーのリモコン受光部に蛍光灯から強い明かりが直接照射されている場合は、リモコン操作ができないことがあります。
- 他社製品ではIRという言葉が使用されていない場合があります。お使いの機器に付属されている取扱説明書で確認してください。
- フロントパネルのリモコン受光部とIRレシーバーのリモコン受光部が同時に受信した場合は、IRレシーバーが優先されます。

コントロール入力/出力コードの接続

コントロール入力/出力端子の付いた複数のパイオニア製品を、本機のリモコン受光部を使って集中コントロールすることができます。リモコン受光部を持たない機器や、受光部が信号を受けられないところに設置した機器もリモコン操作が可能となります。

メモ

- 本機のCONTROL IN端子にコントロールコードを接続すると、リモコンを本機に向けて直接操作することはできません(リモコン信号受光部が機能しなくなります)。
- 接続には市販のモノラルミニプラグ付きコード(抵抗なし)をお使いください。
- コントロール端子の接続をする場合は、必ず音声ケーブルまたは映像ケーブルの接続もしてください。光デジタル接続だけでは、システムコントロールは正しく動作しません。

電源コードの接続

すべての接続が終了したら、電源コードを家庭用電源コンセント(AC 100V)に接続します。

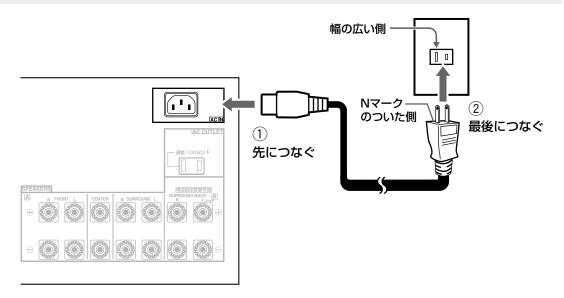
電源コードのつなぎかた

本機の電源コードは極性管理されています。音質向上のため、極性を合わせることをお勧めします。下図のように電源プラグのNマークのある側をコンセントの幅の広い方(アース側)に合わせて差し込んでください。

警 告

- **本機の電源コードは着脱式になっていますが、付属しているコード(電流容量15A、機器側3Pプラグインソケット方式)以外の電源コードはご使用にならないでください。**
- 本機のAC INLETのアース端子は本機のシャーシに接続されていません。

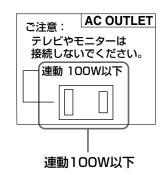
メモ

- 旅行などで長期間本機を使用しない場合は、必ず電源コンセントから電源コードを抜いておいてください。ただし、1カ月程度電源コンセントから電源コードを抜いた状態または主電源をOFFにしておくと本機で設定した各種設定がリセットされますのでご注意ください。

予備コンセント(AC OUTLET)の接続

[連動100W以下]

本機の電源スイッチのON/STANDBY(OFF)の切換に連動して、接続した機器の電源をON/OFFできます。
接続した機器の消費電力が100Wを超えないようにしてください。

注 意

- 消費電力がパネルに表示されているワット数を超えるような電気器具(暖房、アイロン、テレビ、トースター、ドライヤーなど)は絶対に接続しないでください。機器の故障や火災の恐れがあります。
- 表示されている消費電力が本機のパネル表示値より少なくても、テレビ、サブウーファー、パワーアンプは接続しないでください。電源を入れたときや大きな音で再生するときに大きな電流が流れる場合があります。

サラウンドの設定について

本機のメニュー画面の項目「Surround Setup」を操作して視聴環境に合ったサラウンド設定を行います。

音場補正の設定項目の詳細と効果

以下4 つの設定（補正）を音場補正と呼んでいます。サラウンドの設定とは、この音場補正を行うことをいいます。本機のオートセットアップ機能を使うと、これら4つの設定（音場補正）を自動で行うことができます。

スピーカーシステムの設定（Speaker Systems）

これはソースに含まれる音声成分のすべてを再生するための基本設定です。この設定が正しく行われないと、サウンドトラックの特定チャンネルに収録された音声が再生されなかったり、低域成分が欠落してしまう、などの不具合が発生する場合があります。スピーカー接続の有り/無しや低域再生能力の大小、クロスオーバー周波数などを設定し、上記の問題を回避します。

スピーカー出力レベルの設定（Channel Level）

リスニングポジションでの各チャンネルの音量レベルを一定に合わせる設定です。「スピーカーまでの距離設定」と同様に、音の定位感や移動感を正確に再現することが目的です。この設定が正しく行われないと、いわゆる「バランスの悪い音」になってしまいます。これまでは聴感での設定が一般的でしたが、この方法では正確な設定は不可能です。プロのスタジオ・エンジニアは、ミキシング作業前に必ず専用の音圧測定器で測定を行い、バランスの微調整を施します。本機では、MCACCによって、このプロレベルの精密な調整がだれでも簡単にできるようになりました。

スピーカーまでの距離の設定（Speaker Distance）

実際には距離を設定することで各チャンネル間の遅延（ディレイ）を算出・補正しています。マルチチャンネル再生では特に重要で、音の定位感や移動感を正確に再現するために必要です。測定用のマイクを使用して実測した場合は、電気的な遅延現象（特にサブウーファーに多く見受けられる）をも測定します。よって、メジャー等を使った物理的な距離測定とは違う値が設定される場合もあります。

視聴環境の周波数特性の補正（Acoustic Cal EQ）

「視聴環境の周波数特性の補正」とは、リスニングポイントでの視聴環境トータルの周波数特性（以下、F特）の補正を意味します。全チャンネルに同じ種類のスピーカーを使用しても、リスニングポイントでは音色が違って聞こえます。これは、設置場所・設置方法・壁面・内装、など様々な影響により実際のF特が違ってしまうためです。
本機の「視聴環境の周波数特性の補正」では、リスニングルーム固有のF特まで含めた補正をすることで、各チャンネルの音のつながりが飛躍的に向上し、これまでにない実像感やリアルな移動感を再現します。スタジオや映画館などにおいてはこの補正は絶対に欠かせないものです。これがホームシアターとの大きな差でしたが、当社の研究により、一般家庭環境におけるF特の補正には最も有効であるエンベロープ補正方式を採用し、この差を埋めることを可能にしました。
全チャンネルの周波数特性をフラットにする「ALL CH ADJUST」と、フロントスピーカーの特性に合わせ込む「FRONT ALIGN」の2種類の補正カーブのほか、手動で自由に調整できる［CUSTOM 1/2］を用意しました。

ALL CH ADJUSTとは：すべてのチャンネルにおいて調整を行うことができます。部屋の特性を含めて、サブウーファーを除いたすべてのチャンネルの周波数特性をフラットに補正します。
FRONT ALIGNとは：フロント左／右（L/R）以外のチャンネルにおいて調整を行うことができます。フロント左／右（L/R）とサブウーファーを除いたすべてのチャンネルの周波数特性を、フロントchの特性に合わせます。

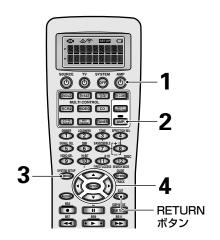
メモ

一度登録した設定内容は本機に記憶されるため、システムを使用するたびに設定し直す必要はありません。ただし、スピーカーシステムの構成や配置を変更したり、新しくスピーカーを追加したときには、設定し直す必要があります。また、設定内容は1カ月程度、主電源をOFFまたはコンセントを抜いた状態にしておくとクリアされますのでご注意ください。

サラウンドの設定

■ 操作を行う前には必ず本機の主電源ボタンをON(▬)にしてください。

設定項目の選択

電源を入れてメニュー画面を開くまでの手順です。ここから各設定の操作に進めます。

メニュー操作は、リモコンの▲▼ボタンで項目を選び、ENTERボタンで決定します。

1 AMP

本機の電源を入れ、テレビの電源も入れる。

テレビは本機の出力映像が表示されるようにしておきます。

2 AMP

リモコンをアンプ操作モードにする。

3 SYSTEM SETUP MENU

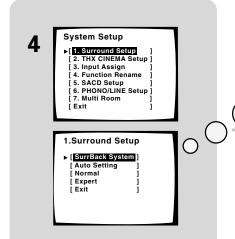
システムセットアップにする。

テレビ画面にセットアップメニューが表示されます。

4 ENTER

[1.Surround Setup]を選んでENTERボタンで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。
「Exit」を選んで、決定するとシステムセットアップを終了します。

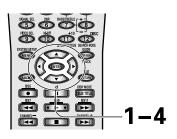
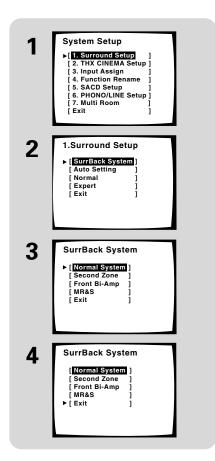
[SurrBack System]（⇨**P.39**）：
サラウンドバックチャンネルをノーマルサラウンド(6.1chまたは7.1chサラウンド)用で使用するか、それ以外の用途で使用するかを設定します。
[Auto Setting]（⇨**P.40**）：
自動で音場補正を行います。
[Normal]（⇨**P.44**）：
サラウンド設定の基本となる3つの設定を手動で自由に設定することができます。
[Expert]（⇨**P.49**）：
音場補正を詳細に設定することができます。

5 **39〜48ページに記載されているサラウンドの設定の各項目の手順に従って設定を行う。**

この場合、各項目の手順2へお進みください。

メモ

- システムセットアップのすべての項目は1つの項目を終了すると、自動的に次の項目が選択されます。
- RETURNボタンを押すと1つ前の手順に戻ることができます。

SurrBack System（サラウンドバックシステムの設定）

ここではサラウンドバックチャンネルをどのように使用するかを設定します。設定は「Normal System」と「Second Zone」、「Front Bi-Amp」、「MR&S」の4つの中から選択します。サラウンドバックチャンネルをノーマルサラウンドシステム（6.1chまたは7.1chサラウンド）として使用したいときは「Normal System」を選択し、スピーカーシステムBとしてメインのリスニングルーム以外の場所で使用したいときは「Second Zone」を選択します。フロントスピーカーをバイアンプとして使用したいときは「Front Bi-Amp」を選択し、マルチルームで使用したいときは「MR&S」を選択します。（「スピーカーシステムA/Bの切り換え」⇨**P.85**）

1b-4b

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 [SurrBack System]を選んで決定する。

サラウンドバックシステム設定の選択画面が表示されます。詳しい説明は上記をご覧ください。

3 [Normal System]、[Second Zone]、[Front Bi-Amp]、[MR&S]のいずれかを選んで決定する。

設定されたシステムが反転したまま[Exit]が自動で選択されます。

4 [Exit]を決定する。

サラウンドバックシステムの設定を終了します。

Auto Setting（サラウンドの自動設定）

本機のオートセットアップでは従来のマニュアル調整では難しかったさまざまな設定を、付属のオートセットアップ用マイクを使い自動で高精度に測定、設定することができます。「ホームシアター入門ガイド」Step2のサラウンドの自動設定（⇨**P.10**）と同様の設定ですが、ここではより詳しく説明します。
測定中はスピーカーからテストトーンが出力され、その音を付属のオートセットアップ用マイクで測定し、解析します。測定項目と全体の流れは右記の通りです。

測定中は大きな音でテストトーンが出力されます。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします。

初期測定（測定設備のチェック）
① 暗騒音（部屋の騒音）の測定
② マイク感度の診断
③ 各chのスピーカー有り無し判定

スピーカーの有り無し判定結果のユーザー確認（または修正）

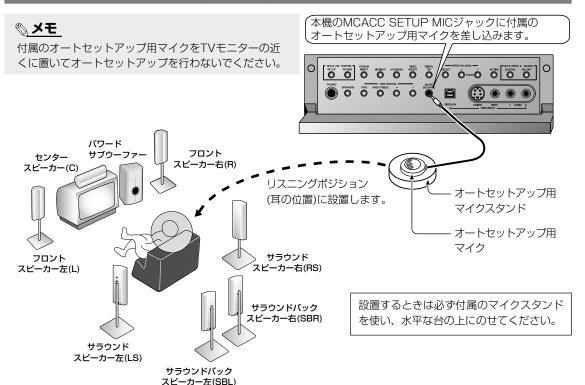
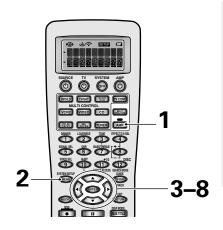
システム全体の解析測定
④スピーカーシステム
（各chの低域再生能力を判定）
⑤スピーカーからの距離
（最適なディレイ値を解析）
⑥スピーカーの出力レベル
（各chの出力バランスを補正）
⑦視聴環境の周波数特性
（出力音声の音色を統一）

システム全体の解析結果のチェック

上記①〜⑦の測定／解析にかかる時間
合計3〜8分程度

1）オートセットアップ用マイクを接続する

メモ
付属のオートセットアップ用マイクをTVモニターの近くに置いてオートセットアップを行わないでください。

設置するときは必ず付属のマイクスタンドを使い、水平な台の上にのせてください。

2）自動測定を開始する

メモ

- 自動測定の途中で静止画面（確認画面やエラーメッセージなど）を3分間放置すると、画面は一時的に消えますが、何らかのボタンを押すと再び表示されます。
- 自動測定の途中で[Cancel]を選んで測定を中止した場合は、それまでの内容は設定されません。
- 測定中は静かにしてください。
- スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。
- 測定中はリスニングポジションから離れて、各スピーカーの外側からリモコンで操作を行ってください。

1 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

リモコンがアンプ操作モードに切り換わります。

2 SYSTEM SETUP MENU **システムセットアップモードにする。**

テレビ画面にセットアップメニューが表示されます。

3 **[1.Surround Setup]を選んで決定する。**

サラウンドセットアップになります。

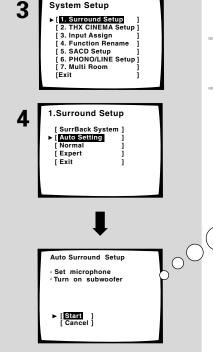
4 **[Auto Setting]を選んで決定する。**

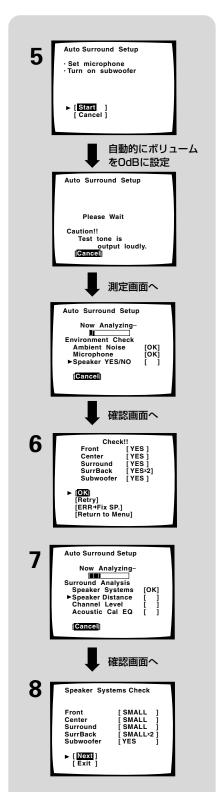
オートサラウンドセットアップモードになり、自動測定の開始画面（注意事項）が表示されます。

自動設定時におけるOSD画面のメッセージの意味

・付属のオートセットアップ用マイクを接続して、リスニングポジションに配置してください。

・サブウーファーを接続している場合は電源を入れてボリュームレベルを適度に上げておいてください。

注意

手順5でENTERボタンを押し、オートサラウンドセットアップを開始すると数秒後にテストトーンが大きな音で出力されます。0dBになってからマスターボリュームを下げることでテストトーンの音を小さくすることもできますが、正しく設定されない場合があります。小さなお子様が近くにいる場合などはご注意ください。

設定

5 [Start]を選んで決定する。

オートサラウンドセットアップが開始されます。まずは初期測定(測定設備チェック)です。この自動測定は数十秒で終わりますので、手順6の画面になるまでしばらくお待ちください。
「Ambient Noise」:暗騒音(部屋の騒音)の測定をします
「Microphone」:マイクの感度を診断します
「Speaker Level」:各スピーカーの有り無し判定をします

6 スピーカー有り無し判定結果の確認画面になります。判定結果が合っている場合は「OK」を選んで決定する。

次の自動設定が始まります。手順7へお進みください。

判定結果が間違っていて、もう一度自動測定を試す場合は[Retry]を選んで決定します。

手順5へ戻ります。

判定結果が間違っていて、手動で設定し直す場合は[ERR→Fix SP.]を選んで決定します。

設定が間違っているチャンネルを▲/▼ **ボタン**で選び**ENTERボタン**で決定し、▲/▼ **ボタン**で正しい設定に直したあとに**ENTERボタン**で決定します。
すべてのチャンネルを正しく設定したら▲/▼**ボタン**で[OK]を選んで**ENTERボタン**で決定します。

メモ

判定結果で[ERR]が表示された場合は、接続を間違えている可能性があります。[Retry]しても結果が同じような場合は一度電源を切り、スピーカーの接続を確認してください。また、途中で測定エラーによる警告が表示されている場合がありますので、そのときは画面の指示に従ってください。

7 補正用測定が開始されます。

「Speaker Systems」:各スピーカーの低域再生能力判定
「Speaker Distance」:最適なディレイ値を解析
「Channel Level」:各chの出力バランスを補正
「Acoustic Cal EQ」:出力音声の音色を統一
これらの自動設定には接続しているスピーカーの数によって2～7分程度かかりますので、手順8の画面になるまでしばらくお待ちください。

8 「Speaker Systems Check」の画面が表示されたら自動測定は終了です。

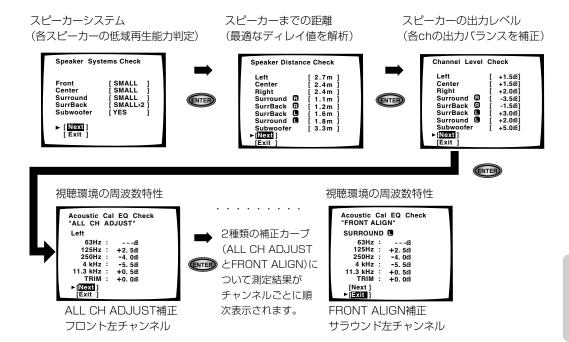
次ページ「3)測定結果を確認する」にお進みください。

メモ

設定の途中でOSD画面に何かメッセージが表示された場合は「自動設定におけるOSD画面のメッセージの意味(⇨**P.124**)をご覧ください。

3）測定結果を確認する

1 **[Next]を選んで決定しながら、測定された内容を以下の順に確認する。**

- 途中で確認画面を終了するときは▲ ▼ ボタンで[Exit]を選びENTERボタンを押します。

- 最後の画面になると、カーソルが自動的に[Exit]を指します。そこでENTERボタンを押すと、Surround Setup画面に戻ります。

メモ

- THXスピーカーを使用の場合は、各スピーカーをSMALLに設定してください。（⇨**P.45**）
- サブウーファーまでの距離の設定結果は、他のスピーカーに比べて部屋の環境の影響を受けやすいうえにサブウーファー本体が持つ回路の影響で、距離がやや遠くなることがあります。しかし、ここで設定された距離は、それらの影響を含めた最適な測定結果ですので、距離を修正する必要はありません。
- 上記の各測定項目について、詳しくは「音場補正の設定項目の詳細と効果」（⇨**P.37**）をご覧ください。
- 本機のAcoustic Cal EQで調整するバンド数は5バンド（63Hz、125Hz、250Hz、4kHz、11.3kHz）ですが、残響特性の表示（本機のReverb ViewやPCアプリケーション）は6バンド（63Hz、125Hz、250Hz、1kHz、4kHz、11.3kHz）となります。
  Acoustic Cal EQの自動設定では、スピーカーと部屋の特性を1kHz帯域を含む6バンドで測定分析し、その分析結果を使って、5バンドのAcoustic Cal EQパラメータを設定するように設計されています。（EQ 5バンドで6バンド分の相対的バランスを調整する設計となっています。）残響特性の表示では分析したすべてのバンドを表示するため、6バンドの表示となります。

2 **[Exit]を選んで決定する。**

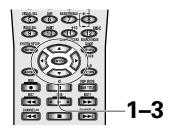
Surround Setupが終了し、System Setup画面に戻ります。

3 **もう一度[Exit]を選んで決定する。**

System Setupが終了し、通常動作に戻ります。
以上でオートセットアップは終了です。アコースティックキャリブレーションEQが自動的にALL CH ADJUSTでONになり、Advanced MCACCインジケーターが点灯します。

Normal（聴感によるサラウンドの設定）

「Auto Setting（サラウンド自動設定）」（⇨P.10,40）でオートセットアップを行った場合は、ここでの設定は必要ありません。

ここでは、サラウンド設定の基本となる「Speaker Setting（スピーカーシステムの設定）」、「Channel Level（スピーカー出力レベルの設定）」、「Speaker Distance（スピーカーまでの距離の設定）」を手動で設定します。それぞれの詳細は「音場補正の設定項目の詳細と効果」（⇨P.37）をご覧ください。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1-3

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 [Normal]を選んで決定する。

サラウンドの基本設定のメニュー画面になります。
「Exit」を選んで、決定するとサラウンドの基本設定を終了します。

[Speaker Setting]（⇨P.45）：
スピーカーの有り/ 無し、低域再生能力の大/ 小を設定します。
[Channel Level]（⇨P.47）：
リスニングポジションでの各チャンネルの音量レベルを一定に合わせるように設定します。
[Speaker Distance]（⇨P.48）：
リスニングポジションからスピーカーまでの距離を設定します。

3 45～48ページに記載されているサラウンドの基本設定の各項目の手順に従って設定を行う。

この場合、各項目の手順3へお進みください。

1
System Setup
▶[1. Surround Setup]
[2. THX CINEMA Setup]
[3. Input Assign]
[4. Function Rename]
[5. SACD Setup]
[6. PHONO/LINE Setup]
[7. Multi Room]
[Exit]

2
1.Surround Setup
[SurrBack System]
[Auto Setting]
▶[Normal]
[Expert]
[Exit]

Normal
▶[Speaker Setting]
[Channel Level]
[Speaker Distance]
[Exit]

Speaker Setting（スピーカーシステムの設定）

接続したスピーカーについて、この設定を行います。どのチャンネルのスピーカーが接続されているか、さらに各スピーカーの低域再生能力の大小を設定することで、再生するソースの全音域を最適なチャンネルへ配分するための設定です。お持ちのスピーカーシステムや視聴環境などに合わせて正しく設定してください。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[1.Surround Setup]を選んで決定する。**

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 **[Normal]を選んで決定する。**

3 **[Speaker Setting]を選んで決定する。**

スピーカーシステムの設定になります。

4 **設定するスピーカーを選んで決定する。**

5 **手順4で選んだスピーカーについて設定し、決定する。**

スピーカーごとに以下を選べます。各項目の意味と設定方法については次ページの説明をご覧ください。

Front (フロント)	[SMALL]*1 [LARGE]
Center (センター)	[SMALL] [LARGE] [NO]
Surround (サラウンド)	[SMALL]*2 [LARGE] [NO]*3
SurrBack (サラウンドバック)	[SMALL×2][SMALL×1] [LARGE×2] [LARGE×1][NO]
Subwoofer (サブウーファー)	[YES] [PLUS]*4 [NO]

メモ

＊1　Front(フロント)を[SMALL]に設定すると、その他のスピーカーで[LARGE]は選べません。

＊2　Surround(サラウンド)を[SMALL]に設定すると、SurrBack(サラウンドバック)で[LARGE×2][LARGE×1]は選べません。

＊3　Surround(サラウンド)を[NO]に設定すると、SurrBack(サラウンドバック)は[---]と表示され、選択することはできません。

＊4　すべてのスピーカーを[SMALL]に設定すると、サブウーファーで[PLUS]、[NO]は選べません。

6 **それぞれのスピーカーに手順4～5を繰り返す。**

7 **[Exit]を選んで決定する。**

スピーカーシステムの設定を終了します。

47ページの「Channel Level」に進みます。この場合、47ページ手順3へお進みください。

3

4

THXスピーカーを使用しているときはすべて[SMALL]に設定してください。

5

7

設定

サラウンドの設定

スピーカーシステム設定の目安

スピーカーシステム組み合せ可能一覧

<table>
<tr><td>Front
(フロント)</td><td colspan="2">[SMALL]</td><td colspan="3">[LARGE]</td></tr>
<tr><td>Center
(センター)</td><td colspan="2">[SMALL] [NO]</td><td colspan="3">[LARGE] [SMALL] [NO]</td></tr>
<tr><td>Surround
(サラウンド)</td><td>[SMALL]</td><td>[NO]</td><td>[LARGE]</td><td>[SMALL]</td><td>[NO]</td></tr>
<tr><td>Surr Back
(サラウンドバック)</td><td>[SMALL ×2/×1]
[NO]</td><td>[NO]</td><td>[LARGE ×2/×1]
[SMALL ×2/×1]
[NO]</td><td>[SMALL ×2/×1]
[NO]</td><td>[NO]</td></tr>
<tr><td>Sub Woofer
(サブウーファー)</td><td colspan="2">[YES]</td><td colspan="3">[YES] [NO] [PLUS]</td></tr>
</table>

太字：工場出荷時の設定

[SMALL]　：低域再生能力が十分ではない小型スピーカー
(低音域は他の[LARGE]スピーカーやサブウーファーから出力)

[LARGE]　：低域再生能力のあるフルレンジ・スピーカー

[×2/×1]　：サラウンドバックスピーカーの接続本数(2本または1本)

[YES]　：サブウーファーを接続している場合

[PLUS]　：フロント/センターの低域成分を、サブウーファーからも同時に出力させる低域の再生量がもっとも多いモード
常に(2ch再生時でも)サブウーファーから低域が出力されるため、量感のある重低音をお好みの方にお勧めの設定(詳しくは下図参照)

[NO]　：接続していない場合(該当chの成分は他のスピーカーより出力)

サブウーファーの[PLUS]はオートセットアップでは設定されません。お好みに応じて設定を変更してください。

サブウーファーの再生する音域成分

フロント、センタースピーカーの設定によってサブウーファーの再生する音域成分は以下のようになります。

フロント／センタースピーカー	サブウーファー	LFE(超低域効果音)成分*	低域成分	中･高域成分
SMALL	YES			
LARGE	YES			
LARGE	NO			
LARGE	PLUS			

サブウーファーの再生音域

フロント/センターの再生音域

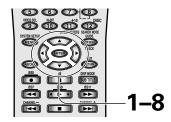
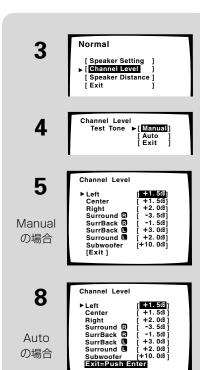
クロスオーバー周波数(工場出荷時：80Hz)
お手持ちのスピーカーに合わせて設定してください(⇨ **P.50**)

＊LFEとは音声信号に含まれる超低域成分です。この成分が入力されるとディスプレイのインジケーターが点灯します。この成分は常に含まれているとはかぎりません。

✎メモ

サブウーファー[PLUS]に設定した場合、サブウーファーの低域成分とフロントの低域成分の打ち消し合いが発生し、十分な低音の効果が発揮されないことがあります。このような場合は、まずスピーカーの設置場所や向きを変えてみてください。それでも解消されない場合は実際に音を出しながらサブウーファーを[YES]にしたり、フロントを[SMALL]にして比較し、最適な設定にしてください。

Channel Level（スピーカー出力レベルの設定）

リスニングポジション（視聴位置）での各チャンネルの音量レベルが一定に揃うように調整します。実際に出力されるテストトーンを耳で確かめながら手動で各スピーカーの出力レベルを調整します。音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト/スローモードで75dB SPLに調整してください。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 [Normal]を選んで決定する。

3 [Channel Level]を選んで決定する。

スピーカー出力レベルの設定になります。

4 **設定方法を選んで決定する。**

[Manual]：テストトーンを再生するスピーカーを手動で切り換えて調整します。この場合は手順5へお進みください。

[Auto]：テストトーンを再生するスピーカーが自動で切り換わります。この場合は手順6へお進みください。

テストトーンは大きな音で再生されます。
MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

5 **調整するスピーカーを選んで決定する。**

6 **チャンネルレベルを調整する。**

－10dBから＋10dBの範囲内において0.5dB間隔で調整することができます。

[Manual]の場合：手順5で選んだスピーカーのチャンネルレベルを▲/▼**ボタン**で調整し、**ENTERボタン**で決定する。手順7へお進みください。

[Auto]の場合：自動で選択されたスピーカーのチャンネルレベルを順次▲/▼**ボタン**で調整する。すべてのチャンネルレベルを調整したら手順8へお進みください。

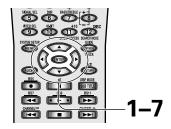
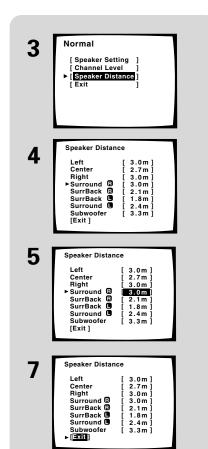
サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

7 **それぞれのチャンネルに手順5～6を繰り返し、すべてのチャンネルレベルを調整したら[Exit]を選びます。**

8 ENTERボタンを押して[Exit]（または[Exit=Push Enter]）を決定する。

スピーカー出力レベルの設定を終了します。
次ページの「Speaker Distance」に進みます。

Speaker Distance（スピーカーまでの距離の設定）

リスニングポジション（視聴位置）からスピーカーまでの距離を設定することにより、各チャンネルの再生にディレイタイムが付加され、リスニングポジションで適切なサラウンド効果を得ることができます。マニュアルで設定する場合は、それぞれのスピーカーから視聴位置までの距離を測り、ここで指定してください。本機は、指定された距離から自動的にディレイタイムを算出します。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 [Normal]を選んで決定する。

3 [Speaker Distance]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の設定になります。

4 設定するスピーカーを選んで決定する。

5 手順4で選んだスピーカーまでの距離を設定し、決定する。

0.1mから9mの範囲内で0.1m間隔で設定できます。

6 それぞれのスピーカーに手順4～5を繰り返す。

7 [Exit]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の設定を終了します。

8

SYSTEM SETUPボタンを押してシステムセットアップを終了する。

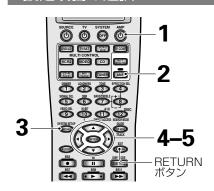
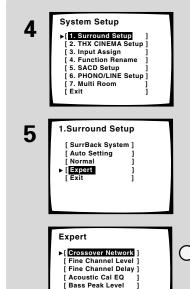
本機が通常操作に戻ります。

メモ

サラウンドバックスピーカーを2本接続した場合は、設置および設定をリスニングポジションから等距離にしますと、THXモードの効果が最大限に発揮されます。

Expert（詳細なサラウンドの設定）

エキスパートサラウンド設定はより深くサラウンドを楽しみたい方のための設定です。必ず行わなければならない設定ではありませんが、「Auto Setting（サラウンドの自動設定）」や「Normal（聴感によるサラウンドの設定）」で設定された値に対して、さらに詳細に調整できます。Expert設定を行う前には、「Auto Setting（サラウンドの自動設定）」でオートセットアップを行うことお勧めします（⇨**P.40**）。

設定項目の選択

1 AMP

本機の電源を入れ、テレビの電源も入れる。

テレビは本機の出力映像が表示されるようにしておきます。

2 AMP

リモコンをアンプ操作モードにする。

3 SYSTEM SETUP MENU

システムセットアップにする。

テレビ画面にセットアップメニューが表示されます。

4 ENTER

[1.Surround Setup]を選んでENTERボタンで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

5 ENTER

[Expert]を選んでENTERボタンで決定する。

エキスパートサラウンド設定のメニュー画面になります。

[Crossover Network]（⇨**P.50**）：
オートセットアップで小（SMALL）に設定されたスピーカーがあるとき、何Hz以下の低音域を他のスピーカーで再生するのかを設定します。

[Fine Channel Level]（⇨**P.51**）：
オートセットアップで設定された各チャンネルの出力レベルを詳細に調整します。

[Fine Channel Delay]（⇨**P.52**）：
オートセットアップで設定された各チャンネルのディレイ値を詳細に調整します。

[Acoustic Cal EQ]（⇨**P.53**）：
オートセットアップで設定された視聴環境の周波数特性の補正を詳細に調整したり、調整した値を保存したりします。

[Bass Peak Level]（⇨**P.65**）：
LFEチャンネルのピークレベルを設定します。

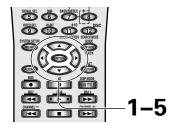
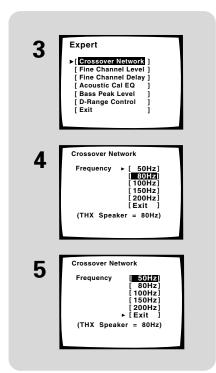
[D-Range Control]（⇨**P.66**）：
ダイナミックレンジをどの程度圧縮するかを設定します。

6 **50〜66ページに記載されている各項目の手順に従って設定を行う。**

この場合、各項目の手順3へお進みください。

設定

Crossover Network（クロスオーバー周波数の設定）

「スピーカーシステムの設定」で小（SMALL）に設定されたスピーカーがあるとき、何Hz以下の低音域を他のスピーカー（サブウーファーを含む）で再生するのかを設定します。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[1.Surround Setup]を選んで決定する。**

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 **[Expert]を選択して決定する。**

エキスパート設定のメニュー画面になります。

3 **[Crossover Network]を選択して決定する。**

クロスオーバー周波数の設定になります。

4 **他のスピーカーで再生する低音域を何Hz以下にするかを選択して決定する。**

例えば、[50Hz]を選択すると、50Hz以下の低音域が他のスピーカーで再生されます。

選択された設定が反転したまま[Exit]が自動で選択されます。

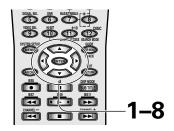
5 **[Exit]を決定する。**

クロスオーバー周波数の設定を終了します。

メモ

- 工場出荷時は80Hzに設定されています。
- THXスピーカーをご使用の場合は、80Hzに設定してください。
- それぞれのスピーカーの性能によりますが、すべて小さいスピーカーを使用している場合は200Hzに設定することをお勧めします。

Fine Channel Level（スピーカー出力レベルの詳細な設定）

フロント左スピーカーを基準としてその他のチャンネルレベルを調整します。選択したチャンネルとそのチャンネルに対して最適と思われるもう1つのチャンネルからテストトーンが再生されますので、そのテストトーンどうしが同じ大きさに聞こえるように調整します。

1-8

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 [Expert]を選択して決定する。

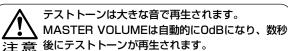
エキスパート設定のメニュー画面になります。

3 [Fine Channel Level]を選択して決定する。

スピーカー出力レベルの詳細な設定になります。

4 フロント左チャンネルのレベルを調整して決定する。

フロント左チャンネルからテストトーンが出力されます。

テストトーンは大きな音で再生されます。
MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

5 調整したいスピーカーのチャンネルを選択して決定する。

選択したチャンネルとそのチャンネルに対して最適と思われるもう1つのチャンネルからテストトーンが出力されます。

6 チャンネルレベルを調整して決定する。

－10dBから＋10dBの範囲内で0.5dB間隔で調整することができます。
調整方法については上記の説明をご覧ください。
決定すると自動的に次のチャンネルが選ばれ、そのチャンネルからテストトーンが出力されます。

7 それぞれのチャンネルに手順5～6を繰り返し、すべてのチャンネルレベルを調整したら[Exit]を選びます。

8 [Exit]を決定する。

スピーカー出力レベルの詳細な設定を終了します。

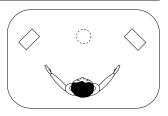
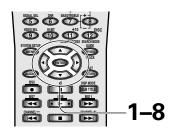
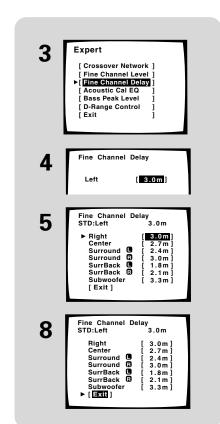
3

4

5

8

Fine Channel Delay（スピーカーまでの距離の詳細な設定）

選択したチャンネルとそのチャンネルに対して最適と思われるもう1つのチャンネルからテストトーンが再生されます。その2つのスピーカーに対して右図のように向き、2つのテストトーンの聞こえるポイントが真ん中になるように調整します。
なお、サブウーファーは、この方法でディレイ値を合わせるのが困難です。この場合は、テスト信号を出しながら距離の値を動かし、視聴ポイントでテスト信号の音量が最も大きくなるように調整してください。

1–8

1-8

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 [Expert]を選択して決定する。

エキスパート設定のメニュー画面になります。

3 [Fine Channel Delay]を選択して決定する。

スピーカーまでの距離の詳細な設定になります。

4 フロント左チャンネルのスピーカーまでの距離を調整して決定する。

5 調整したいスピーカーのチャンネルを選択して決定する。

選択したチャンネルのスピーカーともう1 つのスピーカーからテストトーンが出力されます。

テストトーンは大きな音で再生されます。
MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

6 スピーカーまでの距離を調整して決定する。

0.1mから9mの範囲内で0.1m間隔で設定できます。
調整方法については上記の説明をご覧ください。
決定すると自動的に次のチャンネルが選ばれ、そのチャンネルともう1つのチャンネルからテストトーンが出力されます。

7 それぞれのチャンネルに手順5〜6を繰り返し、すべてのチャンネルレベルを調整したら[Exit]を選びます。

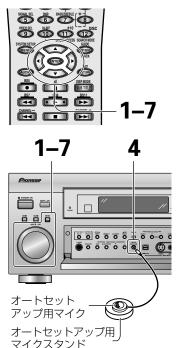
8 [Exit]を決定する。

スピーカーまでの距離の詳細な設定を終了します。

Acoustic Cal EQ(視聴環境の周波数特性の補正)

視聴環境のトータルな周波数特性を補正(均一化)します。補正カーブには[ALL CH ADJUST]と[FRONT ALIGN]の2種類があり、マイクを用いたオートセットアップにより、補正カーブをすべて自動で調整します。それぞれの内容については「アコースティックキャリブレーションEQのON/OFF」(⇨**P.86**)をご覧ください。
ここでは[DATA COPY]機能を使うことで、オートセットアップにより自動調整された2種類の補正カーブを[CUSTOM1]、[CUSTOM2]として保存することができ、お好みで調整することができます。その際は「自動調整された補正カーブを手動で調整する」(⇨**P.54**)をご覧ください。

補正カーブを自動調整する

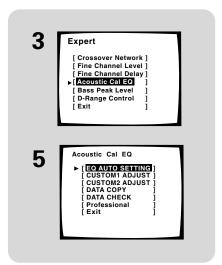
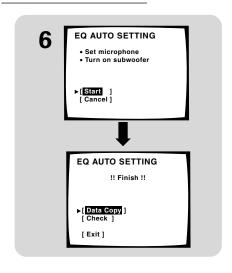
サラウンドの設定を手動で行ったときにこの[EQ AUTO SETTING]で補正カーブを自動調整します。「Auto Setting(サラウンドの自動設定)」(⇨**P.10,40**)でオートセットアップしたときは、すでにこの自動調整は行われていますので不要です。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。
サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 [Expert]を選択して決定する。
エキスパート設定のメニュー画面になります。

3 [Acoustic Cal EQ]を選択して決定する。
視聴環境の周波数特性の補正になります。

4 付属のオートセットアップ用マイクをMCACC SETUP MIC端子につなぐ。

5 [EQ AUTO SETTING]を選んで決定する。

6 [Start]を選んで決定する。

補正カーブ調整の自動測定がスタートします。

テストトーンは大きな音で再生されます。
MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

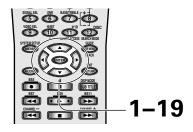
[!! Finish !!] が表示されたら測定終了です。

以下の項目へ進めます。
[Data Copy]：この測定結果を保存します。操作は次ページの手順5以降をご覧ください。
[Check]：この測定を確認します。

7 [Exit]を選んで決定する。

「EQ Auto Setting」を終了します。

自動測定された補正カーブを手動で調整する

あらかじめ、[Auto Setting](⇨**P.10,40**)または[EQ AUTO SETTING](⇨**P.53**)を行い、補正カーブを自動で調整しておいてください。ここではすでに調整されている[ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]の補正カーブを[CUSTOM1]または[CUSTOM2]に保存したあと、その補正カーブを手動で調整する方法を説明します。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

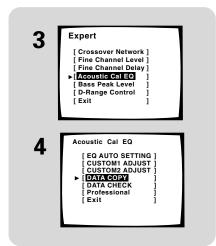
2 [Expert]を選択して決定する。

エキスパート設定のメニュー画面になります。

3 [Acoustic Cal EQ]を選択して決定する。

視聴環境の周波数特性の補正になります。

4 [DATA COPY]を選んで決定する。

「CUSTOM1」または「CUSTOM2」のどちらに保存するかを選択する画面になります。

5

EQ DATA COPY

▶CUSTOM1
[NOT DATA COPY]
CUSTOM2
[ALL CH ADJUST]
[Exit]

6

EQ DATA COPY

▶CUSTOM1
[FRONT ALIGN]
CUSTOM2
[ALL CH ADJUST]
[Exit]

8

Acoustic Cal EQ

[EQ AUTO SETTING]
▶[CUSTOM1 ADJUST]
[CUSTOM2 ADJUST]
[DATA COPY]
[DATA CHECK]
[Professional]
[Exit]

9

Acoustic Cal EQ

▶[ALL CH ADJUST]
[FRONT ALIGN]
[Exit]

以下は[ALL CH ADJUST]を選択したときのOSDです

10

ALL CH ADJUST

[Left EQ]
▶[Center EQ]
[Right EQ]
[Surround R EQ]
[SurrBack R EQ]
[SurrBack L EQ]
[Surround L EQ]
[Exit]

11

Center EQ

▶ 63Hz	[+1. 5dB]
125Hz	[+2. 5dB]
250Hz	[-4. 0dB]
4 kHz	[-5. 5dB]
11.3 kHz	[+0. 5dB]
TRIM	[+0. 0dB]
[Exit]	

12

Center EQ

▶ 63Hz	[+2. 0dB]
125Hz	[+2. 5dB]
250Hz	[-4. 0dB]
4 kHz	[-5. 5dB]
11.3 kHz	[+0. 5dB]
TRIM	[+0. 0dB]
[Exit]	

5 「CUSTOM1」または「CUSTOM2」のどちらかを選んで決定する。

6 [ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]を選択して決定する。

手順5で選んだ[CUSTOM]に手順6で選んだ補正カーブが保存されます。保存しない場合は[NOT DATA COPY]を選択します。

7 [Exit]を選んで決定する。

[DATA COPY]モードが終了します。

8 [CUSTOM1 ADJUST]または[CUSTOM2 ADJUST]を選んで決定する。

この場合、手順5で選んだ[CUSTOM]を選んでください。

9 [ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]を選択して決定する。

テストトーンが出力されます。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

[ALL CH ADJUST]：サブウーファーを除いたすべてのスピーカーの補正

[FRONT ALIGN]：フロントスピーカーの特性に合わせた補正

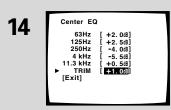
10 調整したいチャンネルを選択して決定する。

手順9で[FRONT ALIGN]を選択したときは、ここで[Left][Right]を選択することはできません。

11 手順10で選んだチャンネルの調整したい帯域を選択して決定する。

「スピーカーシステムの設定」でSMALL(小)に設定されたチャンネルは63Hzを選択することはできません。

12 帯域を調整して決定する。

−6dBから+6dBの範囲内で0.5dB間隔で調整することができます。
調整中に「OVER」がディスプレイに表示されたときは、その帯域または他の帯域のレベルが高すぎるので、「OVER」表示が消えるまで、さまざまな帯域のレベルを下げてください。
決定すると自動的に次の帯域が選ばれます。

設定

14

15

Center EQ
63Hz [+2. 0dB]
125Hz [+2. 5dB]
250Hz [-4. 0dB]
4 kHz [-5. 5dB]
11.3 kHz [+0. 5dB]
TRIM [+0. 0dB]
▶ [Exit]

18

ALL CH ADJUST
[Left EQ]
[Center EQ]
[Right EQ]
[Surround R EQ]
[SurrBack R EQ]
[SurrBack L EQ]
[Surround L EQ]
▶ [Exit]

13 **それぞれの帯域に手順11〜12を繰り返し、すべての帯域を調整します。**

14 **「TRIM」を選択して決定する。**

TRIMではそれぞれの帯域を調整することで、変わってしまったそのチャンネルレベルの全体的なバランスを調整します。

15 **「TRIM」を調整して決定する。**

−6dBから＋6dBの範囲内で0.5dB間隔で調整することができます。
決定すると自動的に[Exit]が選ばれます。

16 **[Exit]を決定する。**

決定すると自動的に次のチャンネルが選ばれます。

17 **それぞれのチャンネルに手順10〜16を繰り返し、すべてのチャンネルを調整します。**

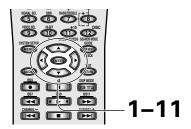
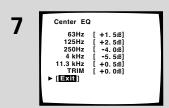
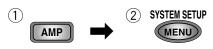
18 **[Exit]を選んで決定する。**

[ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]選択画面に戻ります。

19 **[Exit]を選んで決定する。**

[CUSTOM ADJUST]モードを終了します。
続けて[DATA CHECK]を行うときは、次ページの「自動調整された補正カーブを確認する」に進みます。この場合、手順4へ進みます。
視聴環境の周波数特性の補正を終了したいときは、もう一度[Exit]を選んで決定します。

自動測定された補正カーブを確認する

[Auto Setting](⇨**P.10,40**)または[EQ AUTO SETTING](⇨**P.53**)で設定された、[ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]の補正カーブを確認することができます。

4

5

6

7

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[1.Surround Setup]を選んで決定する。**

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 **[Expert]を選択して決定する。**

エキスパート設定のメニュー画面になります。

3 **[Acoustic Cal EQ]を選択して決定する。**

視聴環境の周波数特性の補正になります。

4 **[DATA CHECK]を選んで決定する。**

[ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]のどちらを確認するか選択する画面になります。

5 **[ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]を選択して決定する。**

6 **確認したいチャンネルを選択して決定する。**

そのチャンネルの周波数帯域の設定値が表示されますので、確認します。
手順5で[FRONT ALIGN]を選択したときは、ここで[Left][Right]を確認することはできません。

7 **確認が終了したら[Exit]を選んで決定する。**

決定すると自動的に次のチャンネルが選ばれます。

8 **それぞれのチャンネルに手順6～7を繰り返し、すべてのチャンネルを確認します。**

9 **すべてのチャンネルの確認が終了したら[Exit]を選んで決定する。**

[ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]選択画面に戻ります。

10 **[Exit]を選んで決定する。**

[DATA CHECK]モードを終了します。

11 **[Exit]を選んで決定する。**

視聴環境の周波数特性の補正モードを終了します。

設定

Acoustic Cal EQ Professional（視聴環境の残響特性の測定と周波数特性の補正）

視聴環境の残響特性を測定し、測定された残響特性に適した周波数特性の補正を行います。残響特性とは視聴環境における音の響き方のことです。カーテンの位置や壁の質、吸音材の位置などで残響特性は変わります。ここでは、残響特性に応じた周波数特性の補正を行いますので、以下のような視聴環境のときに効果を発揮します。
① 各チャンネルごとに響き方が異なる視聴環境。
②各周波数帯域ごとに響き方が異なる視聴環境。
お客様の視聴環境の残響特性はOSD画面(テレビ画面)またはパソコンのモニターで確認することができます。この機能により、お客様が部屋に施した吸音材などの使用効果を目で見て確認することができますので、より理想的な残響特性を創ることができます。各チャンネルにおける各周波数の残響特性をご覧になり、視聴環境の整備が必要と思われるときは、カーテンの位置やカーペットまたは吸音材の使用などを見直し、もう一度音場補正を行うことをお勧めします。

メモ

- Acoustic Cal EQ Professionalの[Auto Pro.]または[Advanced EQ Setup]を行うと、Auto Setting（⇨**P.10**）またはAcoustic Cal EQの[EQ AUTO SETTING]モードで測定された補正カーブ(ALL CH ADJとFRONT ALIGN)はここでの補正カーブに上書きされてしまいますのでご注意ください。上書きしたくないときは、CUSTOM1, 2にコピーしておくことをお勧めします。
- パソコンで残響特性を表示するには、パソコンが64ページに記載されている条件を満たしていなければなりません。また、別途、専用アプリケーションソフトおよびRS-232Cケーブルが必要となります。専用アプリケーションおよびその取扱説明書については表紙でも紹介した下記URLにてお客様登録をしたあと、ダウンロードのサイトへ進み、ダウンロードしてください。

  http://www3.pioneer.co.jp/

  RS-232Cケーブルの詳細についてはダウンロードした取扱説明書をご覧ください。その他ご不明な点がありましたら、カスタマーサポートセンターへお問い合わせください。
- Acoustic Cal EQ Professionalの[Auto Pro.]は周波数特性の補正についての自動設定です。Auto Settingと違い、スピーカーシステム、スピーカーからの距離、スピーカーの出力レベルについての設定は行いませんので、Professionalを行う前に「Auto Setting」(⇨**P.40**)を行うことをお勧めします。

自動設定

Acoustic Cal EQ Professionalでは、この方法をお勧めします。この設定方法は、現在の残響特性の測定からシステム補正値の算出、各チャンネルの周波数バランスの調整までを自動的に行い、理想的な視聴環境を創ります。

[Auto Pro.]：
視聴環境の残響特性を測定し、その特性に応じて「20～40[ms]」か「60～80[ms]」のどちらかの補正位置を自動で選択して周波数特性の補正を行います(ALL CH ADJUSTとFRONT ALIGNの2つの補正カーブ)。測定時間は2～9分程度です。

手動設定

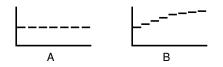
視聴環境の残響特性を測定し、各チャンネルにおける各周波数の残響特性を時間軸と音量レベルで表示します。また、時間軸のどの位置の音で周波数特性の補正を行うかを手動で選択し、調整を開始することもできます。

[Reverb Measurement]：
お客様の視聴環境の残響特性を測定します。測定時間はおよそ2～6分程度です。

[Reverb View]：
[Reverb Measurement]で測定した各チャンネルにおける各周波数の残響特性をOSD画面(テレビ画面)で確認することができます。[PC Output]を選ぶとパソコンでより詳細に確認することができます。

[Advanced EQ Setup]：
[Reverb Measurement]で測定した各チャンネルにおける各周波数の残響特性がOSD画面(テレビ画面)に表示されますので、表示された残響特性カーブを参考にしながら周波数特性の補正を行うための「時間軸上の位置」をお好みで選択し補正を行います。

残響特性グラフの見方

グラフは、静寂な状態から時間0でテストノイズを出力し始め、以降スピーカーから一定レベルを出力し続けた時のマイク入力レベルの時間変移を示したものです。まったく残響のない場合は、下図Aのようになりますが、残響がある場合、徐々に音響パワーが累積されて下図Bのようになります。

メモ

- 低い周波数帯域は群遅延特性の影響で0[ms]付近の立ち上がりが鈍くなる場合があります。
- 各スピーカーの「距離と能力の差」による「ディレイとレベル差」は、グラフを見やすくするため、補正されたものを表示します。周波数特性に関しては補正しないで表示します。

Advanced EQ Setup での 補正時間位置の決め方

手動設定では、[Reverb Measurement] で測定した残響特性カーブを参考に、お客様が補正時間位置を手動で選択します。この機能は上級者向けの機能になります。補正時間位置の設定および Advanced EQ Setup をすべて自動で行いたいお客様は [Auto Pro.] を選択して下さい。
[Reverb Measurement] で測定した残響特性カーブは、[Reverb View] で OSD 画面またはパソコン表示により確認できます。また、Advanced EQ Setup の補正時間位置を設定する OSD 画面にも表示されます。残響特性カーブをご覧になり、各周波数、各チャンネルで、残響特性カーブの形状の差が大きいような場合は、残響音の悪影響を受けないようにするために、早い時間位置（例えば20～40[ms]）に設定することをお勧めします。お好みで他の時間位置をお試しいただくのも結構です。どの時間位置にしてよいかわからない場合には、20 ～ 40 [ms]に設定してください。ただし20～40[ms]の間で残響カーブのどこかの周波数帯に突発的な変化が見られる場合は他の時間位置を選択してください。
通常の Acoustic Cal EQ 補正では、図 1 のようにマイク入力のデータ取得時間が 80 ～ 160[ms]の固定になっています。それに対して、Professional では、0 ～ 80[ms]の中の 1 ポイント（20[ms]幅）をお客様が選択できます。補正時間位置の設定は、測定した残響特性のグラフをみて、以下の 1 ～ 3 のパターンを参考に決めます。

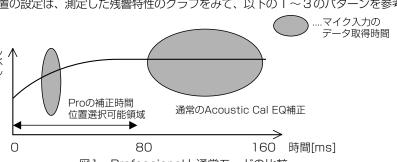



図1　Professionalと通常モードの比較

1. ＜周波数ごとに残響特性が異なる場合＞
例えば図2のような残響特性の部屋の場合、低域が大きく響いて高域があまり響かないというような特性になっています。通常の Acoustic Cal EQ の ALL CH ADJUST 補正をすると、80 ～ 160[ms]のデータを取得するため、低域の音量が大きく、高域が小さいと判断し、EQのカーブは高域を上げ気味に補正します。ところが、スピーカーから直接耳に届く約40ms以内の特性は高域を上げる必要がないくらい、十分な音量が出ていますので、通常のAcoustic Cal EQ 補正をすると高域がきつく感じることがあります。このような場合にはスピーカーからの直接音を大切に補正するという意味で、Professional の20～40[ms]くらいを指定して補正をすると、スピーカーからの直接音（初期反射音を含む）がフラットになり、聞きやすい音場になります。

図2　周波数ごとに残響特性が異なる場合の例

設定

2. <チャンネルごとに残響特性が異なる場合>
また、図３のような残響特性の部屋の場合、チャンネルごとに残響特性が異なっています。このような部屋で通常の Acoustic Cal EQ 補正をすると、80 ～ 160[ms]のデータを取得するため、スピーカーから音が放射されてから80[ms]以降に徐々に各チャンネルの音色がそろってくるようになります。一方、音像の定位感や移動感、各スピーカーからの音のつながりは、残響音ではなく、各スピーカーからの直接音（初期反射音を含む）に左右されます。80 ～ 160[ms]のデータを取得し補正する通常の Acoustic Cal EQ 補正では、このような部屋の場合、直接音の特性をそろえることは出来ません。そこで、Professional の 20 ～ 40[ms]くらいを指定して補正をすると、各チャンネルの直接音がそろい、音像の定位感や移動感、各スピーカーからの音のつながりが理想的となり、素晴らしい音場をお楽しみいただけるようになります。

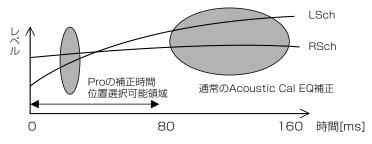



図3　チャンネルごとに残響特性が異なる場合の例

3. <周波数ごと、およびチャンネルごとに残響特性が似ている場合>
図４のように、各周波数、各チャンネルの残響特性が似ているような場合には、残響特性が悪影響を及ぼすことはありませんので、直接音で補正する（20 ～ 40[ms]程度に設定する）必要はありません。そのような場合には、Acoustic Cal EQ は［Professional］モードではなく、通常の［EQ AUTO SETTING］で行うことをお勧めします。そうすることで、直接音及び残響音をすべて含んだトータルでの補正が行われ、理想的な音場空間を再現できます。

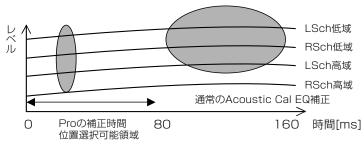
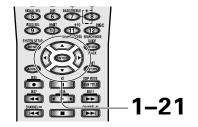
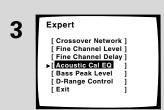



図4　周波数ごと、およびチャンネルごとに残響特性が似ている場合の例

✎メモ

- 本機の「残響特性測定及びグラフ表示機能」は、お客様の吸音材設置の効果を確かめるツールとしてお使いいただけます。
- 吸音材の位置などを変更されたあとは、残響特性の測定［Reverb Measurement］、補正時間位置の決定［Advanced EQ Setup］をやり直すことをお勧めします。

自動設定（Auto Pro.）

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 [Expert]を選択して決定する。

エキスパート設定のメニュー画面になります。

3 [Acoustic Cal EQ]を選択して決定する。

視聴環境の周波数特性の補正になります。

4 [Professional]を選択して決定する。

視聴環境の残響特性の測定と周波数特性の補正になります。「残響特性の測定」、「時間軸上の補正位置の設定」および「周波数特性の補正」をすべて自動で行うときは「Auto Pro.」を選択して決定し、[Start]を選びます（設定にはおよそ2〜9分かかります）。
[手動設定]を選ぶときは、62ページの手順5へお進みください。

5 ▲ / ▼ボタンで[Data Copy]、[Check]または[Exit]のいずれかを選んで決定する。

[Data Copy]：
① [Data Copy] を選んで決定する。
② [CUSTOM1]または[CUSTOM2]のどちらにコピーするのか選んで 決定する。
③ [Copy OK]を選んで決定する。
[Check]：ALL CH ADJとFRONT ALIGNの各チャンネルについて確認することができます。
[Exit]：[Auto Pro.] を終了します。

6 ▲ / ▼ボタンで[Exit]を選んで決定する。

[Professional]（視聴環境の残響特性の測定と補正）を終了します。

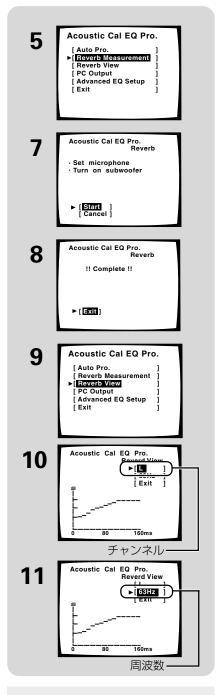
7 もう一度▲ / ▼ボタンで[Exit]を選んで決定する。

視聴環境の周波数の補正を終了します。

メモ

設定の結果を確認する場合は、手動設定の手順9〜14（→P.62）を操作してください。

手動設定

✎ **メモ**

OSDのdB表示(縦軸の目盛り)は2dBごとに区切られています。

5 [Reverb Measurement]を選んで決定する。

6 マイクを接続して残響特性の測定の準備をする。

- ・付属の設定用マイクを接続して、リスニングポジションに設置してください。(TVモニターの近くには設置しないでください。)
- ・測定中は静かにしてください。
- ・スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。

7 [Start]を選んで決定する。

残響特性の測定になります。測定にはおよそ2～6分程度かかります。
設定の途中で静止画面を3分間放置すると画面は一時的に消えますが、何かボタンを押すことで再び同じ画面を表示します。

8 [Exit]を選んで決定する。

測定結果を確認するときは手順9へ、測定結果を確認せずに周波数特性の補正を行うときは手順15へお進みください。

9 [Reverb View]を選んで決定する。

残響特性の測定結果確認画面になります。
パソコンで残響特性の表示をするときは「パソコンのモニターで各チャンネルにおける各周波数の残響特性を確認する」(⇨**P.64**)へお進みください。

10 ▲ / ▼ボタンで測定結果を確認したいチャンネルを選ぶ。

11 ▼ボタンで周波数を選び、◀ / ▶ボタンで測定結果を確認したい周波数バンドを選ぶ。

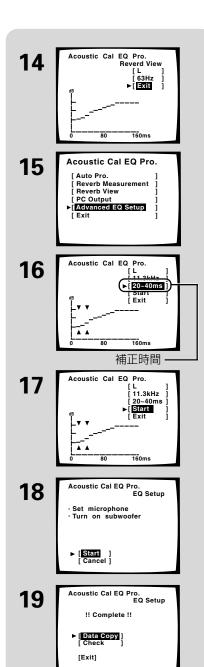
選べる周波数バンドは各チャンネルについて「63Hz」、「125Hz」、「250Hz」、「1kHz」、「4kHz」、「11.3kHz」、の6つです。

✎ **メモ**

本機のAcoustic Cal EQで調整するバンド数は5バンド(63Hz、125Hz、250Hz、4kHz、11.3kHz)ですが、残響特性の表示(本機のReverb ViewやPCアプリケーション)は6バンド(63Hz、125Hz、250Hz、1kHz、4kHz、11.3kHz)となります。
Acoustic Cal EQの自動設定では、スピーカーと部屋の特性を1kHz帯域を含む6バンドで測定分析し、その分析結果を使って、5バンドのAcoustic Cal EQパラメータを設定するように設計されています。(EQ 5バンドで6バンド分の相対的バランスを調整する設計となっています。)残響特性の表示では分析したすべてのバンドを表示するため、6バンドの表示となります。

12 ▲ボタンでチャンネルを選ぶ。

13 手順10～12を繰り返して各チャンネルにおける各周波数の残響特性の測定結果を確認する。

メモ

OSDのdB表示（縦軸の目盛り）は2dBごとに区切られています。

14 [Exit]を選んで決定する。

残響特性の測定結果確認画面を終了します。

メモ

- 各チャンネルにおける各周波数の残響をご覧になった結果、チャンネルごとまたは周波数ごとに響き方が異なるときは手順15へお進みください。
- 部屋の残響特性を改善したいときはここで吸音材の調整などを見直し、視聴環境の整備を行ってください。その場合、再度[Reverb Measurement]を行い[Reverb View]でその効果を確認することをお勧めします。
- 残響特性が特にバラつきなく測定されているときは理想的な残響特性が得られていますので、[Exit]を選んで決定し、手順20へお進みください。このとき、通常のAcoustic Cal EQ補正を行っていないと周波数特性は補正されないままですので、[Professional]を終了したあと、53ページの手順3の[Acoustic Cal EQ]を実行してください。

15 [Advanced EQ Setup]を選んで決定する。

補正時間位置を指定する画面になります。

16 ▲ / ▼ボタンで補正時間を選び、◀ / ▶ボタンで補正時間位置を指定する。

残響特性カーブを参考に補正時間位置を指定します。スピーカーからの音接音と初期反射音をカバーする[20 ～ 40ms]をお勧めします。補正時間位置の決め方は「Advanced EQ Setup での補正時間位置の決め方」（⇨**P.59**）をご覧ください。補正時間位置は各チャンネル、各周波数に共通です。チャンネルと周波数を切り換えることができますが、この切り換えは参考にする残響特性カーブの切り換えです。

17 ▲ / ▼ボタンで[Start]を選んで決定する。

18 [Start]を選んで決定する。

手順 1 6 で選んだ時間帯の音で周波数特性の補正を自動で行います。測定にはおよそ２～８分程度かかります。
設定の途中で静止画面を３分間放置すると画面は一時的に消えますが、何かボタンを押すことで再び同じ画面を表示します。

19 ▲ / ▼ボタンで[Data Copy]、[Check]または[Exit]のいずれかを選んで決定する。

[Data Copy]：
① [Data Copy] を選んで決定する。
② [CUSTOM1]または[CUSTOM2]のどちらにコピーするのか選んで決定する。
③ [Copy OK]を選んで決定する。
[Check]：　ALL CH ADJとFRONT ALIGNの各チャンネルについて確認することができます。
[Exit]：　［Advanced EQ Setup］を終了します。

20 ▲ / ▼ボタンで[Exit]を選んで決定する。

[Professional]（視聴環境の残響特性の測定と補正）を終了します。

21 もう一度▲ / ▼ボタンで[Exit]を選んで決定する。

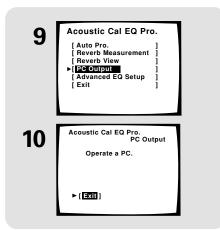
視聴環境の周波数の補正を終了します。

設定

パソコンのモニターで各チャンネルにおける各周波数の残響特性を確認する

ここでは残響特性の測定結果をお持ちのパソコンに転送してご覧いただく方法を説明します。測定結果をパソコンに転送してご覧いただくにはお持ちのパソコンが以下の条件を満たしていなければなりませんので、ご確認ください。

- OS が「Windows® XP」、「Windows® 2000」、「Windows® Millennium Edition」、「Windows® 98 Second Edition」、「Windows NT® 4.0 (Service Pack 6)」のいずれかであること。
- CPU が Pentium 3/300MHz 以上か AMD K6/300MHz 以上（または 100% 互換性のある CPU）であること
- メモリーが 128MB 以上であること
- 画面解像度が 800 × 600 ドット以上であること
- インターネットに接続可能であること
- 232C ポートを搭載していること（COM ポートの接続についてはパソコンメーカーへお問い合わせください）

Microsoft Windows® XP、Windows® 2000、Windows® Millennium Edition、Windows NT® および、Windows® 98 は米国Microsoft corporationの米国およびその他の国における登録商標です。

ここから読む場合は61ページの手順1～4と62ページの手順5～8を行ってから以下の手順へお進みください。

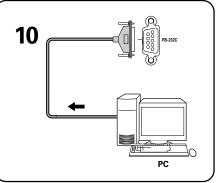
9 [PC Output]を選んで決定する。

パソコンへのデータ転送待ち画面になります。

10 本機とパソコンをRS-232Cケーブルで接続する。

ケーブルはメス—メスのクロスタイプを使用します。詳細はダウンロードしたPC アプリケーションの取扱説明書をご覧ください。

注意

接続するときは、主電源を必ずOFFにしてください。

11 パソコンの電源を入れて専用のPCアプリケーションを起動してください。

PC アプリケーションの取扱説明書の指示に従い、データ転送を行います。データ送信は 10 秒程で終了します。
パソコン表示用の残響特性データは、再度残響特性の測定を行うと本機のメモリから消去されます。測定後はすみやかにパソコンへデータ送信し、保存しておくことをお勧めします。

12 [Exit]を選んで決定する。

残響特性の測定確認画面を終了します。

メモ

- 各チャンネルにおける各周波数の残響をご覧になった結果、チャンネルごとまたは周波数ごとに響き方が異なるときは63ページの手順15へお進みください。
- 残響特性が特にバラつきなく測定されているときは理想的な残響特性が得られていますので、[Exit]を選んで決定し、63ページの手順21へお進みください。このとき、通常のAcoustic Cal EQ補正を行っていないと周波数特性は補正されないままですので、[Professional]を終了したあと、53ページの手順3の[Acoustic Cal EQ]を実行してください。

Bass Peak Level（超低域音声のピークレベル設定）

ドルビーデジタルおよびDTS対応のソフトは超低域信号成分（LFEチャンネル）を多く含んでいます。この超低域周波数信号がスピーカーの再生能力を超えると、再生音声に歪みが生じることがあります。ここでは、ＬＦＥチャンネルのピークレベルを設定する方法について説明します。ピークレベルを設定することにより歪みを防止します。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[1.Surround Setup]を選んで決定する。**
サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 **[Expert]を選択して決定する。**
エキスパート設定のメニュー画面になります。

3 **[Bass Peak Level]を選択して決定する。**
超低域音声のピークレベル設定になります。

4 **[Setting Start]か[Setting Cancel]を選んで決定する。**
[Setting Start]：テストトーンを再生し、設定を行います。自動的にMASTER VOLUMEが最小（−80）になります。手順5へお進みください。
[Setting Cancel]：LFEチャンネルのピークレベルを設定しません。手順7へお進みください。

5 **テストトーンを▲/▼ボタンで調整していき、スピーカーからの音に歪みが生じる手前まで調整する。**

注意
テストトーンは大きな音で再生されます。

サブウーファーで[YES]（有り）または[PLUS]が選択されている場合は、サブウーファーからのみテストトーンが再生されます。
サブウーファーが無しの場合は、サブウーファー以外の大（LARGE）に設定されているフロントまたはサラウンドスピーカーからテストトーンが再生されます。

6 **手順5で調整した値を決定する。**
MASTER VOLUMEが元の位置に戻ります。

7 **[Exit]を選んで決定する。**
超低域音声のピークレベル設定を終了します。

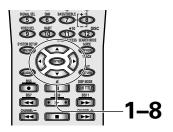
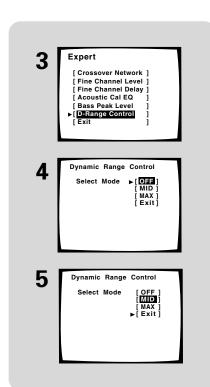
3
4
[ＯＦＦ]のときはこの操作が働いていません。

5
[−80]に設定されると、サブウーファーから音は出力されません。

メモ
- 工場出荷時は「OFF」に設定されています。
- 設定途中でRETURNボタンを押すと、設定変更せずに終了します。
- サブウーファーに自動スリープ機能があるときは、この設定を始める前にサブウーファーの電源が入っていることを確認してください。

設定

D-Range Control（ダイナミックレンジコントロールの設定）

ダイナミックレンジとは再生能力を表す用語で、どのくらい小さい音から大きい音までを正しく（小さな音はノイズに埋もれずに、大きな音は歪まずに）再生できるかを数値（dB）で表したものです。ダイナミックレンジコントロールとは、このダイナミックレンジを圧縮する機能です。音量を下げて映画などを楽しむ場合でも、ダイナミックレンジコントロールを設定することで微小な音も聞き取りやすくなります。ダイナミックレンジコントロールの効果が得られるのは、ダイナミックレンジコントロール対応のドルビーデジタルまたはDTSソフトだけですが、ほかのソフトでもミッドナイトリスニングモードで同様の効果が得られます。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [1.Surround Setup]を選んで決定する。

サラウンドの設定のメニュー画面になります。

2 [Expert]を選択して決定する。

エキスパート設定のメニュー画面になります。

3 [D-Range Control]を選択して決定する。

ダイナミックレンジコントロールの設定になります。

4 [OFF]、[MID]、[MAX]のいずれかを選択して決定する。

[OFF]：ダイナミックレンジを圧縮しません。
[MID]：ダイナミックレンジを多少圧縮します。
[MAX]：ダイナミックレンジを最大に圧縮します。
決定すると自動的に[Exit]が選ばれます。

5 [Exit]を決定する。

ダイナミックレンジコントロールの設定を終了します。

6 [Exit]を選択して決定する。

Expert Setup（エキスパートサラウンド設定）を終了します。

7 [Exit]を選択して決定する。

Surround Setup（サラウンドの設定）を終了します。

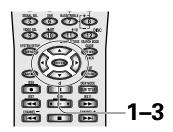
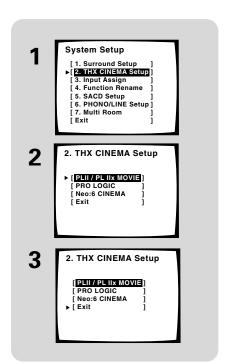
8 [Exit]を選択して決定する。

System Setupを終了します。

メモ

- 工場出荷時は「OFF」に設定されています。
- 大きい音量で楽しむときは、Dynamic Range ControlをOFFにすることをお勧めします。
- さまざまなダイナミックレンジコントロール対応のドルビーデジタルまたはDTSソフトを小音量でお試しください。

THX CINEMA Setup(THX CINEMAモードの設定)

ここでは2chソースをTHX CINEMAモードで再生したときのマトリクス・サラウンド・デコード方法を選択します。選択できるデコード方法は「DDPRO LOGIC II/DDPRO LOGIC IIx MOVIE」、「DDPRO LOGIC 」、「Neo:6 CINEMA」の3つです。それぞれのモードの詳しい説明は「リスニングモードの種類と効果」のMOVIEモード(⇨P.78)をご覧ください。2chソースをTHX CINEMAモードで再生すると、ここで選んだマトリクス・サラウンド・デコードがされたあと、THX CINEMA処理を行います。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [2.THX CINEMA Setup]を選んで決定する。

THX CINEMA Setupの設定画面になります。

2 2chソース再生時にTHX CINEMAモードにしたときのデコード方法を選んで決定する。

選択できるモードについては上記をご覧ください。
設定されたシステムが反転したまま[Exit]が自動で選択されます。

3 [Exit]を決定する。

THX CINEMA Setupを終了します。
System Setupを終了するときは、SYSTEM SETUP MENU を押します。

メモ

- 工場出荷時は[DDPRO LOGIC II/DDPRO LOGIC IIx MOVIE]に設定されています。
- DDPRO LOGIC IIxは、サラウンドバックチャンネルモード(⇨P.84)がOFFまたはサラウンドバックスピーカーがNOの場合、DDPRO LOGIC II(5.1ch サラウンド)となります。

Input Assign（入力に関する設定）

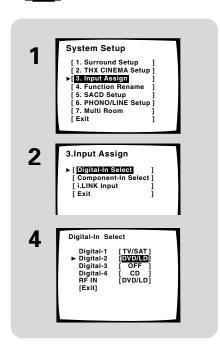
Digital-In Select（デジタル入力の設定）

デジタル入力端子(DIGITAL 1～4とDDRF IN)に接続したデジタル機器が、工場出荷時の設定と異なるときに設定します。DDRF IN入力はLDプレーヤーやDVD／LDプレーヤーのDDRF端子に対応します。

- Digital-1～4には[TUNER]、[PHONO/LINE]、[VIDEO]、[USB]、[i.LINK]を選ぶことができません。
- DDRF INには[TUNER]、[PHONO/LINE]、[VIDEO]、[CD]、[CD-R]、[MD]、[USB]、[i.LINK]を選ぶことができません。

メモ

工場出荷時の各入力端子の設定は右の図の通りです。

IN 1	TV/SAT
IN 2	CD-R
IN 3	DVD/LD
IN 4	CD
DDRF IN	DVD/LD

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[3.Input Assign]を選んで決定する。**

入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[Digital-In Select]を選んで決定する。**

デジタル入力の設定になります。

3 **変更したい入力を選んで決定する。**

例えばDigital-2を[CD-R]から[DVD/LD]に変更したいときはDigital-2を選びます。

4 **手順3で選んだ入力を変更して決定する。**

[CD-R]から[DVD/LD]に変更して決定します。

5 **他にも工場出荷時の設定ではない接続を行い、入力の変更が必要な場合は、手順3と4を繰り返す。**

6 **[Exit]を選んで決定する。**

デジタル入力の設定を終了します。

System Setupを終了するときは、SYSTEM SETUP MENU を押します。

メモ

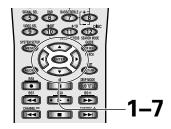
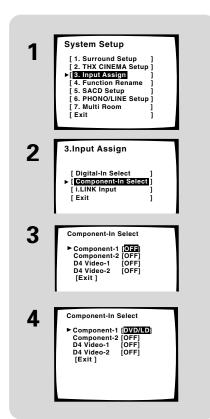
Digital-1～4で、同じ入力を選択することはできません。同じ入力を選択した場合は、元に設定されていた入力がOFFに切り換わります。

Component-In Select（コンポーネントビデオ入力の設定）

映像機器をCOMPONENT VIDEO入力端子（コンポーネントまたはD端子）を使って接続したときは、必ず設定してください。

- 選択できる入力は[DVD/LD]、[TV/SAT]、[VCR1]、[VCR2]、[OFF]です。

メモ

工場出荷時は、すべて「OFF」に設定されています。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[3.Input Assign]を選んで決定する。**
入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[Component-In Select]を選んで決定する。**
コンポーネントビデオ入力の設定になります。

3 **変更したい入力を選んで決定する。**
例えばComponent-1を[DVD/LD]に設定したいときはComponent-1を選びます。

4 **手順3で選んだ入力を変更して決定する。**
[OFF]から[DVD/LD]に変更して決定します。

5 **他にも入力の変更を行う場合は、手順3と4を繰り返します。**

6 **[Exit]を選んで決定する。**
コンポーネントビデオ入力の設定を終了します。

7 **もう一度[Exit]を選んで決定する。**
入力に関する設定を終了します。
System Setupを終了するときは、SYSTEM SETUP MENU を押します。

メモ

- Component-1～2、D4 Video-1～2で、同じ入力を選択することはできません。同じ入力を選んだときは、先に設定されていた入力がOFFに切り換わります。
- コンポーネントやD端子から入力された信号はSビデオ出力端子、コンポジット出力端子には出力されません。

設定

i.LINK Input(i.LINK入力の設定)

i.LINK接続したときは、必ずこの設定を行ってください。
i.LINK端子に接続した機器を「DVD/LD」などの入力ファンクションに割り当てます。この設定を行うと、その機器の音声と映像を本体のMULTI JOGまたはリモコンのINPUTボタンで同時に切り換えることができます。i.LINK端子に接続された機器がない場合は、この設定を選択することができません。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[3.Input Assign]を選んで決定する。**
入力に関する設定のメニュー画面になります。

```
System Setup
 [ 1. Surround Setup      ]
 [ 2. THX CINEMA Setup    ]
▶[ 3. Input Assign        ]
 [ 4. Function Rename     ]
 [ 5. SACD Setup          ]
 [ 6.  PHONO/LINE Setup   ]
 [ 7. Multi Room          ]
 [Exit]
```

2 **[i.LINK Input]を選んで決定する。**
i.LINK入力の設定になります。

```
3.Input Assign

 [ Digital-In Select      ]
 [ Component-In Select    ]
▶[ i.LINK Input           ]
 [Exit                    ]
```

3 **設定したいi.LINK対応機器を選んで決定する。**
i.LINK対応機器が9台以上接続されている場合は、▼または▲ボタンで、OSD画面を切り換えて、設定したい機器を表示させます。

```
i.LINK Input
  1 DV-S858Ai    [i.LINK]
▶ 2 DV-S969AVi   [i.LINK]

  [Exit]
```

4 **▲/▼ボタンで割り当てる入力ファンクションを選択する。**
- 機器からの映像出力を接続した入力ファンクションに割り当てると、音声と映像が同時に切り換えられます。
- [TUNER]、[PHONO]、[USB]は、割り当てることができません。

```
i.LINK Input
  1 DV-S858Ai    [ i.LINK ]
▶ 2 DV-S969AVi   [ DVD/LD ]

  [ Exit ]
```

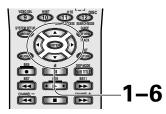
5 **他の機器についても設定する場合は、手順3と4を繰り返す。**

6 **「Exit」を選んで決定する。**
i.LINK入力の設定を終了します。

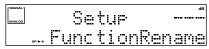
7 **もう一度「Exit」を選んで決定する。**
入力に関する設定を終了します。
System Setupを終了するときは、SYSTEM SETUP MENU を押します。

メモ
- 割り当てられていないi.LINK対応機器については、「i.LINK」と表示されます。
- i.LINK AUDIO以外のi.LINK対応機器に接続した場合は、「----」と表示され、入力ファンクションを割り当てることはできません。
- 割り当てたi.LINK対応機器のi.LINKケーブルを外したり、電源をオフした場合は、その機器の製品型番の前に「*」が表示されます。
- 複数の機器で同じ入力ファンクションを選択することはできません。同じ入力ファンクションを選んだときは、元に設定されていた機器が「i.LINK」に切り換わります。

Function Rename（入力ファンクション表示の設定）

フロントパネルディスプレイに表示される入力ファンクション名を変更することができます。例えばVCR1/DVRの入力端子にDVRを接続したとき、ディスプレイ表示を接続した機種の型番などに変更できる便利な機能です。各入力ファンクションごとに接続された機器の名称やメーカー名などを入力すれば、どこの入力ファンクションにどんな機器が接続されているのかを簡単に確認することができます。設定はリモコン、本体のどちらでもできますが、この操作は本体のマルチジョグを使用した方が容易なため、下記の手順は本体での操作を中心に説明します。

本体のSET UPボタンを押してから手順1へお進みください。

SET UP

1 「Function Rename」を選んで決定する。

入力ファンクション表示の設定画面になります。

2 名前を変更したいファンクションを選んで決定する。

文字入力画面になります。アンダーバーが点滅します。（文字入力位置がスペースのときはアンダーバーが、文字のときは文字が点滅します。）

3 入力する文字を選んで決定する。

入力できる文字は以下のとおりです。

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
0123456789
!"#$%&'()*+,–./:;<=>?@[\ ]^_{I}（スペース）

4 手順3を繰り返して入力ファンクション名を入力する。

5 ENTERボタンを押して入力ファンクション名を決定する。

6 他にも名前を変更したい入力ファンクションがある場合は、手順2～5を繰り返す。

本体のSET UPボタンを押して終了します。

入力ファンクション表示の設定を終了します。

メモ

RETURNボタンを押すと、文字入力位置を1つ前に戻すことができます。

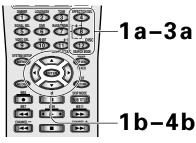
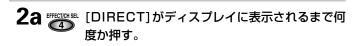
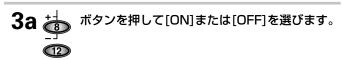
設定

SACD Setup（SACDダイレクトモード設定）

i.LINK接続でSACDを再生するときにこのダイレクトモードを設定すると、本機のDSP回路を経由せず、1ビットDSD(Direct Stream Digital)方式の高音質をより忠実に再現できます。設定は、リモコンで簡単にON/OFFすることができます。また、その他にもシステムセットアップ画面から行う方法があります。

1a AMP リモコンをアンプ操作モードにする。

2a EFFECT/CH SEL 4 [DIRECT]がディスプレイに表示されるまで何度か押す。

3a 8 / 12 ボタンを押して[ON]または[OFF]を選びます。

システムセットアップ画面から設定するには

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① AMP → ② SYSTEM SETUP MENU

1b [5.SACD Setup]を選んで決定する。

```
System Setup
 [ 1.Surround Setup      ]
 [ 2.THX CINEMA Setup    ]
 [ 3.Input Assign        ]
 [ 4.Function Rename     ]
▶[ 5.SACD Setup          ]
 [ 6.PHONO/LINE Setup    ]
 [ 7.Multi Room          ]
 [ Exit                  ]
```

2b [SACD DIRECT]を決定する。

```
5.SACD Setup
▶SACD DIRECT      [ OFF ]
 [ Exit ]
```

3b [ON]または[OFF]のどちらかを選んで決定する。

```
5.SACD Setup
▶SACD DIRECT      [ ON ]
 [ Exit ]
```

4b [Exit]を選んで決定する。

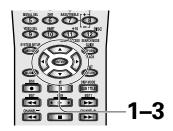
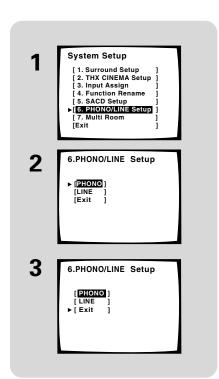
SACDダイレクトモードの設定を終了します。
System Setupを終了するときは、SYSTEM SETUP MENU を押します。

```
5.SACD Setup
 SACD DIRECT      [ ON ]
▶[ Exit ]
```

メモ

- SACDダイレクトモードが[ON]のとき、マルチチャンネルのＳＡＣＤを再生すると、センターチャンネルやサブウーファーがない場合でもそれらの音は、ダウンミックスされてフロント左右から出力されます。
- 工場出荷時は[OFF]に設定されています。
- SACDダイレクトモードを[ON]に設定して、i.LINK経由でSACDを再生したときは、Speaker Distance（⇨**P.48**）の設定が無効になります。
- Second Zone接続（⇨**P.32**）をした場合、SACD DIRECTを[ON]にすると（スピーカーシステムBからは）音が出ません。

PHONO/LINE Setup（PHONO/LINE端子の切り換え設定）

本機リアパネルのPHONO/LINE IN端子をPHONO端子として使うか、LINE端子として使うかを選択することができます。以下の設定でPHONOに設定したときはPHONO/LINE IN端子にはフォノイコライザーを内蔵していないレコードプレーヤーを接続し、LINEに設定したときはフォノイコライザー内蔵のレコードプレーヤーまたはその他のオーディオ機器を接続してください。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [6.PHONO/LINE Setup]を選んで決定する。

2 [PHONO]または[LINE]のどちらかを選んで決定する。

それぞれの説明は上記をご覧ください。
カーソルが[Exit]に移動します。

3 [Exit]を決定する。

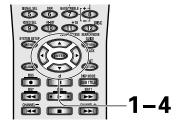
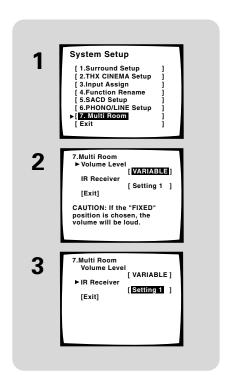
PHONO/LINE端子の切り換え設定を終了します。
System Setupを終了するときは、SYSTEM SETUP MENU を押します。

メモ

工場出荷時は[PHONO]に設定されています。

設定

Multi Room（マルチルームとIRレシーバーの設定）

マルチルーム接続をした場合は、本機で音量の調整をするかサブルーム側のアンプで行うかの設定をします。また、IRレシーバーを使うときは、ここでIRレシーバーのタイプを選択します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 [7.Multi Room]を選んで決定する。

2 Volume Levelについて項目を選んで決定する。

[VARIABLE]：本機で音量調整をする場合。

[FIXED]：サブルームのアンプで音量調整をする場合。

3 必要に応じてIRレシーバーのタイプを選んで決定する。

[Setting 1]：通常は、この設定を選びます。

[Setting 2]：Setting 1では適切に作動しなかった場合、この設定にします。

4 設定が終了したら、[Exit]を選んで決定する。

System Setupメニューに戻ります。

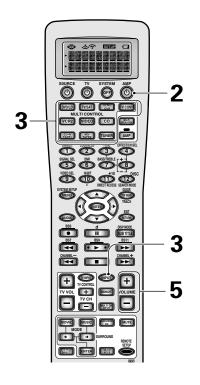
メモ

- 工場出荷時の設定は、次のようになっています。
  Volume Level：VARIABLE
  IR Receiver：Setting 1
- I R レシーバーによっては、本機に使用できない場合があります。
- 「SurrBack System」（⇨**P.39**）で[MR&S]を選択した場合は、[Volume Level]の設定は変更できません。

基本再生

接続した機器を再生するときの手順です。本機では、「ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」（⇨**P.76**）で入力信号を選んで、「リスニングモードの選択」（⇨**P.77**）でリスニングモードを選ぶことが主な操作です。

2　■OFF_ONボタン（主電源）

3　5

1　再生する機器の電源を入れる。

2　AMP

本機の電源を入れる。

3　INPUT

再生する機器を選ぶ。

ボタンを押すたびに（本体の場合は、MULTI JOGを右に回すと）入力が順次切り換わります。リモコンの他機器操作ボタンで直接選択することもできます。

必要に応じて入力信号の種類を選びます。

「ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」（⇨**P.76**）

4　手順1の再生機器の再生を開始する。

5　VOLUME

音量を調節する。

−80dB（最小値）から＋12dB（最大値）の範囲で調節できます。

メモ

前面の入力端子に接続した機器を選択するには入力を「VIDEO」にします。

96kHz/24ビットフォーマットディスクの再生について

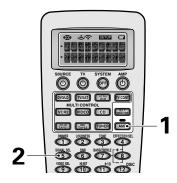
本機では、DTS 96/24やPCM96kHz(24ビット/20ビット/16ビット)フォーマットのソフトを高音質(すべて96kHzで処理)で再生することができます。

DTS 96/24 5.1chソフト：リスニングモードはSTEREO/DIRECTモード以外のときはDTS 96kHzと表示され、切り換えることはできません(マルチチャンネル出力)。STEREO/DIRECTモードのときは96kHz STEREOと96kHz DIRECTが切り換わり、2ch再生を行います。

96kHz 2chソフト(DTSまたはPCM)：STEREOモードが自動的に選択されます。

- DTS 96/24フォーマットはお手持ちのDVDプレーヤーが96kHzデジタル出力に対応していなくても、DTS対応であれば本機を通して再生することができます。詳しくは、DVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

ANALOG/DIGITAL信号の切り換え

本機では各入力についてアナログとデジタルの入力信号を切り換えることができます。

1 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 SIGNAL SEL 5 **再生したい入力信号を選択する。**

SIGNAL SELECTボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

AUTO → ANALOG → DIGITAL → ⧉RF → AUTO

AUTOにしたときは、i.LINK→⧉RF→DIGITAL→ANALOGの優先順位で自動的に入力信号を選択します。(⧉RFは⧉RF端子が割り当てられている入力ファンクションを選んでいるときのみ選択することができます。)

- SIGNAL SELECTボタンでANALOGを選択した状態でDTS対応のLDを再生すると、 DTSの原信号がそのまま再生されるため、ノイズが発生します。入力信号は必ずDIGITALを選択してください。
- DVDプレーヤーの機種によっては、再生できるデジタル信号に制限があります(DTS信号を出力しないなど)。詳しくは、お使いのDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

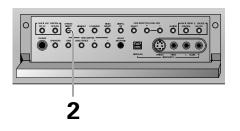
✎メモ

- デジタル入力端子が割り当てられていない機器については、SIGNAL SELECTは、ANALOGに固定されています。
- i.LINK入力設定(⇨**P.70**)をしていないi.LINK機器を再生する場合は、SIGNAL SELECTはAUTOに固定されます。
- 本機は、ドルビーデジタル、DTS、PCM(サンプリング周波数 fs：32kHz、44.1kHz、48kHz、88.2kHzおよび96kHz)、MPEG-2 AACのデジタル信号に対応しています。またi.LINK経由のデジタル信号ではDVDオーディオ(192kHzを含む)、SACDにも対応しています。これら以外のデジタル信号は再生できないことがありますので、その場合はアナログ接続してANALOGを選択してください。
- カラオケ機器のマイク音声、およびアナログオーディオのみ収録されているLDの音声はデジタル出力からは出力されません。このような音声を再生するには必ずANALOGを選択してください。

リスニングモードの選択

本機には多くのリスニングモードがありますが、入力信号に対して忠実な再生をする場合はストリームダイレクトモードで行います。また、入力ソースに合わせて、個々のリスニングモードをマニュアルでも選択できます。

ストリームダイレクトモード

2chの入力ソースには2chデコード処理を行い、マルチチャンネルの入力ソースにはマルチチャンネルデコード処理を行って、自動的に最適なリスニングモードを選んで再生します。このモードをONにしておくと、ソースによってステレオ再生とマルチチャンネル再生が自動で切り換わります。

1 再生する。(「基本再生」⇨**P.75**)

2 STREAM DIRECT

ストリームダイレクトモードをONにする。

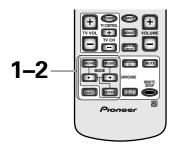
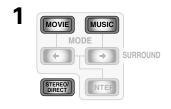
ボタンを押すたびにストリームダイレクトモードのONとOFFが切り換わります。

メモ

- 工場出荷時は[ON]に設定されています。
- ヘッドホンの使用やマルチチャンネルのアナログ入力が選択されると、ストリームダイレクトモードは無効になります。
- ドルビーサラウンドソースなど、2chサラウンド検出信号が記録されているディスクについては、マルチチャンネル再生します。
- ストリームダイレクトモードがＯＮになっている時にリスニングモードの選択(⇨**P.77**)を行うと、ストリームダイレクトモードは解除されます。
- マルチチャンネルソース再生時のサランドバックチャンネルの有無は、サランドバックチャンネルモード(⇨**P.84**)の設定に従います。ストリームダイレクトモード時のサランドバックチャンネルモードの初期値はＯＮです。(マルチチャンネルソースが入力されている時に、サランドバックチャンネルモードの選択ができます。)

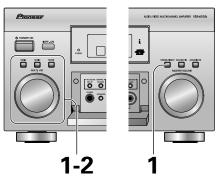
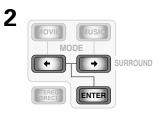
各リスニングモードの選択

このリスニングモードを選ぶと、本機のDSP(Digital Signal Processor)回路で入力したデジタル音声信号を処理して、お好みの効果を加えて再生することができます。

1

好みのリスニングモードのタイプを選ぶ。

「MOVIE」、「MUSIC」、「STEREO/DIRECT」の中から選びます。

ディスプレイに各タイプの名称が表示されます。

2

手順1で選んだタイプからリスニングモードの種類を選んで決定する。

⬅/➡ボタンを押すたびに(本体の場合は、MULTI JOGを回すと)リスニングモードの種類が順次切り換わり、ENTERボタンで決定します。

再生しているソースや選択されたチャンネル数などに応じて選択できます。

ディスプレイの下段にモードの名称が表示されます。

操作／機能

✎メモ
- 各モードの特徴として、「MOVIE」は主にDVDなどで映画ソフトを再生するとき、「MUSIC」はCDやテレビ放送でコンサートホールなどの臨場感を楽しむときに適しています。「STEREO/DIRECT」はステレオ(2ch)再生モードです。詳しくは「リスニングモードの種類と効果」(⇨**P.78**)をご覧ください。
- DDPRO LOGIC IIxは、サラウンドバックチャンネルモード(⇨**P.84**)がOFFまたはサラウンドバックスピーカーがNOの場合、DDPRO LOGIC II(5.1ch サラウンド)となります。
- (i.LINKを含む)デジタル接続でDVDオーディオ、SACDまたは48kHzを超える入力信号を再生しているときは、「MOVIE」モードと「MUSIC」モードは使用できません。

リスニングモードの種類と効果

「リスニングモードの選択」(⇨**P.77**)で選べる各リスニングモードについて、それぞれの効果を説明します。本機には以下のリスニングモードがあります。

STEREO/DIRECTモード(ステレオ)

左右のフロントスピーカーからステレオ音声(2ch)で再生するモードです。
ドルビーデジタルやDTSなどのマルチチャンネルソースは2chにダウンミックスして再生します。

種類	効　果	注意点
STEREO	音場補正(Surround Setup)の各設定を反映し、「便利な音声再生用機能」(⇨**P.87**)の効果を加えてステレオ再生します。	
DIRECT	2ch ソースを原音に忠実な高音質ステレオ再生します。	アナログ接続のときは、「スピーカーシステムの設定」(⇨**P.45**) でPLUS に設定しても、サブウーファーから音は出力されません。

✎メモ

「DIRECT」を選択しているときに、「アコースティックキャリブレーションEQ」(⇨**P.86**)や「便利な音声再生用機能」(⇨**P.87**)をONにすると、自動的に「STEREO」に切り換わります。

MOVIEモード (サラウンド)

映画を楽しむときに適したモードです。入力ソース(2chまたはマルチチャンネル)により対応できるモードが異なります。なお、パイオニアオリジナルサラウンドモードは入力ソースに左右されずに多彩なサラウンド環境をお楽しみいただけます。

2ch入力ソース

種類	効　果	注意点
THX CINEMA	あらゆる映画ソフトの再生に適します。ＴＨＸ独自技術により映画館の音響に近似した音場が得られます。	2ch ソースのときは、「THX CINEMA Setup」(⇨**P.67**) で選ばれたデコード方法でマルチチャンネル化します。
DDPL II/DDPL IIx MOVIE (DDPRO LOGIC II/DDPRO LOGIC IIx MOVIE)	2chソースを5.1ch化(DDPL II MOVIE)または7.1ch化(DDPL IIx MOVIE)します。映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド･エンコード作品に効果的です。	デジタルマルチチャンネルソースを入力しているときは選択できません。
DDPRO LOGIC	2chソースを4.1ch化します。ビデオテープやTV放送など、ソースのクオリティを問わずにご使用いただけます。	
Neo:6 CINEMA	2chソースを6.1ch化します。映画再生に適したモードで、2chソースを6.1chソースと同じような雰囲気で楽しめます。	

マルチチャンネル入力ソース

マルチチャンネルソースを入力しているとき、サラウンドバックスピーカーを接続していてサラウンドバックチャンネルモード（⇨**P.84**）で[ON]が選択されている場合に、（フォーマットに応じて）以下のモードが選択できます。

種類	効　果	注意点
THX SURROUND EX	5.1チャンネルソースを6.1または7.1chで再生します。	ドルビーデジタルまたはMPEG2-AACを入力しているときに選択可能です。
▯▯PRO LOGIC IIx MOVIE+THX	最大で7.1chの再生を行います。マルチチャンネルの映画再生に適したモードです。	
Dolby Digital EX	5.1chソースからサラウンドバックチャンネル音声を創り出して、6.1ch化して出力します。	
▯▯PRO LOGIC IIx MOVIE	5.1chソースを7.1ch化して出力します。	
DTS+Neo:6	DTS5.1のソースを、6.1または7.1chで再生します。	DTSを入力しているときに選択可能です。
DTS+Neo:6+THX	最大で7.1chの再生を行います。DTSマルチチャンネル映画の再生に適しています。	
DTS-ES	DTS-ESのソースを6.1または7.1chで再生します(ディスクによっては「DISC 6.1」または「MTRX 6.1」が表示されます)。	
DTS-ES+THX	DTS-ESのソースを最大で7.1chの再生を行います。マルチチャンネル映画の再生に適しています。	

パイオニアオリジナルサラウンドモード

種類	効　果	注意点
ACTION	アクションシーンや戦闘、爆発シーンの迫力が、包み込むように再現され、映画の迫力や臨場感を楽しめます。	2ch、マルチチャンネルのソースを問わず、それぞれに特徴的なサラウンド効果を得られます。
SCI-FI (Science Fiction)	セリフと効果音の分離が良いため、SF映画などのSE（特殊効果音）の多いソースに効果的です。	
DRAMA	サラウンドスピーカーからの音が一体となって、1つの大きなスピーカーのように響くイメージで、落ち着いた雰囲気でストーリー性重視の映画の再生に効果的です。	
MUSICAL	ミュージカルなどの音楽系ソースを再生しているときのサラウンド感や、コンサートホールのホール感を再現します。広い空間で音に包み込まれるような響きが特徴です。	
MONOFILM	古い映画やモノラル信号のテレビ放送も含め、すべてのソースに適したマルチチャンネルサラウンドモードです。	
5/7-D THEATER	2chで収録された音声を、5chまたは7chのサラウンド効果で再生できます。ドルビーサラウンドソフト再生時は特に効果的です。「サラウンドバックチャンネルモード」（⇨**P.84**）の設定内容により「5-D」「7-D」の表示が変わります。	

MUSICモード（サラウンド）

音楽ソフトを楽しむときに適したモードです。入力ソース（2chまたはマルチチャンネル）により対応できるモードが異なります。なお、パイオニアオリジナルサラウンドモードは入力ソースに左右されずに多彩なサラウンド環境をお楽しみいただけます。

2ch入力ソース

種類	効　果	注意点
DDPL II/DDPL IIx MUSIC (DDPRO LOGIC II/DDPRO LOGIC IIx MUSIC)	2chソースを5.1ch化（DDPL II MUSIC）または7.1ch化（DDPL IIx MUSIC）します。音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース（CDなど）を再生するときに効果的です。	デジタルマルチチャンネルソースを入力しているときは選択できません。
Neo:6 MUSIC	2chソースを6.1ch化します。フロントからは原音をそのまま再生するため音質の変化がなく、音楽再生に適したモードです。	

マルチチャンネル入力ソース

マルチチャンネルソースを入力しているとき、サラウンドバックスピーカーを接続していてサラウンドバックチャンネルモード（⇨P.84）で[ON]が選択されている場合に、（フォーマットに応じて）以下のモードが選択できます。

種類	効　果	注意点
Dolby Digital EX	5.1chソースからサラウンドバックチャンネル音声を創り出して、6.1ch化して出力します。	ドルビーデジタルまたはMPEG2-AACを入力しているときに選択可能です。
DDPRO LOGIC IIx MUSIC	5.1chソースを7.1ch化して出力します。	
DTS+Neo:6	DTS5.1のソースを6.1または7.1chで再生します。	DTSを入力しているときに選択可能です。
DTS-ES	DTS-ESのソースを6.1または7.1chで再生します(ディスクによっては「DISC 6.1」または「MTRX 6.1」が表示されます)。	

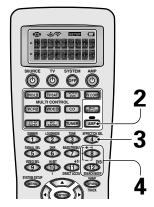
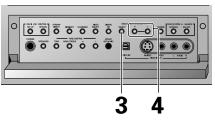
パイオニアオリジナルサラウンドモード

種類	効　果	注意点
CLASSICAL	大型のコンサートホールをイメージしています。反射音の遅延時間帯が長く、さらに残響音を加えることでコンサートホール特有の美しい響きと、オーケストラの迫力が楽しめます。	2ch、マルチチャンネルのソースを問わず、それぞれに特徴的なサラウンド効果を得られます。
CHAMBER	石（コンクリート製）のコンサートホールをイメージしています。残響音豊かな本格的コンサートホールの響きを楽しめます。	
JAZZ	ジャズクラブなどの小規模なホールをイメージしています。音の響きが強いのが特徴で、目の前で演奏しているような迫力と定位感を楽しめます。	
ROCK	中規模コンサートホールをイメージしています。楽器の分離感と臨場感があり、重低音に迫力のあるサラウンドを楽しめます。	
DANCE	フロアの床面が正方形をしているクラブをイメージしています。音の響きが強いのが特徴で、迫力のあるダンスミュージックが楽しめます。	
5/7CH STEREO	標準のステレオ（2ｃｈ）音声を加工することなく、ステレオ音声のまま5本または7本のスピーカーで再生します。部屋のどの場所でも同じようなステレオ感が得られます。「サラウンドバックチャンネルモード」（⇨P.84）の設定内容により「5CH」「7CH」の表示が変わります。	

メモ

「サウンドフォーマットについて」（⇨P.113）に各モードの技術詳細があります。

サラウンドモードの効果を調整する

MOVIEまたはMUSICモードのエフェクト効果を調整します。調整できるサラウンドモードはMOVIEが「ACTION」、「SCI-FI」、「DRAMA」、「MUSICAL」、「MONOFILM」、「5/7-D THEATER」の6つです。MUSICでは「CLASSICAL」、「CHAMBER」、「JAZZ」、「ROCK」、「DANCE」、「5/7CH STEREO」の6つを調整することができます。

1 効果を調整したいサラウンドモードを選択する。(⇨**P.78**)

2 AMP リモコンをアンプ操作モードにする。

3 EFFECT/CH SEL 4 エフェクトレベルの設定にする。

ディスプレイに「EFFECT」が表示されるまでEFFECT/CH SELボタンを数回押してください。

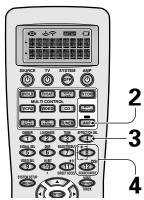
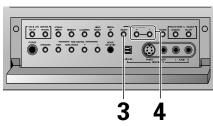
4 ＋ 8 － 12 エフェクトレベルの効果を調整する。

エフェクトレベルは10～90の範囲で調整することができます。10が最も効果が弱く、90が最も効果を強くします。10ステップで調整します。

メモ

工場出荷時の設定は50に設定されています。(ただし、5/7CH STEREOのみ90に設定されています。)

スピーカーの出力レベルを調整する

再生している音を聞きながら、チャンネルごとに出力レベルを調整できます。

1 再生する。(「基本再生」⇨**P.75**)

2 AMP リモコンをアンプ操作モードにする。

3 EFFECT/CH SEL 4 出力レベルの設定にする。

EFFECT/CH SELボタンを押して調整したいチャンネルを選びます。

4 ＋ 8 － 12 出力レベルを調整する。

－10.0～＋10.0dBの範囲で調整できます。

メモ

スピーカーの出力レベルの調整は、下記の4つのグループで別々に設定可能です。

- STEREOモード(⇨**P.78**)
- MOVIEモード(⇨**P.78**)
- MUSICモード(⇨**P.80**)
- MULTI CH INモード(⇨**P.90**)/SACDダイレクトモード(⇨**P.72**)

▯▯PRO LOGIC II/▯▯PRO LOGIC IIx MUSICモードに音響効果を加えて調整する

2chの入力を▯▯PRO LOGIC II/▯▯PRO LOGIC IIx MUSICモードで再生しているとき、下記の3つの音響効果を加え、その効果を調整することができます。それぞれの説明は以下のとおりです。

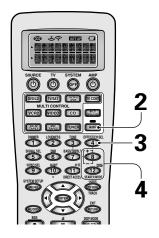
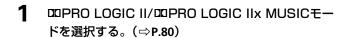
CENTER WIDTH：センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーに振り分けて出力することで、音色の不一致を緩和させることが可能になり、音楽再生により適した音場を創り出すことができます。効果は0～7の範囲で調整することができます。0がセンタースピーカーからのみの出力で、7はセンターチャンネルの音声すべてを左右のフロントスピーカーに振り分けます。工場出荷時は3に設定されています。

DIMENSION：リスニングポジションから前方の音場を強くするか、後方の音場を強くするかを調整することで、広がりのある音場を創り出すことができます。＋3から－3の範囲で調整することができます。＋3はリスニングポジションから前方の音場が強くなり、－3はリスニングポジションから後方の音場が強くなります。工場出荷時は0に設定されています。

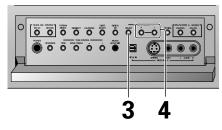
PANORAMA：前方の音場を左右に大きく回り込ませ、サラウンドchにつなげるようなサラウンド効果を加えます。正確な定位よりも雰囲気を楽しむための機能です。オンまたはオフの設定で、工場出荷時はオフに設定されています。

1 ▯▯PRO LOGIC II/▯▯PRO LOGIC IIx MUSICモードを選択する。（⇨**P.80**）

2 AMP リモコンをアンプ操作モードにする。

3

「CENTER WIDTH」、「DIMENSION」、「PANORAMA」の中から加えたい音響効果を選ぶ。

ディスプレイに設定したい音響効果が表示されるまでEFFECT/CH SELボタンを数回押してください。
それぞれの音響効果の詳しい説明は上記を参照してください。

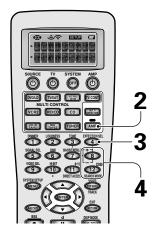
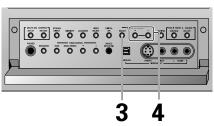
4

音響効果を調整する。

それぞれの音響効果の詳しい調整値は上記を参照してください。

✎メモ

- 本体で▯▯PRO LOGIC II/▯▯PRO LOGIC IIx MUSICモードに音響効果を加える場合は、フロントパネルのEFFECT/CH LEVELのSELECTボタンを何度か押してディスプレイに「CENTER WIDTH」、「DIMENSION」、「PANORAMA」のいずれかを表示させ、+/－ボタンを押して調整します。
- CENTER WIDTHは、「スピーカーシステムの設定」（⇨**P.45**）でセンタースピーカーを「無し」に設定しているときは選択できません。

Neo:6 MUSIC モードのセンターチャンネルのイメージを調整する

2ch の入力を Neo:6 MUSIC で再生しているとき、センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーに振り分けて出力することで、音色の不一致を緩和させることが可能となり、音楽再生に適した音場を創り出すことができます。効果は 0 〜 5 の範囲で調整することができます。0 はセンターチャンネルの音声が左右のフロントスピーカーからも出力されて、音場が広がったように聞こえます。5 はセンターチャンネルの音声が主にセンターから出力し、センターの音像が明確化されます。工場出荷時は 2 に設定されています。

1 Neo:6 MUSICモードを選択する（⇨**P.77**）。
Neo:6 MUSICモードは入力信号が2chのときのみ選択することができます。

2 AMP　リモコンでアンプ操作モードにする。

3 EFFECT/CH SEL 4　「CENTER IMAGE」を選ぶ。
ディスプレイに「CENTER IMAGE」が表示されるまで EFFECT/CH SEL 4 ボタンを押してください。
詳しい説明は上記をご覧ください。

4 ＋ 8 ／ − 12　センターチャンネルイメージを調整する。
0〜5の範囲で調整することができます。

メモ

CENTER IMAGEは、「スピーカーシステムの設定」（⇨**P.45**）でセンタースピーカーを「無し」に設定しているときは選択できません。

サラウンドバックチャンネルモード

本機ではサラウンドバックスピーカーを接続しているときに、サラウンドバックスピーカーから音を出す(6.1chまたは7.1ch再生)か出さない(5.1ch再生)かを設定することができます。また、サラウンドバックスピーカーを接続していないときでも、サラウンドスピーカーから仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すか出さないかを設定することもできます(バーチャルサラウンドバックモード)。

サラウンドバックチャンネルのON/AUTO/OFF

サラウンドバックチャンネルモードをON、AUTO、OFFのいずれかに設定します。設定内容は以下のとおりです。

- ON　：リスニングモードでサラウンドモードが選択されているときは最大7.1chでの再生を行います。
- AUTO：ONと同様ですが、6.1ch再生検出信号を含んだソースやリスニングモードによってサラウンドバックチャンネルがON/OFFします。
- OFF　：最大5.1chでの再生を行います。(サラウンドバックスピーカーから音は出ません)

1

サラウンドバックチャンネルをON、AUTO、OFFのいずれかにする。

SB CH MODEボタンを押すたびに、ONとAUTOとOFFが切り換わります。

メモ

- サラウンドバックチャンネルモードを設定したあとで「スピーカーシステムの設定」(⇨**P.45**)を変更すると、サラウンドバックチャンネルモードが自動で切り換わることがありますのでご確認ください。
- サラウンドバックチャンネルモードは入力ファンクションごとに設定されます。
- マルチチャンネル入力モードまたはステレオモードを選んでいるときは切り換えができません。
- (i.LINKを含む)デジタル接続でDVDオーディオ、SACDと88.2kHz以上の入力信号を再生しているときは、使用できません。

バーチャルサラウンドバックモードのON/AUTO/OFF

サラウンドバックスピーカーを接続していないときに、サラウンドスピーカーから仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すモードです。ON、AUTO、OFFのいずれかに設定します。設定内容は以下のとおりです。

- ON　：リスニングモードでTHX CINEMA以外のサラウンドモードが選択されているときはONになり、サラウンドスピーカーから仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出します。ただし、ステレオ信号を入力しているときはNeo:6 CINEMA/MUSICまたはパイオニアオリジナルサラウンドモードのときのみONとなります。
- AUTO：ONと同様ですが、6.1ch再生検出信号を含んだソースやリスニングモードによってバーチャルサラウンドバックモードがON/OFFします。
- OFF　：サラウンドスピーカーから仮想のサラウンドバックチャンネル音声は出ません。

1

バーチャルサラウンドバックモードをON、AUTO、OFFのいずれかにする。

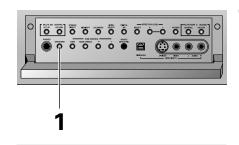
SB CH MODEボタンを押すたびに、ONとAUTOとOFFが切り換わります。

メモ

- バーチャルサラウンドバックモードは入力ファンクションごとに設定されます。
- マルチチャンネル入力モードまたはステレオモードを選んでいるときは切り換えができません。
- バーチャルサラウンドバックモードの動作時は、ディスプレイに「+VSB」と表示されます。
- (i.LINKを含む)デジタル接続でDVDオーディオ、SACDと88.2kHz以上の入力信号を再生しているときは、使用できません。

スピーカーシステムA/Bの切り換え

スピーカーシステムA/Bを切り換えると、再生されるスピーカーが変わります。必要に応じて使用するスピーカーシステムを選択してください。

メモ

ヘッドホンをヘッドホンジャックに差し込んでいる間は自動的にOFFに切り換わります。

1

スピーカーシステムを切り換える。

「サラウンドバックシステムの設定」(⇨**P.39**)によって選択できるモードが換わります。
ボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

「Normal System」を選択している場合

→ A → OFF

「Second Zone」を選択している場合

→ A → B → A＋B → OFF

「Front Bi-Amp」を選択している場合

→ A＋B → OFF

「MR & S」を選択している場合

→ A → OFF

スピーカーシステムA、B、A+Bについて

スピーカー端子からの出力音声はスピーカーシステムの切り換えに応じて次のように変わります。

A(SP►A)　：　スピーカー端子🄰のスピーカー(とサブウーファー)から音が出ます。
「Normal System」のときは接続しているすべてのスピーカーから音が出ます。
「Second Zone」のときはサラウンドバックスピーカー以外、接続しているすべてのスピーカーから音が出ます。
「Front Bi-Amp」のときはSP►Aを選択することはできません。

B(SP►B)　：　サラウンドバックシステムを「Second Zone」に設定したときのみ選択することができます。スピーカー端子🄱(SURROUND BACK)のスピーカーからのみ音が出ます。すべての音声成分は2chにダウンミックスされます。(MULTI CH INモードとSACDダイレクトモード[ON]のときは音は出ません)

A+B(SP►AB)　：　出力される音声は設定により異なります。
「Normal System」のときはSP►ABを選択することはできません。
「Second Zone」のときはスピーカー端子🄰とスピーカー端子🄱のスピーカーから音が出ます。スピーカー端子🄱から出るすべての音声成分は2chにダウンミックスされます。(MULTI CH INモードとSACDダイレクトモード[ON]のときは音は出ません)
「Front Bi-Amp」のときはスピーカー端子🄰とスピーカー端子🄱のスピーカーから音が出ます。スピーカー端子🄱から出る音はスピーカー端子🄰のフロントと同じ音が出力されます。

OFF(SP►　)　：　スピーカーからは音が出ません。ただし、プリアウトからは出力されていますので、入力信号の種類やスピーカーシステムの設定によってはサブウーファーから音が出ることがあります。

アコースティックキャリブレーションEQのON/OFF

「視聴環境の周波数特性の補正」（⇨**P.37**）の設定をON/OFFします。それぞれのチャンネルを調整しても、以下の設定がOFFになっていると、アコースティックキャリブレーションEQの効果は発揮されません（自動設定後は自動的に「ALL CH ADJUST」でONになります）。設定のONには「ALL CH ADJUST」と「FRONT ALIGN」、「CUSTOM1」、「CUSTOM2」の4つのモードがあります。詳細は以下のとおりです。

ALL CH ADJUST：部屋の特性を含めて、サブウーファーを除いたすべてのチャンネルの周波数特性をフラットに補正します。すべてのチャンネル間の再生音のつながりが良くなり、サラウンドなどの音場のバランスが改善されるため、ワンランク上の臨場感、迫力をお楽しみいただけます。

FRONT ALIGN：フロント左/右(L/R)とサブウーファーを除いたすべてのチャンネルの周波数特性を、フロントchの特性に合わせます。フロントchについてはスピーカー本来の性能をそのまま引き出し、他のチャンネルはフロントchの特性に合わせることで、チャンネル間のつながりと音場のバランスを改善します。

CUSTOM1：「視聴環境の周波数特性の補正」の設定値をコピー（保存）することができます。さらにCUSTOMにコピーされた設定値は手動で微調整することもできます。

CUSTOM2：CUSTOM1と同様です。

1

アコースティックキャリブレーションEQをONにする。

ボタンを押すたびにアコースティックキャリブレーションEQが以下のように切り換わります。

→ ALL CH ADJUST → FRONT ALIGN → CUSTOM 1 → CUSTOM 2 → OFF →

ALL CH ADJUSTまたはFRONT ALIGN、CUSTOM1、CUSTOM2のときはONとなりMCACCインジケーターが点灯します。

メモ

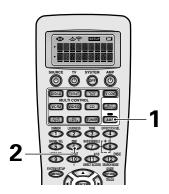
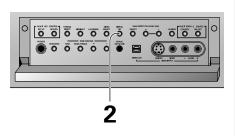
- アコースティックキャリブレーションEQのON/OFFはすべてのファンクションに共通で切り換わります。
- MULTI CH INモードでは、使用できません。
- SACDダイレクトモードを[ON]に設定して、i.LINK経由でSACDを再生したときは、使用できません。
- リスニングモードでDIRECTを選択しているときにアコースティックキャリブレーションEQをONにすると、リスニングモードが自動的にDIRECTからSTEREOに切り換わります。
- 工場出荷時はOFFに設定されていますが、「Auto Setting」（⇨**P.40**）でオートセットアップを行ったときはALL CH ADJUSTで自動的にONになります。

便利な音声再生用機能

✎ メモ

リスニングモードでDIRECTを選択しているときに、これらの機能をONにすると、リスニングモードは自動的にDIRECTからSTEREOに切り換わります。

デジタルノイズリダクション機能（ノイズの低減）

DIGITAL NRをONにすると、カセットテープやビデオテープなど、雑音が多く含まれるソフトのノイズを低減することができます。

1 リモコンをアンプ操作モードにする。

2 DNR 6 DIGITAL NRをONにする。

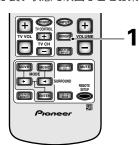
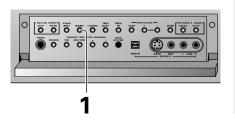
ボタンを押すたび、DIGITAL NRがONまたはOFFに切り換わります。
ONにするとDNRインジケーターが点灯します。

✎ メモ

- 以下の場合は、DIGITAL NRをONにしてもノイズが十分に低減されないことがあります。
  - 突然のノイズ
  - 極端に大きいノイズ
  - 高い周波数成分を非常に多く含む信号
  - もともとノイズの少ない録音状態の良い信号
- 各音源に対し、DIGITAL NRは以下のような改善効果があります。
  ステレオ再生時
  - アナログ入力時　10〜18dB
  - デジタル入力　10〜15dB
  - AM/FMチューナー 10〜15dB

  MOVIEまたはMUSICモードで再生時　6〜10dB
- THX CINEMA、MULTI CH INモードでは使用できません。
- (i.LINKを含む)デジタル接続でDVDオーディオ、SACDと88.2kHz以上の入力信号を再生しているときは、使用できません。

ミッドナイトリスニング機能（小音量での快適なサラウンド再生）

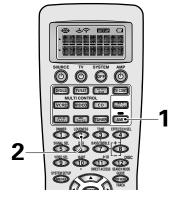
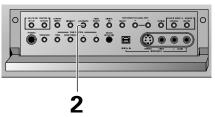
音量を小さくすると、サラウンド効果が弱くなったり、微小な音やセリフなどが聴きとりにくくなることがあります。ミッドナイトリスニング機能は、ボリュームレベルやソースに応じて様々な補正を行いますので小音量でも全体のバランスが良い状態で映画などをお楽しみいただけます。

1 MIDNIGHT ミッドナイトリスニング機能をONにする。

ボタンを押すたびに、ミッドナイトリスニング機能がONまたはOFFに切り換わります。
ONにするとMIDNIGHTインジケーターが点灯します。

✎ メモ

- この機能は音量が−２０ｄＢより小音量のときに効果があり、音量に合わせてサラウンド効果も自動調整されます。
- THX CINEMA、MULTI CH INモードでは使用できません。
- SACDダイレクトモードを[ON]に設定して、i.LINK経由でSACDを再生したときは使用できません。
- ラウドネス機能との併用はできません。
- i.LINK経由でDVDオーディオ(192、176kHz)、SACD 2chソースを再生しているときは、使用できません。

ラウドネス機能（小音量時の高低音域の補正）

ラウドネス機能はボリュームレベルに応じて、低音域、高音域のレベルを適正値に補正します。フロント音声に対して効果があります。低域、広域のレベルを自然に調整するため、2chでの音楽再生に適しています。

1 AMP　リモコンをアンプ操作モードにする。

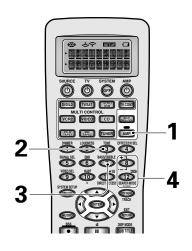
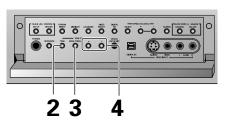
2 LOUDNESS 2　ラウドネス機能をONにする。

ボタンを押すたびに、ラウドネス機能がONまたはOFFに切り換わります。
ONにするとLOUDNESSインジケーターが点灯します。

メモ

- この機能は音量が－２０ｄＢより小音量のときに効果があり、音量に合わせて効果も自動調整されます。
- THX CINEMA、MULTI CH INモードでは使用できません。
- SACDダイレクトモードを[ON]に設定して、i.LINK経由でSACDを再生したときは使用できません。
- ミッドナイトリスニング機能との併用はできません。
- i.LINK経由でDVDオーディオ（192、176kHz）、SACD 2chソースを再生しているときは、使用できません。

トーンコントロール機能（好みに応じた高低音の調整）

トーンコントロール機能をONにすると、低音、高音がお好みによって調整できます。

1 AMP　リモコンをアンプ操作モードにする。

2 TONE 3　トーンコントロールモードをONにする。

ボタンを押すたびにトーンコントロールモードがONまたはBYPASS（トーンコントロールモードOFF）に切り換わります。
ONにするとTONEインジケーターが点灯します。

3 BASS/TREBLE 7　低音か高音を選ぶ。

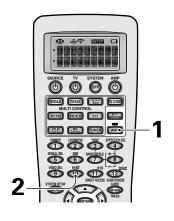
ボタンを押すたびに低音（BASS）と高音（TREBLE）が切り換わります。

4 ＋ 8 － 12　調整する。

メモ

- トーンは、－6～＋6dBの範囲で調整できます。
- THX CINEMA、MULTI CH INモードでは使用できません。
- SACDダイレクトモードを[ON]に設定して、i.LINK経由でSACDを再生したときは、使用できません。
- i.LINK経由でDVDオーディオ（192、176kHz）、SACD 2chソースを再生しているときは、使用できません。

オーディオスケーラー機能

CDやDVDなどの音声信号に対し、ダイナミックレンジの拡大、および周波数方向の広帯域化を行い高音質化します。

1 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

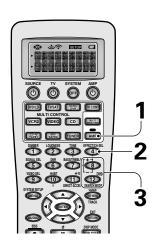
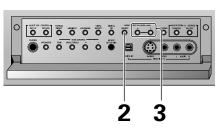
2 HI-BIT 10 **オーディオスケーラー機能をONにする。**

ボタンを押すたび、オーディオスケーラー機能がONまたはOFFに切り換わります。
ONにするとHi-BIT/SAMPLINGインジケーターが点灯します。

メモ

- MULTI CH INモードでは使用できません。
- リスニングモードでDIRECTを選択しているときにオーディオスケーラー機能をONにすると、リスニングモードが自動的にDIRECTからSTEREOに切り換わります。
- (i.LINKを含む)デジタル接続でDVDオーディオ、SACDと88.2kHz以上の入力信号を再生しているときは、使用できません。

サウンドディレイ機能

DVDソフトなど、本機を通して映像と音声を楽しんでいるとき、映像の動きとセリフなどの音声とが合っていない場合は、音声を遅らせることで、映像の動きと音声とを合わせることができます。

1 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 EFFECT/CH SEL 4 **サウンドディレイの設定にする。**

ディスプレイに「DELAY」が表示されるまで押してください。

3 **音声のディレイ時間を調整する。**

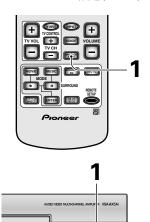
0.0〜6.0フレームの範囲で、0.1フレーム単位で調整することができます。最大0.2秒まで調整可能です。

メモ

- MULTI CH IN、DIRECTモードでは使用できません。
- SACDダイレクトモードを[ON]に設定して、i.LINK経由でSACDを再生したときは、使用できません。
- すべてのファンクションに適用されます。
- フレームとは映像の時間軸を表す単位の一つで、「1秒間=30フレーム」となります。

DVDオーディオ／SACD(マルチチャンネル入力)の再生

MULTI CH IN端子に接続した機器の各チャンネルの音声を、すべてアナログ処理のまま忠実に高SN比で再生します。映像は入力ファンクション選択で選ばれている機器の映像が映ります。接続については「5.1chアナログ接続」(⇨**P.22**)をご覧ください。i.LINK対応DVDプレーヤーをお持ちの場合は、i.LINK接続(⇨**P.22**)による再生もできます。

- スピーカーシステムの設定(⇨**P.45**)で[NO](無し)に設定されているチャンネルからは音が出ません。

1 MULTI CH INPUT **マルチチャンネル入力にする。**

ボタンを押すたび、ONとOFFが切り換わります。

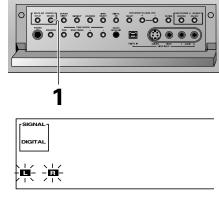
✎メモ

- マルチチャンネル入力信号にはリスニングモードの効果を加えることはできません。リスニングモードを切り換えるとMULTI CH INモードは「OFF」になります。
- 「アコースティックキャリブレーションEQ」(⇨**P.86**)や「便利な音声再生用機能」(⇨**P.87**)をONにすることはできません。
- 入力ファンクションごとにMULTI CH INモードを設定することができます。
- MULTI CH INモードは入力ファンクションごとにラストメモリーされます。
- MULTI CH INモードでは、Channel Level(⇨**P.47**)以外の設定は反映されません。

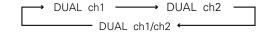
DUAL MONO(デュアルモノ)の再生と設定

モノラルの音声チャンネルを2つ持つデジタル信号のことを1＋1デュアルモノラル信号といいます。ここではデュアルモノラル信号が入力されたときにどちらの音声をどのスピーカーから出力するかを設定します。この設定は、例えば以下のようなMPEG-2 AACやドルビーデジタルの1+1デュアルモノラルフォーマットのソースにのみ有効です。

- BS デジタル放送のモノラルの二カ国語放送や音声多重放送など
  ステレオの二カ国語放送などはデュアルモノラルとは異なるフォーマットになります。
- 二カ国語放送などを DVD レコーダーのデュアルモノラルモードで録画したもの
  録画モードの名称は機器によって異なります。詳しくは DVD レコーダーの取扱説明書をご覧ください。

ch1　：チャンネル1の音声のみを再生する場合。
ch2　：チャンネル2の音声のみを再生する場合。
ch1/ch2　：チャンネル1／チャンネル2の音声をそれぞれ左／右のフロントスピーカーから分けて再生する場合。

デュアルモノ信号を検出すると[L] と[R] が数秒点滅します。その後ｃｈ１ 選択時は[L]、ｃｈ２ 選択時は[R]、ch1/ch2選択時は[L] [R]が点灯します。

1 RETURN **3秒以上押し続けてデュアルモノの設定を変更する。**

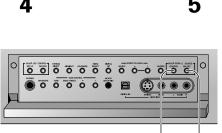
ボタンを押し続けることで以下のように切り換わります。

聞きたいチャンネルが表示されているときに指を離してください。

メモ

工場出荷時の設定はDUAL ch1に設定されています。

マルチルームの再生

本機を操作して、本機のある部屋（メインルーム）とは別の部屋（サブルーム）で本機につないだ機器の再生を楽しめます（マルチルーム機能）。メインルームとサブルームで同時に同じソースを再生することはもちろん、別々のソースを再生することもできます。

マルチルームの接続と設定については、「スピーカーの応用接続（マルチルーム）」（⇨**P.33**）と「Multi Room（マルチルームとIRレシーバーの設定）」（⇨**P.74**）をご覧ください。

1 再生する機器と本機の電源を入れる。

2 ON/OFF　マルチルーム機能をONにする。

ディスプレイに「MULTI-ROOM」インジケーターが点灯します。

3 CONTROL　サブルーム操作を選択する。

ディスプレイに「MULTIROOM」と表示されます。

4 MULTI JOGで再生する入力ソースを選ぶ。

MULTI JOGを回すと以下のように切り換わります。

→ DVD/LD → TV/SAT → VCR 1/DVR →
TUNER ← CD-R/TAPE 1 ← CD ←

5 MASTER VOLUMEで音量を調整する。

マルチルームの設定（⇨**P.74**）で、［VARIABLE］が選択されている場合に、音量調整ができます。

6 CONTROL 　サブルーム操作を終了する。

「MULTI-ROOM」インジケーターが消灯してサブルーム操作が終了し、メインルーム操作になります。

7 ON/OFF　マルチルーム機能をOFFにする。

操作／機能

メモ

- サブルーム操作は、ディスプレイに「MULTIROOM」が表示されているときに行えます。上記の手順3の操作から10秒間操作がないと、自動的にサブルーム操作モードを終了します。その場合はもう一度CONTROLボタンを押して「MULTIROOM」を表示させてください。
- マルチルーム機能は、システムセットアップ設定中にはオン／オフできません。
- 本機の電源は、マルチルーム機能を終了させないと、オフできません。
- 本機とサブルームの機器の音量は、それぞれ独立して調整できます。
- マルチルーム機能をしばらく使用しない場合は、必ず本機とサブルームの機器の電源をオフにしてください。

USBオーディオ再生（パソコンと組み合わせて使う）

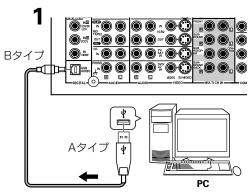
USB AUDIO端子とパソコンを接続することで、パソコンに記録されている音楽データを本機を通して再生することができます。USB接続できるパソコンのOSは「Windows® XP」、「Windows® 2000」、「Windows® Millennium Edition」、「Windows® 98 Secound Edition」、「Windows® 98」のいずれかです。これ以外の動作は保証しません。USBオーディオ再生するにはまず「ドライバーのインストール」を行います。ドライバーのインストールが完了したことを確認したあと、「USBオーディオ再生する」をご覧ください。

メモ

パソコンによっては上記のOSがインストールされていても、動作が保証できない場合があります。

MicrosoftおよびWindowsは米国 Microsoft corporation の米国およびその他の国における登録商標です。

ドライバーのインストール

本機のUSB AUDIO端子を使ってパソコンの音楽を再生するためには、ドライバーをインストールする必要があります。ドライバーはOSに標準添付されているものを使い、インストールの手順はパソコンの指示に従って行います。一度ドライバーをインストールすれば次回からインストールする必要はありません。OSによってはOSのCD-ROMが必要になる場合がありますので、お手元にご用意ください。

メモ

- USBハブおよびUSB延長ケーブル経由で接続した場合の動作は保証しません。
- USBドライバーのインストールをしているときは、USBケーブルを抜かないでください。

1 本機の「USB AUDIO」端子とパソコンUSB端子を接続する。

市販のUSBケーブルをご使用ください。

2 パソコンの電源を入れる。

パソコンのOSが起動したあと、本機のUSBポートを自動検出します。このとき本機の電源は主電源がOFFでもSTANDBY状態でも構いません。

3 OSの指示に従ってドライバーをインストールしていきます。

例えば、「Windows® XP」をお使いの場合は、特に指示はなくすべて自動でインストールが行われますが、その他のOSをお使いの場合は、インストールの途中でダイアログボックスが表示されますので、その指示に従って操作していきます。
ドライバーのインストールには数分かかります。
お使いのOSによっては、OSのCD-ROMが必要な場合があります。その場合は指示に従ってCD-ROMを入れてください。

ドライバーのインストールの確認

ドライバーのインストールが完了したあと、ドライバーが認識されているかどうかを確認します。

✎メモ
下記のパソコン操作については、一般的な操作方法を示しています。OSや設定によって操作や用語が異なる場合がありますので、ご了承ください。

4–6 画面はWindows XPのものです。

1 **「スタート」メニューから「設定」→「コントロールパネル」を選びクリックする。**
コントロールパネルの画面が表示されます。

2 **「システム」のアイコンをダブルクリックする。**

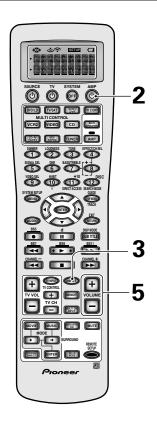
3 **「ハードウェア」のタブをクリックして、「デバイスマネージャ」を選びクリックする。**
「種類別に表示」が選択されていることを確認します。

4 **「サウンド、ビデオ、およびゲームのコントローラ」の項目の中に「USBオーディオデバイス」が認識されていることを確認します。**

5 **「ヒューマンインターフェイスデバイス」の項目の中に「HID 準拠コンシューマ制御デバイス」および「ＵＳＢヒューマンインターフェイスデバイス」が認識されていることを確認します。**

6 **「USB (Universal Serial Bus)コントローラ」の項目の中に「ＵＳＢ複合デバイス」が認識されていることを確認します。**

✎メモ
上記のデバイスが認識されていない場合は、ＵＳＢケーブルを抜き差しして再度、デバイスドライバーがインストールされるか試してみてください。それでも認識されない場合は、パソコンを再起動してみてください。

USBオーディオを再生する

1 **パソコンの電源を入れる。**

正常に起動するまでお待ちください。

2 AMP **本機の電源を入れる。**

3 INPUT **入力をUSBにする。**

ボタンを押すたびに(本体の場合は、MULTI JOGを右に回すと)入力が順次切り換わります。
入力信号設定はDIGITALに固定されます。

4 **パソコン側で再生操作をする。**

本機に接続しているスピーカーからパソコンで再生している音楽の音が出ます。

5 **本機で音量を調節する。**

パソコンでの音量調節も必要です。

メモ

- パソコンから本機をコントロールしたり、本機からパソコンをコントロールすることはできません。
- USBオーディオ再生しているときは、本機の電源を切ったり、入力を切り換えたりしないでください。パソコンの誤動作の原因になることがあります。
- USBオーディオ再生中は、USBケーブルを抜かないでください。ＵＳＢケーブルを抜くときはパソコンで再生中の音楽ソフトを閉じてから抜いてください。
- パソコンのビープ音はＵＳＢオーディオ再生していると本機のスピーカーからも出力されます。ビープ音を出したくないときはパソコン側で設定を行ってください。
- パソコンの使用環境によっては、音が途切れたり、ノイズが発生することがあります。
- USBオーディオ再生は2chステレオ再生のみのサポートです。マルチチャンネルサラウンド再生を行うことはできません。
- 本機リアパネルのUSB AUDIO端子に入力された音声信号はDIGITAL OUT1、2からは出力されません。
- 再生中は他のアプリケーションを使用しないでください。ノイズが入ることがあります。
- 本機のUSB部分は、USBバスパワード動作しています。よって、本機の電源がＯＦＦ状態でも、パソコンの電源がＯＮの場合、パソコンは、本機を認識しています。
  本機以外の音源を使用したい場合は、必要に応じてパソコンの音源の設定を変更してください。
- 本機からＵＳＢ経由でパソコンへ音を転送することはできません。

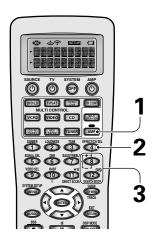
ヘッドホンを使う

1 ヘッドホンのプラグをPHONES端子に差し込む。

メモ

- ヘッドホンを差し込むとスピーカーから音は出なくなります。ただし、MULTI CH INモードのときはサブウーファーからのみ音が出ます。
- 各リスニングモードの効果は2chにダウンミックスされますが、2chソースに対してマトリクスデコードによるサラウンド処理は行いません。
- MULTI CH INモードのときは、MULTI CH IN端子のFRONT L、Rの音声をヘッドホンから出力します。
- ヘッドホンを差し込んでいるときはSYSTEM SETUPを行うことはできません。

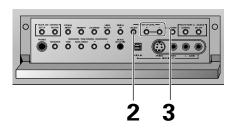
SACD ゲイン機能

工場出荷時（「0dB」）は、高レベルで記録されているSACDディスクを再生しても音が歪まない設定になっています。「+6dB」に切り換えてデジタル処理に+6dBのゲインを持たせることにより、SACDディスクの情報をより忠実に引き出すことができるようになり、高音質再生が可能になります。

1 リモコンをアンプ操作モードにする。

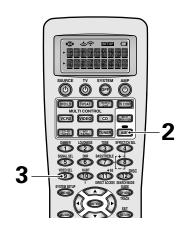
2 EFFECT/CH SEL 4 SACD GAINがディスプレイに表示されるまで押します。

3 SACDゲインの設定を調整する。

ボタンを押すたび、0dBと+6dBが切り換わります。

メモ

- ほとんどのSACDディスクは「+6dB」の設定で問題ありませんが、再生音声が歪むようなときは設定を「0dB」にしてください。

ビデオセレクト機能（別のファンクションの映像を見る）

ビデオセレクト機能は、お好みの音楽ソースを聞きながら別の機器のビデオ映像などを同時に見ることができる機能です。

1 音楽ソースを再生する。

（「基本再生」⇨**P.75**）

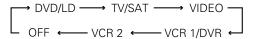
2 AMP

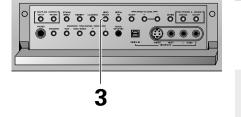
リモコンをアンプ操作モードにする。

リモコンがアンプ操作モードに切り換わります。

3 VIDEO SEL 9

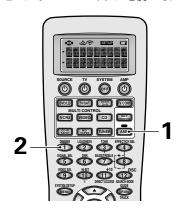
映像のみを再生したいビデオ入力を選択する。

ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。

4 手順3で選択したビデオ入力機器を再生する。

（「基本再生」⇨**P.75**）

メモ

ビデオセレクト機能は、本機の電源を切ったり、入力ファンクションを切り換える（または他機器操作ボタンを押す）とキャンセルされます。

ディスプレイの明るさを調整する

リモコンのDIMMERボタンを使って、本体のディスプレイの明るさを調整できます。

1 AMP

リモコンをアンプ操作モードにする。

リモコンがアンプ操作モードに切り換わります。

2 DIMMER 1

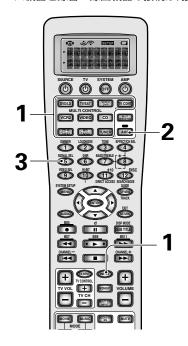
好みの明るさに調整する。

ボタンを押すたびにディスプレイの明るさを4段階に調整できます。

メモ

- 調整値にかかわらず、操作時は一時的に明るく表示します。
- 明るさを一番暗い設定にしたときは、i.LINKインジケーターとMCACCインジケーターも消灯します。

本機を使った録音/録画

オーディオ機器からの音声やビデオ機器からの映像、音声を本機を使って録音／録画する方法について説明します。ソース機器と録音・録画機器の接続は「接続」（⇨**P.26~28**）をご覧ください。

1 INPUT **録音または録画したいソースを選ぶ。**

ボタンを押すたびに（本体の場合は、MULTI JOGを回すと）入力が順次に切り換わります。

2 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

3 SIGNAL SEL 5 **入力信号を選択する。**

デジタル録音するときは、DIGITALを選択します。詳しくは「ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」（⇨**P.76**）をご覧ください。

4 **録音機器の録音またはビデオデッキ（DVDレコーダー）の録画を開始する。**

5 **録音または録画するソースを再生する。**

メモ

- **音声はアナログーデジタル変換していませんので、接続する信号の種類を合わせてください。**
- **映像はコンポジットまたはSビデオで接続し、ソース機器と録画機器のコードの種類を合わせてください。**
- オートセットアップ（⇨**P.10, 40**）を行っているときには録音・録画を行わないでください。
- 各録音信号に、本機の音量、チャンネルレベル、「便利な音声再生用機能」（⇨**P.87**）、リスニングモードの設定は、反映されません。ただし、PHONO入力を録音するときは「便利な音声再生用機能」、リスニングモードの設定は反映されます。しかし、この場合操作するたび音がとぎれることがありますのでDIRECTモードにして録音することをお勧めします。
- デジタル出力については、再生はできても信号の種類やコピーガード、録音機器の仕様などにより録音できないものがあります。この場合はアナログ接続で録音してください（⇨**P.27**）。
- MULTI CH INPUTに入力された音声は、録音することができません。
- DVDなどのビデオソフトの中にはコピーガードが設定されていて録画できないものがあります。

他機器を操作するためのリモコン設定

付属のリモコンを使って、本機以外のパイオニア製品(DVDプレーヤーなど)や他社の機器(ビデオデッキ、テレビなど)を操作することができます。お手持ちの機器のプリセットコードがリモコンに登録されている場合は、該当するコードを呼び出して簡単に本機のリモコンで操作できるようになります(Preset Recall)。プリセットコードが登録されていない場合、または本機のリモコンで操作できる機能を追加したい場合は、その操作のリモコンコードを直接登録(学習)することができます(Learning)。

✎メモ

- ケーブルTVチューナーとモニターTVなどを登録したいときは、モニターTVをTV CONT、ケーブルTVチューナー(ソース機器)をTV/SATに登録すると便利です。
- リモコンが他機器の操作モードになっていても、TV CONTに登録された機器はTV CONTROLボタンでいつでも操作することができます。
- 設定途中で1分間放置するとリモコンのディスプレイは自動的に消えますが、いずれかのボタンを押すとその続きから設定が再開されます。

TV CONTROLボタン

リモコン設定操作ガイド

各種リモコン設定中(⇨**P.98〜112**)、リモコンディスプレイの左上部に左記のマークが表示されたときはそのボタンを使用して設定作業を行うことを意味しています。

Preset Recallセットアップモード(プリセットコードの呼び出し)

ここでは、本機のリモコンの他機器操作ボタンに、操作したい他機器のプリセットコードを登録します。

✎メモ

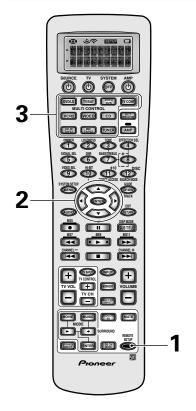
- リモートセットアップモードを解除したいときは、REMOTE SETUPボタンを押してください。
- リモートセットアップモードを解除しないと、リモコンで本機や他機器を操作することができません。

1

3秒間
押し続ける

リモートセットアップモードにする。

リモコンのディスプレイに「SETUP」インジケーターとRemote Setupメニューが表示されます。

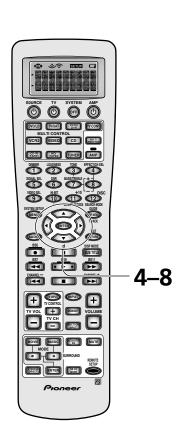
2

「Preset」を選んで決定する。

リモコンのディスプレイに「Select Function」が点滅します。

3

プリセットコードの登録をしたい他機器操作ボタンを選択する。

<ITEM>が表示されます。操作する機器と他機器操作ボタンとの名称を一致させておくことをお勧めしますが、異なる名称の機器を登録することも可能です(TVボタンにLDプレーヤーのプリセットコードを登録するなど)。異なる名称の端子(入力ファンクション)に機器を接続しているときは、その端子に対応する他機器操作ボタンを選択してください。

4

登録したい機器の種類を選んで決定する。

リモコンのディスプレイにメーカー名が表示されます。

5

登録したい機器のメーカーを選ぶ(「プリセットコードメーカー一覧」⇨**P.116**)。

同じメーカー内にプリセットコードが複数ある場合は、−1、−2と続いて表示されます。

6

選択した機器にリモコンを向けてＥＮＴＥＲボタンを押す。

リモコンからその機器の電源ＯＮ／ＯＦＦ信号が送られたあとに、リモコンのディスプレイに<OK？>が表示されます。

機器の電源がON/OFFした場合

その機器のプリセットコードが呼び出されました。「ＹＥＳ」を選んで、手順7へお進みください。

機器の電源がON/OFFされなかった場合

呼び出されたプリセットコードがその機器のリモコンコードと一致していない可能性があります。同一メーカーで機器のプリセットコードが複数ある場合は「ＮＯ」を選んで決定したあとに、別の番号を使って手順5からやり直してください。

メモ

- ENTERボタンは選択した機器に向けて押さないと、機器の電源はON/OFFしません。
- 選択した機器にSTANDBY/ONモードがない場合は、正しく設定できていても電源はON/OFFしません。この場合はそのまま手順7へ進み、そのあとに実際に操作できるかどうか試してみてください。
- 表示されているすべての番号を押しても電源がON/OFFまたは操作できない場合は「Learningセットアップモード」(⇨**P.100**)で登録してください。

7

プリセットコードの登録を決定する。

「COMPLETE」と表示され、Remote Setupメニューの表示画面に戻ります。
手順2～6を繰り返し、その他の機器も設定します。

8

「Exit」を選んで決定する。

リモートセットアップモードが終了して、リモコンが通常の状態になります。

Learningセットアップモード(他機器のリモコンコードを登録する)

本機のリモコンで操作したい他機器のプリセットコードが登録できない場合は、以下の手順で他機器のリモコンコードを本機のリモコンに登録(学習)することができます。プリセットコードを設定しただけでは使用できない操作についても、以下の手順で本機のリモコンに追加登録(学習)することができます。

✎メモ

- リモートセットアップモードを解除したいときは、REMOTE SETUPボタンを押してください。
- リモートセットアップモードを解除しないと、リモコンで本機や他機器を操作することができません。

1

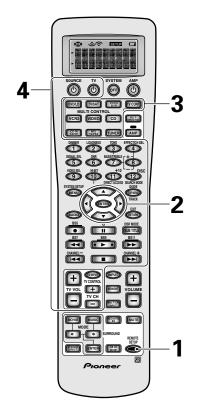
REMOTE SETUP

3秒間
押し続ける

リモートセットアップモードにする。

リモコンのディスプレイに「SETUP」インジケーターとRemote Setupメニューが表示されます。

2

ENTER

「Learning」を選んで決定する。

リモコンのディスプレイに「Select Function」が点滅します。

3

リモコンコードの登録をしたい他機器操作ボタンを選択する。

操作する機器と他機器操作ボタンとの名称を一致させておくことをお勧めしますが、異なる名称の機器を登録することも可能です(TVボタンにLDプレーヤーのボタンを登録するなど)。異なる名称の端子(入力ファンクション)に機器を接続しているときは、その端子に対応する他機器操作ボタンを選択してください。

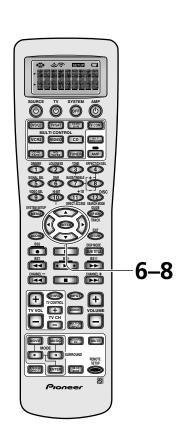
4

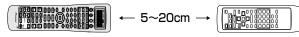
SOURCE　TV

TV CONTROL
ボタン

登録したい操作ボタンを選択する。

選択された他機器操作ボタンと選択された操作ボタンを表示後、「LEARN」が点滅表示されます。
左のボタンに登録できます。

手順3でTV CONTを選択した場合のみTV CONTROLボタンにも登録することができます。

5 「LEARN」が点滅している間に他機器のリモコンを下図のように本機のリモコンに向け、他機器リモコンの登録したい操作ボタンを押す。

① 本機と他機器のリモコンを互いに下図のように向けます。

② 登録したい他機器リモコンの操作ボタンを押します。「ＯＫ」が表示されたあと、<Continue?>が表示されます。

・「Select Key」が点滅している場合は手順4からやり直してください。

6 登録を続ける場合は、以下の手順を行います。

同じ他機器操作ボタンに別のリモコンコードを追加登録するには

「Yes」を選んで決定したあとに、手順4～5を繰り返します。

別の他機器操作ボタンにリモコンコードを登録するには

「No」選んで決定したあとに、手順2～6を繰り返します。

7

「Exit」を選んで決定する。

Remote Setupメニューの表示画面に戻ります。

8

「Exit」を選んで決定する。

リモートセットアップモードが終了して、リモコンが通常の状態になります。

メモ

- 手順5で「NG」と表示されたり、登録後に実際に操作できない場合は下記の方法を試してみてください。（リモコンコードによっては正しく登録できないものもあります）

  手順5でリモコン同士の距離を変えてみる

  リモコンコードが正しく認識される場合があります。
- 手順5で「FULL」と表示されたときは、メモリに十分な空き容量が無いことを示しているので以下の方法を試してみてください。

  別のボタンの設定をクリアしてから登録し直してください。

  「リモコンの設定クリア」（⇨**P.111**）

他機器のリモコン操作

- 以下のリモコン操作を行うには、あらかじめ操作したい機器のリモコンコードを登録しておく必要があります。詳しくは「他機器を操作するためのリモコン設定」(⇨**P.98**)をご覧ください。
- **実際に操作を始める前に操作したい機器の他機器操作ボタンを押して、リモコンをその機器の操作モードにしてください。各機器の詳しい機能については、それぞれの取扱説明書をお読みください。**
- 機種によっては操作できないボタンもあります。

ボタン	DVD DVDレコーダー LD	テレビ	BSデジタルチューナー内蔵テレビ BSデジタルチューナー	CATV	VTR (ビデオデッキなど)	CD/CD-R/MD/TAPE	TUNER
⏻	電源のON/OFF	電源のON/OFF	電源のON/OFF	電源のON/OFF	電源のON/OFF	電源のON/OFF	電源のON/OFF
▶	再生	BS9	緑		再生	再生	BAND
■	停止				停止	停止	CLASS
❚❚	一時停止		d(データ連動)		一時停止	一時停止	RF ATT
▶▶	早送り	BS11	黄	ページを1つ上げる	早送り	早送り	TUNING+
◀◀	早戻し	BS7	赤	ページを1つ下げる	早戻し	早戻し	TUNING−
▶▶❙	次のチャプター(トラック)の頭出し	チャンネルを1つ上げる	チャンネルを1つ上げる	チャンネルを1つ上げる	チャンネルを1つ上げる	トラックの頭出し	STATION+
❙◀◀	前のチャプター(トラック)の頭出し	チャンネルを1つ下げる	チャンネルを1つ下げる	チャンネルを1つ下げる	チャンネルを1つ下げる	トラックの頭出し	STATION−
●(2度押し)	[DVDレコーダー]録画	BS5	青		録画	[CD-R/MD/TAPE]録音	MPX
RETURN/EXIT	[DVD/DVDレコーダー]設定画面などで1つ前に戻る	戻る	設定画面などで1つ前に戻る	Exit			
TOP MENU/GUIDE	[DVD/DVDレコーダー]トップメニュー画面を表示		番組表を表示	番組表を表示			
MENU	[DVD/DVDレコーダー]各種メニュー画面を表示	各種メニュー画面を表示	BSメニュー/番組ナビを表示	各種メニュー画面を表示			
AUDIO	音声の選択	音声の選択	音声の選択		TVチューナーとビデオチューナーの切り換え	[TAPE]リバース面への切り換え	
SUB TITLE/DISP MODE	字幕の選択	表示コール	表示コール			ディスプレイ表示の変更	DISP MODE
◀▶▲▼	各種メニュー画面を操作	各種メニュー画面を操作	各種メニュー画面を操作	各種メニュー画面を操作		ダブルテープデッキの操作	▲▼(TUNE+/−) ◀▶(STATION+/−)
ENTER	操作を決定	操作を決定	操作を決定	操作を決定			
数字ボタン(1〜9)	チャプター(トラック)のダイレクト選択	チャンネルのダイレクト選択	[BSチューナー内蔵TV]BSデジタルチャンネルのダイレクト選択 [BSデジタルチューナー]チャンネルのダイレクト選択	チャンネルのダイレクト選択	チャンネルのダイレクト選択	トラックのダイレクト選択	放送局のダイレクト選択
数字ボタン10	チャプター(トラック)のダイレクト選択 0	チャンネルのダイレクト選択 10	[BSチューナー内蔵TV]BSデジタルチャンネルのダイレクト選択 0 [BSデジタルチューナー]チャンネルのダイレクト選択 0	チャンネルのダイレクト選択 0	チャンネルのダイレクト選択 10	トラックのダイレクト選択 10	放送局のダイレクト選択 0
数字ボタン(11)	*チャプター(トラック)のダイレクト選択+10	チャンネルのダイレクト選択 11 または+10	*チャンネルのダイレクト選択 •		チャンネルのダイレクト選択 11 または+10	[CD/CD-R/MD]トラックのダイレクト選択 >10	DIRECT ACCESS
数字ボタン(12)	[DVD]Search Mode[DVDレコーダー]ディスクナビゲーター画面を表示[LD]A面とB面の切り替え	チャンネルのダイレクト選択 12	#	選択したチャンネルの決定	チャンネルのダイレクト選択 12	[CD/CD-R]DISC	

* DVDプレーヤーによっては10以上を選ぶとき+10方式ではなく、ENTER方式で番号を決める機種がありますが、その機種も本機リモコンでは+10ボタンで操作することができます。

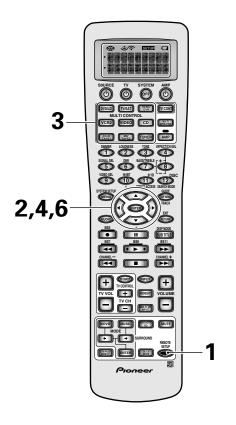
Direct Functionモードを設定する

ダイレクトファンクションはMULTI CONTROLボタンを押したときに、本機の入力ファンクションを連動して切り換えるかを設定する機能です。OFFにすると入力ファンクションは切り換わらず、リモコンの操作ボタンの機能だけが切り換わります。例えば、映画を見ているときにテレビの録画をしたいときなど、入力ファンクションは映画のままで、本機のリモコンでビデオデッキなどの録画操作をすることができます。工場出荷時はすべてONになっています。

メモ

- リモートセットアップモードを解除したいときは、REMOTE SETUPボタンを押してください。
- リモートセットアップモードを解除しないと、リモコンで本機や他機器を操作することができません。

1 REMOTE SETUP

3秒間
押し続ける

リモートセットアップモードにする。

リモコンのディスプレイに「SETUP」インジケーターとRemote Setupメニューが表示されます。

2 ENTER

「DirctFnc」を選んで決定する。

リモコンのディスプレイに「Select Function」が点滅します。

3 DVD/LD TV/SAT VCR1/DVR MULTI CONTROL VCR2 VIDEO CD CD-R/TAPE1 MD/TAPE2 TUNER

設定したい他機器を選択する。

<Direct Func>が表示されます。

4 ENTER

「On」か「Off」か「＊Exit＊」を選んで決定する。

「On」：ダイレクトファンクションをONに設定します。

「Off」：ダイレクトファンクションをOFFに設定します。

「Exit」：ダイレクトファンクションの設定を終了します。

Remote Setupメニューの表示画面に戻ります。

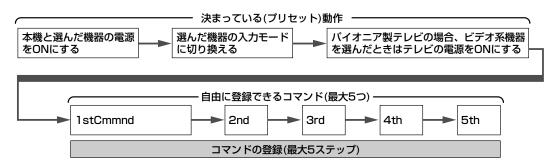
5 **続けてその他の機器の設定を行う場合は、手順2 ～4 を繰り返す。**

6

「＊Exit＊」を選んで決定する。

リモートセットアップモードが終了して、リモコンが通常の状態になります。

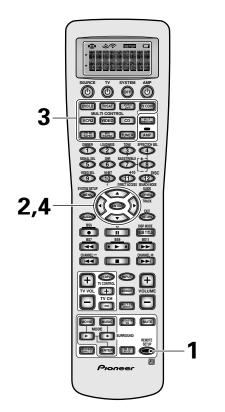
マルチオペレーション

マルチオペレーションとは、2つのボタン（MULTI OPERATIONと他機器操作ボタン）を押すだけで、あらかじめ決められている（プリセット）動作と、複数の操作（コマンド）を一度に実行する便利な機能です。各他機器操作ボタンに登録することができます。リモコンからは次のようにコマンドが送信されます。

- 登録する他機器操作ボタンでTV CONTROLを選んだときの「決まっている（プリセット）動作」は「テレビの電源をONにする」のみとなります。
- 「決まっている（プリセット）動作」ではパイオニア以外の機器の電源はONしません。

マルチオペレーションをプログラムする

マルチオペレーション機能で実行したい一連の操作をプログラムする方法について説明します。
以下の手順を始める前に、操作したい機器のプリセットコードまたはリモコンコードを本機のリモコンに登録しておく必要があります。詳しくは、「他機器を操作するためのリモコン設定」をご覧ください。（⇨**P.98**）

メモ

- リモートセットアップモードを解除したいときは、REMOTE SETUPボタンを押してください。
- リモートセットアップモードを解除しないと、リモコンで本機や他機器を操作することができません。

ここではDVD/LDボタンに「DVDを再生する」という操作をプログラムする手順を例にとって説明します。

1 REMOTE SETUP
3秒間
押し続ける

リモートセットアップモードにする。
リモコンのディスプレイに「SETUP」インジケーターとRemote Setupメニューが表示されます。

2 ENTER

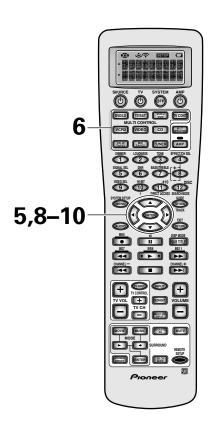
「MultiOpe」を選んで決定する。
リモコンのディスプレイに「Select Function」が点滅します。

3 DVD/LD TV/SAT VCR1/DVR TV CONT MULTI CONTROL VCR2 VIDEO CD CD-R/TAPE1 MD/TAPE2 TUNER

マルチオペレーションをプログラムしたい他機器操作ボタンを選択する。
<MultiOpe>が表示されます。
例）DVD/LDボタンを選択します。

4

「1stCmmnd」を選んで決定する。
現在の設定内容（工場出荷時は「Blank」）が表示されたあと、「<1st>Change」が表示されます。

5

「Change」か「Clear」か「＊Exit＊」を選んで決定する。

「Change」：「Function」が点滅して1つめのコマンドの登録（変更）になります。手順6へお進みください。

「Clear」：現在登録されているコマンドを消去します。手順8へお進みください。

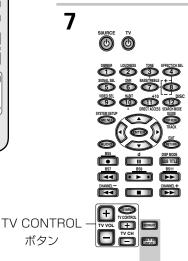
「Exit」：手順4へ戻ります。

6

操作したい機器を選択する。

「Key」が点滅します。

例）ＤＶＤ／ＬＤボタンを選択します。

7

実行したい操作ボタンを選択する。

例）►再生ボタンを選択します。

「Complete」と表示されたあと、コマンド番号選択画面に戻ります。（手順8へお進みください。）

左のボタンを選択できます。

手順6でTV CONTを選択した場合のみTV CONTROLボタンにも登録することができます。

EXTRA MENU内のコマンドを選択したいときはEXTRA MENUボタンを押したあと、▲▼ボタンでコマンドを選択し、ENTERボタンで決定します。

8

2つめのコマンドを登録したいときは「2ndCmmnd」を選んで決定したあとに、手順5～7を繰り返す。

1つの他機器操作ボタンに対して最大5つまで登録することができます。

3つめのコマンドは「3rdCmmnd」を選び、4つめのコマンドは「4thCmmnd」を選び、5つめのコマンドは「5thCmmnd」を選びます。

9

「＊Exit＊」を選んで決定する。

Remote Setupメニューの表示画面に戻ります。

別の他機器操作ボタンにも登録するときは、手順2～9を繰り返してください。

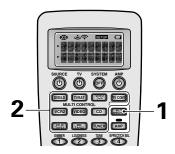
10

「Exit」を選んで決定する。

リモートセットアップモードが終了して、リモコンが通常の状態になります。

マルチオペレーションを実行する

「マルチオペレーションをプログラムする」（⇨ **P.104**）で登録した一連の操作（プリセット動作を含む）を実行する方法について説明します。

1 MULTI OPERATION

マルチオペレーションモードにする。

リモコンのディスプレイに「Select Function」が点滅します。

2 DVD/LD TV/SAT VCR1/DVR TV CONT MULTI CONTROL VCR2 VIDEO CD CD-R/TAPE1 MD/TAPE2 TUNER

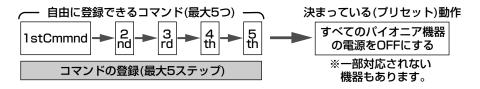
操作したい他機器を選択する。

プリセット動作と、このボタンに登録されているコマンドが実行されます。

メモ

登録した機器の状態によっては、登録した動作と異なる場合があります。

システムオフ

システムオフ（SYSTEM OFF）とは、5つまで自由に登録できる操作（コマンド）と、本機を含めたすべてのパイオニアの機器の電源OFFを、ワンタッチで実行する便利な機能です。リモコンからは次のようなコマンドが送信されます。

システムオフをプログラムする

システムオフ機能で実行したい一連の操作をプログラムする方法について説明します。
以下の手順を始める前に、操作したい機器のプリセットコードまたはリモコンコードを本機のリモコンに登録しておく必要があります。詳しくは「他機器を操作するためのリモコン設定」をご覧ください。（⇨**P.98**）

メモ

- リモートセットアップモードを解除したいときは、REMOTE SETUPボタンを押してください。
- リモートセットアップモードを解除しないと、リモコンで本機や他機器を操作することができません。

2–3
1

ここでは「ＤＶＤの再生を停止する」という操作をプログラムする手順を例にとって説明します。

1 REMOTE SETUP 3秒間押し続ける

リモートセットアップモードにする。

リモコンのディスプレイに「SETUP」インジケーターとRemote Setupメニューが表示されます。

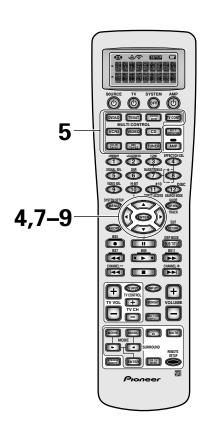
2 ENTER

「SysOff」を選んで決定する。

リモコンのディスプレイに<System Off>が表示されます。

3

「1stCmmnd」を選んで決定する。

現在の設定内容（工場出荷時は「Blank」）が表示されたあと、「<1st>Change」が表示されます。

4 「Change」か「Clear」か「＊Exit＊」を選んで決定する。

「Change」：「Function」が点滅して1つめのコマンドの登録（変更）になります。手順5へお進みください。
「Clear」：現在登録されているコマンドを消去します。手順7へお進みください。
「Exit」：手順3へ戻ります。

5 操作したい他機器を選択する。

「Key」が点滅します。
例）ＤＶＤ／ＬＤボタンを選択します。

6 実行したい操作ボタンを選択する。

例）■停止ボタンを選択します。
「Complete」と表示されたあと、コマンド番号選択画面に戻ります。（手順7へお進みください。）
左のボタンを選択できます。

手順5でTV CONTを選択した場合のみTV CONTROLボタンにも登録することができます。

TV CONTROL ボタン

手順5で「AMPボタン」を選択したときのみ

7 2つめのコマンドを登録したいときは「2ndCmmnd」を選んで決定したあとに、手順4〜6を繰り返します。

最大5つまで登録することができます。
3つめのコマンドは「3rdCmmnd」を選び、4つめのコマンドは「4thCmmnd」を選び、5つめのコマンドは「5thCmmnd」を選びます。

8 「＊Exit＊」を選んで決定する。

Remote Setupメニューの表示画面に戻ります。

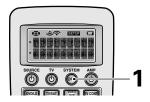
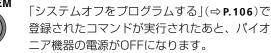
9 「Exit」を選んで決定する。

リモートセットアップモードが終了して、リモコンが通常の状態になります。

システムオフを実行する

1 SYSTEM OFF

システムオフを実行する。

「システムオフをプログラムする」(⇨ P.106)で登録されたコマンドが実行されたあと、パイオニア機器の電源がOFFになります。

ファンクションネーム

リモコンディスプレイに表示される入力ファンクション名を変更することができます。例えばDVD/LDの入力端子にDVRを接続したとき、リモコンディスプレイ表示はDVD/LDですが再生しているのはDVRということになります。このようなときに、ディスプレイ表示をDVD/LDからDVRに変更できる便利な機能です。各入力ファンクション(他機器操作ボタン)ごとに接続された機器やメーカー名などを入力すれば、どこの入力ファンクション(他機器操作ボタン)にどんな機器が接続されているのかを簡単に確認することができます。

✎メモ

- リモートセットアップモードを解除したいときは、REMOTE SETUPボタンを押してください。
- リモートセットアップモードを解除しないと、リモコンで本機や他機器を操作することができません。

✎メモ

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ

abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

0123456789(スペース)

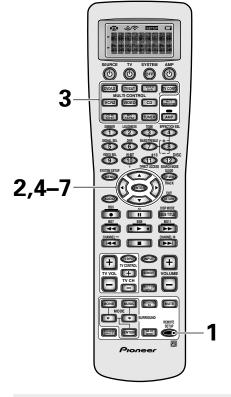
!”#$%&’()*+,–./:;<=>?@[\ ]^_`{I}~

►◄■●⏻▮▮I↑↓→← ・(スペース)

1 REMOTE SETUP 3秒間押し続ける

リモートセットアップモードにする。

リモコンのディスプレイに「SETUP」インジケーターとRemote Setupメニューが表示されます。

2 ENTER

「FuncName」を選んで決定する。

リモコンのディスプレイに「Select Function」が点滅します。

3

名前を変更したい入力ファンクション(他機器操作ボタン)を選択する。

リモコンディスプレイが入力ファンクション名の変更画面になります。

4

▲/▼ボタンで入力する文字を選んで、◄/►ボタンでカーソルを左右に動かす。

入力できる文字は左記のメモのとおりです。
最大8文字まで入力することができます。

5

入力を終了する。

「END」が点滅します。

6

もう一度ENTERボタンを押し、入力した名前を確認する。

「Complete」と表示されRemote Setupメニューの表示画面に戻ります。別の入力ファンクション名も変更するときは手順2〜6を繰り返してください。

7

「Exit」を選んで決定する。

リモートセットアップモードが終了して、リモコンが通常の状態になります。

キーラベル

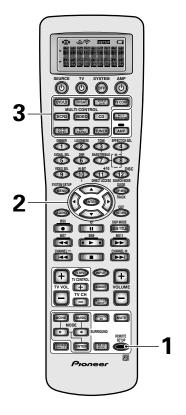
キーラベルとは各ボタンを押したときに、リモコンディスプレイに表示される文字やマークを1文字～8文字の範囲内でお好みのラベル(ボタンマーク)に付け換えられる機能です。例えば、あるボタンにプリセットと異なるコマンドを学習させた場合(⇨**P.100**)、そのボタンのラベル(ボタンマーク)を付け換えたり変更することにより、そのコマンドがどこのボタンに学習されたのかを簡単に確認することができます。

メモ

- リモートセットアップモードを解除したいときは、REMOTE SETUPボタンを押してください。
- リモートセットアップモードを解除しないと、リモコンで本機や他機器を操作することができません。

1

REMOTE SETUP

3秒間
押し続ける

リモートセットアップモードにする。

リモコンのディスプレイに「SETUP」インジケーターとRemote Setupメニューが表示されます。

2

「KeyLabel」を選んで決定する。

リモコンのディスプレイに「Select Function」が点滅します。

3

ラベルを変更したいボタンのある他機器操作ボタンを選択する。

「Select Key」が点滅します。

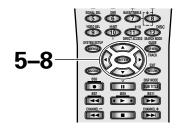
4

TV CONTROL
ボタン

ラベルを変更したい操作ボタンを押す。

リモコンディスプレイが名前変更の画面になります。

左のボタンを選択できます。

手順3でTV CONTを選択した場合のみTV CONTROLボタンにも登録することができます。

リモコンの便利な機能

メモ

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ

abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

0123456789(スペース)

!"#$%&'()*+,–./:;<=>?@[\ ]^_`{|}~

►◄■●⏻ ııı↑↓→← ・(スペース)

5 **入力する文字や記号を▲ ▼ボタンで選び、◄ ►ボタンでカーソルを左右に動かす。**

入力できる文字は左記のメモのとおりです。
最大8文字まで入力することができます。

6 **入力を終了する。**

「END」が点滅します。

7 **もう一度ENTERボタンを押し、入力した名前を確定する。**

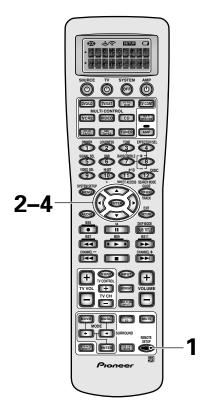
「Complete」と表示されRemote Setupメニューの表示画面に戻ります。別のボタンのラベルも変更するときは手順2～7を繰り返してください。

8

「Exit」を選んで決定する。

リモートセットアップモードが終了して、リモコンが通常の状態になります。

リモコンの明るさ調整（リモコンライト）

リモコンライトの明るさを3段階で調整することができます。

1 REMOTE SETUP 3秒間押し続ける

リモートセットアップモードにする。

リモコンのディスプレイに「SETUP」インジケーターとRemote Setupメニューが表示されます。

2 **「Light」を選んで決定する。**

リモコンのディスプレイに「<LIGHT>High」が表示されます。

3 **「High」、「Low」、「OFF」または「＊Exit＊」を選んで決定する。**

「High」：リモコンライトをより明るくします。
「Low」：リモコンライトを通常の明るさにします。
「Off」：ボタンを押したときのバックライトも含めリモコンライトは一切光りません。
「Exit」：リモコンの明るさ調整を終了します。
Remote Setupメニューの表示画面に戻ります。

4 **「Exit」を選んで決定する。**

リモートセットアップモードが終了して、リモコンが通常の状態になります。

メモ

- 工場出荷時の設定は「Low」です。
- 調整は部屋を暗くした状態で行ってください。
- 設定状況により、リモコンの電池寿命が異なります。

リモコンの設定クリア

本機のリモコンのプリセット、マルチオペレーション設定などをクリアする方法について説明します。

✎メモ

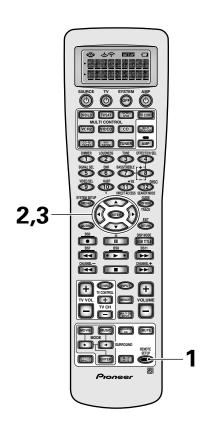
- リモートセットアップモードを解除したいときは、REMOTE SETUPボタンを押してください。
- リモートセットアップモードを解除しないと、リモコンで本機や他機器を操作することができません。

1 REMOTE SETUP

3秒間
押し続ける

リモートセットアップモードにする。

リモコンのディスプレイに「SETUP」インジケーターとRemote Setupメニューが表示されます。

2

「Clear」を選んで決定する。

リモコンのディスプレイに<CLEAR>が表示されます。

3

リモコンの設定を解除したい項目を選ぶ

「Learning Clear」：「Learningセットアップモード」(⇨**P.100**)で登録したリモコンコードの設定をクリアします(ボタン1つ)。
「KeyLabel Clear」：「キーラベル」(⇨**P.109**)によって変更されたラベル(ボタンマーク)をクリアします(ボタン1つ)。
「All Clear」：**P.98**～**110**で行ったリモコンに関するすべての設定をクリアし、工場出荷時のメモリ内容に戻します。

「Learning Clear」を選んで決定する。

「Select Function」が点滅します。
次ページの手順4へお進みください。

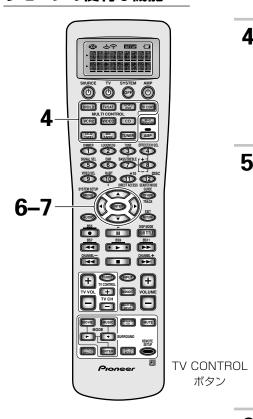
「KeyLabel Clear」を選んで決定する。

「Select Function」が点滅します。
次ページの手順4へお進みください。

「All Clear」を選んで決定する。

「<CLEAR?>YES」が表示されます。
次ページの手順6へお進みください。

「＊Exit＊」を選んで決定する。

リモコンの設定クリアを終了します。
Remote Setupメニューの表示画面に戻ります。

4

設定をクリアしたいボタンのある他機器操作ボタンを選択する。

「Select Key」が点滅します。

5

設定をクリアしたい操作ボタンを押す。

「CLEAR？」が表示されます。

手順4でTV CONTを選択した場合のみTV CONTROLボタンの設定をクリアすることができます。

TV CONTROL ボタン

6

「Yes」か「No」か「＊Exit＊」を選んで決定する。

「Yes」：設定をクリアし、リモコンの設定クリアを終了します。

「No」：設定のクリアを中止し、リモコンの設定クリアを終了します。

「＊Exit＊」：設定のクリアを中止し、リモコンの設定クリアを終了します。Remote Setupメニューの表示画面に戻ります。

7

「Exit」を選んで決定する。

リモートセットアップモードが終了して、リモコンが通常の状態になります。

サウンドフォーマットについて

ドルビー

DOLBY DIGITAL・EX PRO LOGIC IIx

ドルビーデジタル

ドルビーデジタルは、ドルビーのマルチチャンネル音声システムのディスクリート・デジタルサラウンド方式の名称です。映画業界の主流であり、ＤＶＤビデオの標準音声方式としても採用されるなど、デジタル時代の標準フォーマットとなっています。独立した各チャンネルに記録された自然で高度な立体音像と、低域専用chにより、臨場感あふれるマルチchサラウンドを再現します。人間の聴覚特性を応用した圧縮技術により聴覚上の音質低下を招きません。この信号を伝送するには、デジタル接続が必要です。その他にも以下のような機能を持つ柔軟性の高いフォーマットです。

1） モノ、ステレオ、プロロジック対応の構成および5.1ch音声の再生に最適なダウンミキシング
2） 広範囲のビットレートにわたる動作
3） ダイナミックレンジ情報を伝達する機能
4） ダイアログノーマライゼーション機能
ダイアログノーマライゼーション機能とは平均的音量レベルが異なるさまざまなソフトでも、一定の音量で再生されるように自動調整する機能です。
「Dial. Norm.」と表現されることもあります。

ドルビーデジタルサラウンドEX

ドルビーデジタルサラウンドＥＸは、映画「スターウォーズ・エピソード1」の製作に向けて、ドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社で共同開発された、6.1ch再生可能な新しい音響フォーマットです。新たに加えられたサラウンドバックchにより空間表現力、定位感が高められ、中央から離れた客席からでも360度の回転や頭上を通過するような移動音効果・音像をより生々しく体感することが可能となりました。フィルム上ではサウンドトラックのサラウンドL／Ｒchにエンコードされるため、既存のドルビーデジタル（5.1ch）環境での再生互換性があります。この技術により製作された映画のリストはドルビーラボラトリーズのウェブサイトにてご覧になれます。
http://www.dolby.com/

プロロジックIIx製品は、プロロジックIIxの持つ様々な機能を、選択して搭載することが可能です。プロロジックIIx搭載、とキャッチフレーズされた商品でも、必ずしも全く同じ機能を持っているとは限らないことにご注意ください。

ドルビープロロジック ドルビープロロジックIIx

ドルビープロロジックIIx は、ドルビープロロジック、ドルビープロロジックII、ドルビーデジタルEX をさらに改良し、ステレオ音声や5.1ch音声を、すべて最大 7.1chまで拡張できるマトリックスデコード技術です。
ステレオ音声のマルチch化方式として、ドルビープロロジックは4chに、ドルビープロロジックIIは5ch化していましたが、それらをさらに進化させ、メインの7ch を作り出します。
また5.1chソースに対し、ドルビーデジタルEXはモノラルのサラウンドバックchを生成していましたが、これをステレオ化することで最大7.1ch 再生が可能になりました。今まで以上に自然でシームレスな移動感、滑らかで包み込むような、音楽および映画サウンドを体験できます。
本機には複数のモードを搭載しているため、お好みに応じて切り替えることが可能です。

■2chソース用
MOVIE/MUSIC/PRO LOGIC
■5.1chソース用
MOVIE/MUSIC/DIGITAL SURROUND EX

MOVIE（DD PRO LOGIC IIx MOVIE）
7.1ch化します。映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド・エンコード作品に効果的です。ドルビーデジタルEXに迫るセパレーションや移動感などが得られます。

MUSIC（DD PRO LOGIC IIx MUSIC）
7.1ch化します。音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース（ＣＤ など）を再生するときにも効果的です。サラウンドchは定位よりも広がり感を重視しています。

PROLOGIC（DD PRO LOGIC）
従来のドルビープロロジックと同等の再生モードです。ソースのクオリティを問わず、幅広くお使いいただけるモードです。

SURROUND EX
同ページ内参照
サラウンドバックchを使用しない場合は、自動的に従来のプロロジックIIモードになります。

■2chソースに対するプロロジックとプロロジックIIxの違い

	プロロジック	プロロジックII	プロロジックIIx
効果的なソース	ドルビーサラウンドエンコード処理されたステレオ音声	すべてのステレオ音声	すべてのステレオ音声/Dolby Digital 5.1chソース
デコードチャンネル数	4.1ch（サラウンドモノラル）	5.1ch（サラウンドステレオ）	7.1ch（サラウンド、サラウンドバック、ステレオ）
周波数特性	サラウンド 7kHz 帯域制限	全チャンネル フルバンド	全チャンネル フルバンド

MPEG-2 AAC

MPEG-2オーディオの標準方式の一つで、BS デジタルや地上デジタル放送で採用されている音声符号化規格です。高圧縮率ながら高音質を確保できる点が特長で、番組内容によりマルチチャンネル設定が可能なフォーマットです。

■米国におけるパテントナンバー

08/937,950	5 297 236	5,481,614	5,490,170
5848391	4,914,701	5,592,584	5,264,846
5,291,557	5,235,671	5,781,888	5,268,685
5,451,954	07/640,550	08/039,478	5,375,189
5 400 433	5,579,430	08/211,547	5,581,654
5,222,189	08/678,666	5,703,999	05-183,988
5,357,594	98/03037	08/557,046	5,548,574
5 752 225	97/02875	08/894,844	08/506,729
5,394,473	97/02874	5,299,238	08/576,495
5,583,962	98/03036	5,299,239	5,717,821
5,274,740	5,227,788	5,299,240	08/392,756
5,633,981	5,285,498	5,197,087	

DTS

DTS

デジタルシアターシステムズ(Digital Theater Systems)の略で、低圧縮率と高転送レートがもたらす豊富な情報量により、高音質マルチチャンネルサラウンド再生を実現します。音楽用にも独自録音による DTS-CDがあります。

DTS 96/24

5.1ch全てを96kHz/24bitの高音質で再生する最新のサラウンドフォーマットで、スタジオのマスター音源のクオリティを踏襲しています。ＤＶＤの限られた記録エリアで、高音質/ 高画質を両立させるために開発されました。既存のDTS対応のDVD プレーヤーと、DTS96/24 に対応するデコーダー(AVアンプ等)をデジタル接続することで、再生することができます。(本機は、DTS96/24対応デコーダーを搭載しております)(専用プレーヤーは必要ありません)。従来のDTSデコーダーでは通常のDTS信号として再生されるため、完全互換性を持っています。

DTS-ES

2000年11月に発表された新たなるサラウンドフォーマットで、「DTS Extended Surround」の略称です。従来の5.1chにサラウンドバック(SB)chを加えたもので、かつてない音像・定位感をもたらす事が可能になりました。“DTS-ESディスクリート6.1”と“DTS-ESマトリックス6.1”の２種類があり、どちらも従来のDTS5.1chデコーダーとの下位互換性を有しています。

DTS Neo:6

全ての2chソースを6.1ch化するマトリックスデコード技術です。Cinemaモード/Musicモードがあります。

CINEMA (Neo6: CINEMA)
6.1ch化します。映画再生に適したモードで、2chでも映画館特有の移動感などをお楽しみいただけます。

MUSIC (Neo6: MUSIC)
6.1ch化します。フロントからは原音をそのまま再生するため音質の変化が無く、音楽再生に適しています。また、センター/サラウンド/サラウンドバックchの音声が音場にナチュラルな広がり感を加えます。

THX

ＴＨＸは、世界的に有名な映画製作会社であるルーカスフィルム社によって確立された独自の規格と技術の集大成です。「映画館でもホームシアターでも、映画のサウンドトラックは映画監督の意図通り、できる限り忠実に再生して欲しい」というジョージ・ルーカス監督の情熱によって誕生しました。THXはホームシアターの音場最適化に関する数々の特許技術を開発しています。ホームシアター機器がTHX認証されるには、下記の技術を備え、かつ品質と動作に関する一連の厳しい試験に合格しなくてはなりません。こうして製品搭載が許諾されるTHXのロゴは、ご購入いただいたホームシアター製品が長年に渡って素晴らしい性能を維持する保証となります。THX規格は、プリアンプ・パワーアンプの性能、操作性、デジタル・アナログの両分野に渡る何百もの性能要求を含め、製品の全体像を網羅しています。

THX Cinema

映画のサウンドトラックは、ダビングステージ(ミキシング専用大型映画館)で制作されます。DVD などに収録する音声もそのサウンドトラックのままで、ホームシアター向けの変更は加えません。家庭と映画館との空間的な違いによる音色の差を補正し、映画館の音場を正確に再現します。

THX Surround EX

「THX Surround EX - Dolby Digital Surround ＥＸ」はドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社のＴＨＸ部門との共同開発によるものです。リスナーの後方に位置するよう加えられたサラウンドバックchは、ミキシング段階で Dolby Digital Surround EX技術によって符号化され、映画館での上映時に復元されます。従来の5.1chスピーカー構成では表現し切れなかった後方部の繊細な描写力・空間の奥行きや広がり感・音像定位などが得られるようになりました。一般家庭でこの新技術を忠実に再生することができるのは、THX Surround EXのロゴが搭載された製品だけです。この製品は通常の5.1chソースでも「THX Surround EX」モードでお楽しみいただけます。この場合のサラウンドバックchの音声は、所定の演算処理によって生成されますので、お好みに応じてご使用ください。

Re-Equalization

映画のサウンドトラックは、映画館での上映用に製作されているため、それを家庭用のオーディオ機器で再生すると、過度に明るく耳障りに聞こえます。Re-Equalizationは小型のホームシアターでも正確な音色バランスを再現します。

Timbre Matching

人間の耳は、音の到達方向によって音色の感じ方が変わります。映画館では数多くのサラウンドスピーカーが聴衆を囲むように配置されていますが、ホームシアターではリスナー両側の2本のみです。この配置の違いから起こる音色の差を補正し、かつ前方から到達する音の性質に合わせることによって、フロント／サラウンド間の音の繋がりをスムーズにします。

Adaptive Decorrelation

映画館ではサラウンドスピーカーが多数なのに対し、ホームシアターは通常2本です。そのため、広がり感やサラウンド感に欠けてしまったり、近接したスピーカーに音場が偏ってしまうことがあります。Adaptive Decorrelationは サラウンド信号間の時間と位相の関係を微妙に変化させることにより、2本のスピーカーでもリスニングエリアを拡大して、映画館と同様の効果をもたらします。

Loudspeaker Position Time Synchronization

それぞれのスピーカーからリスニングポジションまでの距離の差を調整する機能です。この調整を行うとすべてのスピーカーが正確に同期するため、切れ目のない自然な音場を再現することができます。

Bass Peak Level Manager

Dolby Digitalのソフトにはホームシアターの環境のもとでは非常に大きなレベルの低音が記録されている場合があります。Bass Peak Level Managerを使用するとご家庭のシステムに適したピークレベルを設定することができます。(この機能については65ページを参照してください。)

メモ

本機は「6.1再生検出信号」(DTS - ES と Dolby Digital Surround EX)を自動検出しますが、それらの技術を用いて上映された映画でも、DVD化の際にこの検出信号を収録していないものがあります。
この場合は手動にて最適なモードに変更してください。Surround EX技術により製作された映画のリストは各ウェブサイトにてご覧になれます。

プリセットコードメーカー一覧

本機のリモコンは下記の表にあるメーカーの製品に対応しています。プリセットコードメーカー一覧にあるメーカーのプリセットコードをすべて呼び出してもメーカーや製品によっては、操作できなかったり、違うはたらきをすることがあります。

DVD

メーカー
PIONEER
DENON
JVC
PHILIPS
PANASONIC
RCA
SAMSUNG
SONY
TOSHIBA
YAMAHA

LD

メーカー
PIONEER
DENON
KENWOOD
PANASONIC
PHILIPS
SONY
YAMAHA

CD-R

メーカー
PIONEER
DENON
JVC
KENWOOD
PHILIPS
SONY

DVR

メーカー
PIONEER

MD

メーカー
PIONEER
DENON
JVC
KENWOOD
SONY
YAMAHA

CD

メーカー
PIONEER
DENON
FISHER
JVC
KENWOOD
MAGNAVOX
MARANTZ
ONKYO
PANASONIC
PHILIPS
RCA
SANYO
SHARP
SONY
TEAC
TECHNICS
YAMAHA

STB (CATV、BSデジタルチューナー、BSデジタルチューナー内蔵テレビ)

メーカー
PIONEER
BLAUPUNKT
GENERAL INSTRU-MENT
GOLDSTAR
GRUNDIG
HAMLIN
HNS/HUGHES
HITACHI
ITT/NOKIA
JERROLD
NEC
OAK
PANASONIC
PHILIPS
RADIO SHACK
RCA
SAMSUNG
SCIENTIFIC ATLANTA
SIEMENS
SONY
TOSHIBA
TOCOM
ZENITH

TAPE

メーカー
PIONEER
DENON
FISHER
JVC
KENWOOD
NAKAMICHI
ONKYO
PHILIPS
SONY
TEAC
TECHNICS
YAMAHA

TUNER

メーカー
PIONEER

VCR (VTR)

メーカー
PIONEER
ADMIRAL
AIWA
AKAI
ALBA
AUDIO DYNAMIC
BELL&HOWELL
BLAUPUNKT
BROCSONIC
BUSH
CANON
CGM
CITIZEN
CLATRONIC
CRAIG
CURTIS MATHIS
DAEWOO
DBX
DIMENSIA
EMERSON
FERGUSON
FISHER
FUNAI
GE
GOLDSTAR
GOODMANS
GRUNDIG
HITACHI
INSTANT REPLAY
ITT/NOKIA
JC PENNY
JVC
KENDO
KENWOOD
LOEWE
LUXOR
LXI
MAGNAVOX
MARANTZ
MARTA
MATSUI
MEMOREX
MINOLTA
MITSUBISHI
MULTITECH
NEC
NOKIA OCEANIC
NOKIA
NORDMENDE
OKANO
OLYMPIC
ORION
PANASONIC
PENTAX
PHILCO
PHILIPS
PHONOLA
QUASAR
RCA/PROSCAN
REALISTIC
SABA
SAMSUNG
SANSUI
SANYO
SCHNEIDER
SCOTT
SEG
SELECO
SHARP
SIEMENS
SIGNATURE
SONY
SYLVANIA
SYMPHONIC
TANDBERG
TASHIRO
TATUNG
TEAC
TECHNICS
TELEFUNKEN
THORN
TOSHIBA
UNIVERSUM
W.WHOUSE
WARDS
YAMAHA
ZENITH

TV

メーカー
PIONEER
ADMIRAL
AIWA
AKAI
ALBA
AOC
BESTAR
BLAUPUNKT
BLUE SKY
BRANDT
BROCSONIC
BUSH
CLATRONIC
CRAIG
CROSLEX
CURTIS MATHIS
DAEWOO
DAYTRON
DUAL
EMERSON
FERGUSON
FIRST
FISHER
FUJITSU
FUNAI
GE
GOLDSTAR
GOODMANS
GRANDIENTE
GRUNDIG
HITACHI
ICE
IRRADIO
ITT/NOKIA
JC PENNY
JVC
KENDO
KTV
LOEWE
LXI
MAGNAVOX
MARK
MATSUI
MATSUSHITA
MEDION
MITSUBISHI
MIVAR
NEC
NOKIA OCEANIC
NORDMENDE
OKANO
ONWA
PANASONIC
PHILCO
PHILIPS
PHONOLA
PORTLAND
PROSCAN
QUASAR
RADIO
RADIO SHACK
RADIOLA
RCA/PROSCAN
SABA
SAMSUNG
SANYO
SCHNEIDER
SCOTT
SHARP
SIEMENS
SIGNATURE
SONY
SYLVANIA
SYMPHONIC
TATUNG
TELEFUNKEN
THOMSON
THORN
TOSHIBA
UNIVERSUM
VIDECH
W.WHOUSE
WARDS
WATSON
ZENITH

工場出荷時の設定一覧

設定項目	初期値	参照ページ
スピーカーインピーダンス	8 Ω～ 16Ω	P.30
サラウンドバックシステムの設定	Normal System（一般的サラウンド）	P.39
スピーカーの有り無し / 低域再生能力	すべて SMALL（小）	P.45
サブウーファー	YES（有り）	P.45
スピーカー出力レベル	0dB（補正無し）	P.47,51
スピーカーまでの距離	すべて 2m	P.48
クロスオーバー周波数	80Hz	P.50
視聴環境の周波数特性の補正	全帯域 0dB（補正無し）	P.10,53
超低域音声のピークレベル設定	OFF	P.65
ダイナミックレンジコントロールの設定	OFF	P.66
THX CINEMA 設定	DD PRO LOGIC II/DD PRO LOGIC IIx MOVIE	P.67
デジタル入力の設定	リアパネル表記通り	P.68
コンポーネントビデオ入力の設定	すべて OFF	P.69
i.LINK 入力の設定	i.LINK	P.70
SACD ダイレクトの設定	OFF	P.72
PHONO/LINE 端子の切り換え設定	PHONO	P.73
マルチルームと IR レシーバーの設定	VARIABLE/Setting1	P.74
入力ファンクション	DVD/LD	P.75
入力信号の種類	AUTO（入力ファンクションによっては DIGITAL/ANALOG 固定）	P.76
SB CH MODE	ON	P.84
リスニングモード	DD PRO LOGIC II/DD PRO LOGIC IIx MOVIE （VIDEO 系入力ファンクション） STEREO （AUDIO 系入力ファンクション）	P.78
ストリームダイレクトモード	ON	P.77
アコースティックキャリブレーション EQ	OFF （自動設定を行うと自動的に ALL CH ADJUST モードで ON されます）	P.86
デジタルノイズリダクション機能	OFF	P.87
ミッドナイトリスニング機能	OFF	P.87
ラウドネス機能	OFF	P.88
トーンコントロール機能	BYPASS	P.88
オーディオスケーラー機能	OFF	P.89
サウンドディレイ機能	0.0 frame	P.89
スピーカーシステム A/B	A（Normal System のとき）	P.85
マルチチャンネル入力モード	OFF	P.90
デュアルモノの設定	ch1	P.90
SACD ゲイン	0dB	P.95
ビデオセレクト	VIDEO 系入力ファンクション：入力ファンクションと同じ AUDIO 系入力ファンクション：OFF	P.96
ディスプレイの明るさ	一番明るい	P.96

設定オールリセット

設定オールリセットは以下の手順で実行します。操作は本体フロントパネルで行います。
設定オールリセットを行うと、上記のすべての設定が工場出荷時の状態になりますので十分ご注意ください。

① 本機が STANDBY モードのときに TONE ボタンを押しながら STANDBY/ON ボタンを 2 秒以上押し続ける

TONE ＋ STANDBY/ON

② FL に「RESET？」と表示されたら TONE －ボタンを押し、「OK?」表示後に TONE+ ボタンを押します

メモ

1 カ月程度電源コンセントから電源コードを抜いた状態または主電源を OFF にしておくと本機で設定した各種設定がリセットされますのでご注意ください。

仕様

オーディオ部

実用最大出力（JEITA、1kHz、10%、8Ω）
- フロント ……… 160 W＋160 W
- センター ……… 160 W
- サラウンド ……… 160 W＋160 W
- サラウンドバック ……… 160 W＋160 W

定格出力（ステレオ動作時）
- 20 Hz〜20 kHz、0.09%、8Ω 110 W＋110 W

定格出力（サラウンド動作時）
- 20 Hz〜20 kHz、0.09%、8Ω
- フロント ……… 110 W＋110 W
- センター ……… 110 W
- サラウンド ……… 110 W＋110 W
- サラウンドバック ……… 110 W＋110 W

入力端子（感度/インピーダンス）
- PHONO MM ……… 4.7 mV/47 kΩ
- LINE系 ……… 335 mV/47 kΩ

周波数特性
- PHONO（RIAA偏差）
  ……… 20 Hz〜20 kHz（± 0.3dB）
- LINE系 ……… 5 Hz〜100 kHz、$^{+0}_{-3}$ dB

出力端子（レベル/インピーダンス）
- REC OUT系 ……… 335 mV/2.2 kΩ

トーンコントロール
- BASS ……… ± 6dB（100 Hz）
- TREBLE ……… ± 6dB（10 kHz）
- LOUDNESS（ボリュームポジション−40dB時）
  ……… +4dB/+2dB（100 Hz/10 kHz）

SN比（IHF、ショートサーキット、Aネットワーク）
- LINE系 ……… 103 dB

SN比（EIA、1W（1kHz））
- LINE系 ……… 83 dB

ビデオ部（コンポジット、S）

入力端子（感度/インピーダンス） ……… 1 Vp-p/75 Ω
出力端子（レベル/インピーダンス） ……… 1 Vp-p/75 Ω
SN比 ……… 65 dB
周波数特性 ……… 5 Hz〜10 MHz、$^{+0}_{-3}$ dB

コンポーネントビデオ部

入力端子（感度/インピーダンス） ……… 1 Vp-p/75 Ω
出力端子（レベル/インピーダンス） ……… 1 Vp-p/75 Ω
SN比 ……… 65 dB
周波数特性 ……… 5 Hz〜100MHz、$^{+0}_{-3}$ dB

電源部・その他

電源 ……… AC 100V、50/60Hz
消費電力 ……… 440 W
待機時消費電力 ……… 0.8 W
予備電源コンセント
- 連動 ……… 1（100 W 最大）

外形寸法
- ……… 420（幅）× 188（高さ）× 464（奥行）mm

質量 ……… 21.2 kg

付属品

リモコン ……… 1
電源コード ……… 1
単3形アルカリ乾電池（LR6） ……… 4
オートセットアップ用マイク ……… 1
オートセットアップ用マイクスタンド ……… 1
保証書 ……… 1
修理窓口・ご相談窓口のご案内 ……… 1
スピーカーコーションシート ……… 1
取扱説明書

●仕様および外観は改良のため予告なく変更することがあります。

お手入れについて

通常は柔らかい布で空拭きしてください。汚れがひどい場合は水で5〜6倍に薄めた中性洗剤に柔らかい布を浸してよく絞った後、汚れを拭き取り、その後乾いた布で拭いてください。
アルコール、シンナー、ベンジン、殺虫剤などが付着すると、印刷、塗装などがはげることがありますのでご注意ください。また、化学ぞうきん等をお使いの場合は、化学ぞうきん等に添付の注意事項をよくお読みください。

音のエチケット

楽しい音楽も時と場所によっては気になるものです。隣近所への思いやりを十分にいたしましょう。
ステレオの音量は、貴方の心がけ次第で大きくも小さくもなります。
とくに静かな夜間には小さな音でも通りやすいものです。夜間の音楽鑑賞にはとくに気を配りましょう。近所へ音が漏れないように窓を閉め、お互いに心を配り、快い生活環境を守りましょう。

故障かな ？ と思ったら

故障かな ？ と思ったら以下を調べてみてください。意外なミスが故障と思われています。また、本機以外の原因も考えられます。ご使用の他の機器および同時に使用している電気機器もあわせてお調べください。
以下の項目を調べても直らない場合は、修理を依頼してください(⇨**P.125**)。

音について

「音が出ない」「音がおかしい」「ノイズが出る」など、音についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、音が出ない	入力端子の接続が正しくない。	接続を再確認する。	
	デジタル入力の設定が正しくない。	設定を修正する。	**P.68**
	SIGNAL SELECT の入力信号選択が正しくない。	SIGNAL SELECT ボタンで正しい入力信号を選択する。	**P.76**
	ミュート状態になっている。	リモコンでミュートを解除する。	**P.17**
	スピーカー出力が OFF になっている。	SPEAKERS ボタンを押して、ON (SP▶A)にする。	**P.85**
	MULTI CH IN モードになっている。	MULTI CH IN を OFF にして、通常のリスニングモードにする。	**P.90**
	音量が下がっている。	MASTER VOLUME を調整する。	**P.75**
フロントスピーカー以外の音が出ない	スピーカーシステムの設定がフロント ch 以外すべて NO になっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。	**P.45**
	リスニングモードが STEREO/DIRECT になっている。	サラウンド再生用のリスニングモードを選択する。	**P.80**
サラウンドバックスピーカーから音が出ない	サラウンドバックチャンネルの設定が OFF になっている。	ON を選択する。	**P.84**
	サラウンドバックチャンネルの設定が AUTO で「6.1ch 再生検出信号」の収録されていないソースを使用している。	ON を選択する。	**P.84**
	サラウンドバックシステムの設定が［Front Bi-Amp］または［Second Zone］になっている。	［Normal System］を選択する。	**P.39**
	スピーカーシステムの設定でサラウンドバック ch の設定が NO になっている。	サラウンドバック ch の設定を修正する。	**P.45**
	接続が正しくない（サラウンドバック ch を 1 本のスピーカーで接続していて Rch 側に接続している）。	接続を再確認する（サラウンドバック ch を 1 本のスピーカーで接続しているときは Lch 側に接続する）。	**P.29**
デジタル機器の音が出ない	デジタル接続が正しくない。	デジタル接続を再確認する。	**P.28**
	デジタル入力の設定が正しくない。	デジタル入力の設定を修正する。	**P.68**
	SIGNAL SELECT の入力信号選択が正しくない。	接続されているデジタル機器に応じて、SIGNAL SELECT ボタンで DIGITAL を選択する。	**P.76**
	デジタル出力レベル調整機能が付いている CD プレーヤーなどの場合、デジタル出力レベルの設定が低すぎる。	プレーヤーのデジタル出力設定を適切に修正する。	
	DTS 信号が正しく読み取れない。	DTS CD の場合は 0dB に設定してください。	
	再生ソフトのデジタルフォーマットに対応していないプレーヤーである（または対応しない設定になっている）。	対応フォーマットの音声トラックを選択する（または対応させる設定にする）。	
DTS CD のサーチ中にノイズが出る	サーチ中に CD に含まれるデジタル情報を読み取ってしまう。	故障ではありません。サーチ中はアンプの音量を下げ、スピーカーから出る音を抑えてください。	
DTS の LD を再生するとノイズが出る	SIGNAL SELECT で ANALOG が選択されている 。	機器を正しくデジタル接続し、SIGNAL SELECT ボタンで DIGITAL を選択する。	**P.76**
SIGNAL SELECT は DDRF だが、LD を再生しても音が出ない	再生ディスクがドルビーデジタル対応でない。（すべての LD がドルビーデジタル対応とはかぎりません）	SIGNAL SELECT ボタンで AUTO を選択する。	**P.76**
録音ができない	アナログ信号をデジタルで、デジタル信号をアナログで録音しようとしている。	アナログ信号はアナログ録音、デジタル信号はデジタル録音のみ可能です。	**P.97**
	コピープロテクト信号の入ったデジタル信号である。	コピープロテクト信号の入ったデジタル信号は録音することはできません。この場合はアナログ接続を行いアナログ録音してください。	**P.97**
	REC 端子の接続が正しくない。	正しく接続し直す。	**P.27,28**

症　状	原　因	対　応	参照
無入力でもノイズが聞こえる	電源そのものにノイズが残っている。	パソコンなどのデジタル機器とたこ足配線になっていないか確認する。	
マルチチャンネルのDVD オーディオを再生したがフロントからしか音が出ない	MULTI CH IN 端子で接続したものではない信号を再生している（デジタル PCM 出力など）。	MULTI CH IN 端子の接続を再確認し、MULTI CH IN ボタンで再生モードを選択する。	**P.22,90**
特定のスピーカーから音が出ない	スピーカーシステムの設定が NO になっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。	**P.45**
	スピーカーの接続が外れている。	スピーカーの接続を確認する。	**P.29**
	ソフトのサウンドトラックが意図的にそのように録音されている。	リスニングモードによっては効果音のみ出力される場合があります。	
	スピーカーの出力レベル設定が小さい。	スピーカーの出力レベル設定を上げる。	**P.47**
	サラウンドバックシステムの設定で［Second Zone］が選択されているときのスピーカーシステムの選択が合っていない。	スピーカーシステムで「A+B」または「B」にする。	**P.85**

サブウーファーの接続／再生について

音についての問題の中でも、特に接続したサブウーファーについての疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
サブウーファーから音が出ない	サブウーファーあり／なしの設定が [NO]（なし）に設定されている。	[Speaker Setting] 設定を確認して、サブウーファーの設定を [Yes] または [PLUS] にする。	**P.45**
	バスピークレベルの設定値が [-80]（最小）になっている。	[Bass Peak Level] の設定を、適切なレベルに調整する。	**P.65**
	再生しているソースのシーンや音楽に超低域成分（LFE チャンネル）が含まれていない。	すべての場面に超低域成分（LFEチャンネル）があるわけではないので、サブウーファーから音が出ていないと感じられることがあります。	
	接続が外れている。	サブウーファーの接続を確認して、外れているときは接続し直す。	**P.29**
	サブウーファー側の電源が OFF になっている。	サブウーファーの電源を確認する。	
	サブウーファー側の自動スタンバイ機能が働いている。	サブウーファーの機能を確認する（詳しくはサブウーファーの取扱説明書をご覧ください。）	
サブウーファーからの音が小さい	低域成分の少ない／ないソースやディスク（CD など）を再生している。	再生しているソースによっては低域成分が少なく、サブウーファーからの音が十分でないと感じられることがあります。その場合 [Speaker Setting] の設定状況によっては、サブウーファーからの音をより強調した設定を選ぶこともできます。	**P.45**
	サブウーファー出力レベルの設定値が小さい。	[Channel Level] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。	**P.47**
	バスピークレベルの設定値が小さい。	[Bass Peak Level] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。	**P.65**
	クロスオーバー周波数の設定が低い。	[Crossover Network] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。	**P.50**
	サブウーファー側のボリューム設定が小さい。	サブウーファーのボリュームレベルを上げる。	

映像について

「映像が出ない」「メニュー画面（OSD画面）が表示されない」など映像についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、映像が出ない	TV モニター側の入力切り換え設定が正しくない。	TV モニターの取扱説明書をお読みになり、正しい入力に切り換えてください。	
	ソース機器と TV モニターを接続するコードの種類（整合性）が正しくない。	正しい接続法に変更する。	**P.20**
コンポーネント端子（または D 端子）に接続したソース機器の映像が出ない	モニター TV との接続がコンポジット（または S2）である。	モニター TV との接続にコンポーネントケーブル（または D 端子ケーブル）を使う。	**P.18,19**
	コンポーネント入力設定が正しくない。	コンポーネント入力設定を正しく行う。	**P.69**

症　状	原　因	対　応	参照
録画ができない	録画機器の接続端子とソース機器の接続端子が合っていない。	録画機器の接続端子とソース機器の接続端子を（コンポジットまたはSビデオで）合わせる。	**P.26**
	コピープロテクト信号の入った映像信号である。	コピープロテクト信号の入った映像信号は録画することができません。	
セットアップ画面が表示されない	本機のMONITOR OUT2端子に接続している。	本機のMONITOR OUT2端子はOSDを表示しないのでMONITOR OUT1端子またはコンポーネントのMONITOR OUT端子(D端子を含む)と接続する。	**P.21**
	テレビによっては、コンポーネント端子を使って接続しているときにセットアップ画面(OSD画面)が表示されないものがある。	カラーバースト設定をOFFにする。(工場出荷時はONに設定されています)。手順は、電源スタンバイ時に、フロントパネルドア内部のRETURNボタンを押しながらSTANBY/ONボタンを押します。押すたびにON/OFFが切り換わります。	

操作について

「操作できない」「電源が切れる」など操作時にある疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
大音量で再生したときに電源が切れる	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、＋－が接触し、保護回路が働いている。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、アンプまたはスピーカー側のスピーカー端子からはみ出ないように接続する。	**P.29**
	スピーカーの実動作上の最低インピーダンスが非常に低いため、保護回路が働いた。	ボリュームを下げて再生する。	
		視聴環境の周波数特性の補正で低域(63 Hzまたは125Hz)のレベルを下げる。	**P.53**
		DIGITAL SAFETY機能をONにすると、さらに数dB音量が上げられる場合があります。(スタンバイモード時に、SET UPボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを押すと、DIGITAL SAFETYのONとOFFが切り換わります。	
操作ボタンを押しても動作しない	空気が乾燥しているとき、静電気などの影響を受けている。	電源プラグを一度コンセントから外して、再び差し込む。	
リモコン操作ができない	主電源ボタンがOFF■になっている。	主電源ボタンをON▂にする。	**P.11**
	リモコンの電池が消耗している。	電池を交換する。	**P.5**
	距離が離れすぎている。角度が悪い。	7m以内、左右30°以内で操作する。	**P.13**
	途中に信号を遮る障害物がある。	障害物を取り除くか、操作する場所を移動する。	**P.13**
	蛍光燈などの強い光がリモコン信号受光部に当たっている。	リモコン信号受光部に光が直接当たらないようにする。	**P.13**
他機器をリモコンで操作できない	プリセットコードの設定が間違っている。	正しいプリセットコードを設定する。	**P.99**
	電池切れの期間にメモリーが消去された。	もう一度設定を行う。	
SR接続をしているのに相手機器がリモコンで動作しない	接続でコントロール端子のIN/OUTを間違えている。	正しく接続し直す。	**P.35**
	コントロールコード以外の接続をしていない。	アナログのオーディオコードなどを接続する。	**P.27**
	他社製品の同用途端子と接続している。	他社製品の動作はサポートしていません。	
SIGNAL SELECTボタンを押しても入力がDIGITALにならない	接続またはデジタル入力の設定が正しくない。	機器の接続を再確認し、「デジタル入力の設定」を正しく修正する。	**P.28,68**
	MULTI CH INモードになっている。	MULTI CH INをOFFにする。	**P.90**
5.1chソースを再生しているのに、5.1ch再生されない	DVDプレーヤーのデジタル出力設定がOFFになっている。	DVDプレーヤーのデジタル出力設定をONにする。	
	DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定がOFFになっている。	DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定をONにする。	
DVDオーディオを再生するとプレーヤーには96kHzと表示されるが、本機では表示されない	MULTI CH IN端子はアナログ入力端子なので、デジタル情報を表示することはできません。	故障ではありません。プレーヤーの取扱説明書もご覧ください。	

症　状	原　因	対　応	参照
96kHz のソフトを再生しても表示が 96kHz にならない	プレーヤー側で 96kHz 出力が OFF になっている。	プレーヤーの 96kHz 出力を ON にする。	
AMP ERR または STANDBY インジケーターが点滅して自動的に電源が切れる	低周波の過大な入力が持続した。 本機のアンプ回路が故障です。	すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源の ON/OFF を繰り返すのはおやめください。	**P.125**
FAN STOP と点滅し自動的に電源が切れる	後面の放熱孔から異物がひっかかり、ファンを止めてしまった。 放熱用ファンが故障した。	異物を取り除く。 修理を依頼してください。	 **P.125**
OVERHEAT と点滅表示したまま音が出なくなる	本機内部の温度が許容値を超えた。	通風がよくなるように設置を変える。 一度電源を切り、冷えてから使用する。	
THDCT NG と点滅し自動的に電源が切れる	温度検出用部品（サーミスタ）の故障です。	修理を依頼してください。	**P.125**
リモコンのバックライト点灯時に ENTER ボタンのみ点灯しない	リモコンの仕様です。故障ではありません。		

i.LINK接続／再生について

i.LINKケーブルでつないだ機器の音を再生するときの疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
i.LINK インジケーターが点灯しているが音が出ない	接続した機器が著作権保護（DTCP）に対応していない。 本機が対応していない音声フォーマット信号を入力している。 接続した機器の i.LINK 出力端子から出力されていない。	本機は著作権法（DTCP）に対応しています。接続した機器の取扱説明書を参照してください。 接続した機器の取扱説明書を参照してください。 接続した機器の取扱説明書を参照してください。	**P.23**
i.LINK インジケーターが消灯していて、音が出ない	入力信号の切り換えで、i.LINK 対応機器を選んでいない。 i.LINK ケーブルが外れている。 i.LINK ケーブルが長すぎる。 i.LINK AUDIO フォーマットに対応していない機器を接続している。 再生している機器と本機との間の機器の電源が切れている。	SIGNAL SELECT ボタンで AUTO を選択する。 正しく接続し直す。 3.5m 以下のケーブルを使用する。 接続した機器の取扱説明書を参照する。 電源が切れていたり、機種によっては、電源がスタンバイ状態の場合、信号を伝送することができません。 詳しくは、接続した機器の取扱説明書を参照してください。	**P.76** **P.22** **P.19**
PQLS OFF または PQLS ON が一瞬表示されて、音が途切れる	i.LINK 接続で再生中に、他の i.LINK 接続機器の状態を変更したりすると PQLS の ON/OFF が切り換わり、音が一瞬途切れることがあります。		
SIGNAL SELECT で i.LINK が選べない	i.LINK 対応機器の電源が入っていない。 i.LINK 入力の設定が正しくない。	電源を入れる。 正しく設定する。	
DVD オーディオ / SACD の再生を停止してもプログラムフォーマットインジケーターが表示されたままになる	DVD オーディオ /SACD の再生を停止しても、他のフォーマットが入力されるまで、プログラムフォーマットインジケーターは表示されたままです。		
他製品のアップグレードを行ったあとに i.LINK で接続したその機器の名前が表示されなかったりその機器をファンクションで選択できない	製品のアップグレードなどによって機器の認識ができなくなっている。	本機内部の機器情報を初期化します。本体のボタンを使って以下の手順で行ってください。 1　電源スタンバイ時に STEREO/DIRECT ボタンを押しながら STANBY/ON ボタンを 2 秒以上押し続ける。 2　[DB CLEAR?]表示中に MULTI CH IN ボタンを押す。 3　[DB CLEAR OK?]表示中に ACOUSTIC EQ ボタンを押す。 [DB CLEAR SET]が表示されたら初期化終了です。もし[DB ERROR]が表示されたら、再度行ってください。	

i.LINK関係の表示部のメッセージの意味

「BUS FULL」:
i.LINKの伝送容量が最大まで達したために, もうデータを送信することができない。

「CANNOT LINK 1」:
本機とi.LINK接続されている機器との接続関係が不安定である。i.LINK ケーブルが正しく接続されているか確認し、本機とi.LINK接続されている機器との間にi.LINK対応機器がある場合は、それらの機器も含めて正しく接続されているか確認してください。

「CANNOT LINK 2」:
i.LINK接続したい機器を識別できないので、その機器からの信号を受信できない。

「LINK CHECK」:
i.LINK接続関係を確認している。例えば本機とi.LINK接続されているネットワーク上で、新しく機器が加えられたり、外されたりしたときに表示します。再生中にこのメッセージが表示されたときは、音が途切れる場合があります。

「LOOP CONNECT」:
i.LINK対応機器間の接続において、接続がループになっている。

「NO NAME」:
i.LINK接続されている機器に、製品名またはメーカー名などの情報がないときに表示します。

「NO SIGNAL」:
i.LINK対応機器でもレシーバーのように再生信号を出力しない機器や本機で受信できない信号を出力する機器を選択した時に表示します。

「PQLS OFF」:
再生中にPQLSの機能がOFFになったときに表示されます。このとき、音が瞬間的に途切れます。

「PQLS ON」:
再生中にPQLSが機能がＯＮになったときに表示されます。このとき、音が瞬間的に途切れます。

「UNKNOWN」:
i.LINK接続されている機器の情報が認識できない時に表示します。

インジケーター／表示について

操作中のインジケーター表示などの疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
圧縮デジタル＊のソフトを再生しても、対応するインジケーターが点灯しない	デジタル接続が正しくない。	接続を再確認する。	**P.28**
	デジタル入力の設定が正しくない。	デジタル入力の設定を正しく行う。	**P.68**
	SIGNAL SELECT の入力信号選択が正しくない。	SIGNAL SELECT ボタンで正しい入力を選択する。	**P.76**
	プレーヤーが停止か一時停止になっている。	再生を開始する。	
	プレーヤーの音声出力設定が間違っている。	プレーヤーの音声出力設定を各フォーマットに対応するよう修正する。	
	再生しているトラックが PCM などになっている。	プレーヤーの音声切り換え機能で圧縮デジタル＊の音声を選択する。	
圧縮デジタル＊のソフトを再生してもすべてのプログラムフォーマットインジケーターが点灯しない	収録フォーマットが 5.1ch(または「6.1ch 再生検出信号」対応）ではない。	故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	
圧縮デジタル＊のソフトを再生しても、DIGITAL または DTS などの表示にならない	デジタル信号が入力されていない。	SIGNAL SELECT ボタンで AUTO または DIGITAL を選ぶ。	**P.76**
	ソフトの音声が 2ch フォーマットである。	故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	
	ドルビーサラウンドエンコードされたソフトである。		

症　状	原　因	対　応	参照
Surround EX（またはDTS ES）ソフト再生時に、サラウンドバックチャンネルの設定をAUTOにしてもEX（またはES）デコードしない	「6.1ch再生検出信号」が記録されていない(劇場公開時とDVD収録時はまれに違う場合があります)。	サラウンドバックチャンネルの設定をONにする。	P.84
Surround EX（またはDTS ES）ソフトを再生中、SL、S、SRのインジケーターは点灯するが、EX（またはES）デコードしない	リスニングモードが正しくない。	サラウンドバックチャンネルの設定をONに変更し、リスニングモードをサラウンドにして再生する。	P.78,84

圧縮デジタル＊：ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AACなどの総称として使用します。

オートセットアップ(音場補正)について

サラウンドの自動設定(Auto Setting)のときにある疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
音場補正のオート設定を何度行ってもエラーになる	マイクとスピーカーとの間に障害物がある。	障害物を移動させる。	
測定結果のサブウーファーの距離が実際の距離より長い	サブウーファー内部ローパスフィルターの遅延特性の影響で再生音にディレイがかかっている。	MCACCでは、こういった遅延特性を考慮したうえで距離を特定して正確なディレイ時間を設定するようにしています。	
スピーカーの大、小設定が誤った設定になる	耳に聞こえにくい周波数の騒音がある。	エアコンなどモーターを使用した機器の電源を切ってみる。	
音場補正したが、音がおかしい	スピーカー端子の位相が反転している（＋/－が逆)。	正しく接続する。	P.29

自動設定時におけるOSD画面のメッセージの意味

「Connect Microphone」:

SETUP MIC用ジャックに付属のマイク内蔵リモコンを接続してください。

「Too much ambient noise」:

周辺の騒音が大きすぎ、測定に誤差が生じる可能性があります。

- エアコンなどモーターを使用した機器や超音波ねずみ駆除装置などの電源を一時的にOFFにするか遠ざけるなどの処置を行ってみてください。
- 周囲が比較的静かな時間帯にもう一度やり直してください。

「Check Microphone」:

マイクからテスト信号が検出できなくなりました。

- オートセットアップ用マイクの接続や接続コードの断線をチェックしてください。
- スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
- 測定中はできるだけボリュームを変化させないでください。

「Don' t change volume」:

測定精度が落ちる可能性があるため、できるだけボリュームを変化させないでください。

「ERR」:

Speaker Level測定後のYes/No Check判定で、以下のような間違った接続を検出しました。

- フロント、サラウンドに表示された：スピーカーがL/Rの片方しか検出されませんでした。
- サラウンド「NO」、サラウンドバック「ERR」の場合：サラウンドの接続は検出されずサラウンドバックの接続が検出されました。
- サラウンドバック(1本接続時)の場合：R ch側から検出しました(1体のみ接続するときは、Lch側を使用してください)。

「Attention Subwoofer output level is too low　Turn volume up on subwoofer」:

[YES]と設定したサブウーファーの出力信号が検出できません。サブウーファー本体の電源を確認しボリュームを適正値に上げてください。

- 上記を確認したうえ、[Retry]または[Go Next]を選び、決定してください。

保証とアフターサービス

保証書(別添)

保証書は、必ず「販売店名・購入日」などの記入を確かめて販売店から受け取っていただき、内容をよくお読みのうえ、大切に保管してください。

保証期間はご購入日から1年間です。

補修用性能部品の保有期間

当社は、この製品の補修用性能部品を製造打ち切り後8年間保有しています。性能部品とはその製品の機能を維持するために必要な部品です。

修理に関するご質問、ご相談

お買い求めの販売店へご相談・ご依頼ください。

修理を依頼されるとき

修理を依頼される前に取扱説明書の「故障かな?と思ったら」の項目をご確認ください。それでも異常のあるときは、必ず電源プラグを抜いてから、販売店へご依頼ください。ご転居されたり、ご贈答品などで、お買い求めの販売店に修理のご依頼ができない場合は、別添の「修理窓口・ご相談窓口のご案内」をご覧になり、修理受付センターにご相談ください。

連絡していただきたい内容

- ご住所
- お名前
- 電話番号
- 製品名:AVマルチチャンネルアンプ
- 型番:VSA-AX5Ai
- お買い上げ日
- 故障または異常の内容(できるだけ詳しく)
- 訪問ご希望日
- ご自宅までの道順と目標(建物や公園など)

■ 保証期間中は:

修理に際しては、保証書をご提示ください。保証書に記載されている当社の保証規定に基づき修理いたします。

■ 保証期間が過ぎているときは:

修理すれば使用できる製品については、ご希望により有料で修理いたします。

本製品は家庭用オーディオ機器(オーディオ・ビデオ機器)です。下記の注意事項を守ってご使用ください。

1. 一般家庭用以外での使用(例:店舗などにおけるBGMを目的とした長時間使用、車両・船舶への搭載、屋外での使用など)はしないでください。
2. 音楽信号の再生を目的として設計されていますので、測定器の信号(連続波)などの増幅用には使用しないでください。
3. ハウリングで製品が故障する恐れがありますので、マイクロフォンを接続する場合はマイクロフォンをスピーカーに向けたり、音が歪むような大音量では使用しないでください。
4. スピーカーの許容入力を超えるような大音量で再生しないでください。

長年ご使用のオーディオ製品の点検をおすすめいたします。こんな症状はありませんか?

・電源コードや電源プラグが異常に熱くなる。
・電源コードにさけめやひび割れがある。
・電気が入ったり切れたりする。
・本体から異常な音、熱、臭いがする。

故障や事故防止のためすぐに使用を中止し、電源プラグをコンセントから抜き、「保証とアフターサービス」(上記)をお読みの上、修理受付センター(裏表紙)に点検をご依頼ください。

さくいん

本機を操作するときの主な用語や表示をまとめました。参照ページに進むと、それぞれに関連する情報があります。

五十音順

アルファベット順

記号・数字順

ご相談窓口　・　修理窓口のご案内

パイオニア商品の修理・お取り扱い（取り付け・組み合わせなど）については、お買い求めの販売店様へお問い合わせください。
なお、修理をご依頼される場合は、取扱説明書の『故障かな？と思ったら』を一度ご覧になり、故障かどうかご確認ください。それでも正常に動作しない場合は、①型名 ②ご購入日 ③故障症状を具体的に、ご連絡ください。

●ホームページ 「商品についてよくあるお問い合わせ」FAQのご案内　http://faq.pioneer.co.jp/faqnavi/piofaq/top/navi.cgi

<下記窓口へのお問い合わせの時のご注意>市外局番「0070」で始まるﾌﾘｰﾌｫﾝ及び「0120」で始まるﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙは、ＰＨＳ、携帯電話などからは、ご使用になれません。また、【一般電話】は、携帯電話・PHSなどからご利用可能ですが、通話料がかかります。

商品のご購入や取り扱いについてのご相談窓口

カスタマーサポートセンター（全国共通フリーフォン）

受付　月曜～金曜 ９：３０～１７：００、土曜・日曜・祝日 ９：３０～１２：００、１３：００～１７：００ （弊社休業日は除く）

●家庭用オーディオ／ビジュアル商品のご相談窓口およびカタログのご請求窓口　フリーフォン ００７０－８００－８１８１－２２
一般電話　【一般電話】０３－５４９６－２９８６

●カタログ請求とメールマガジン登録のご案内　http://www.pioneer.co.jp/support/ctlg/index.html

●ファックス受付　０３－３４９０－５７１８

部品のご購入についてのご相談窓口

●部品（付属品、リモコン、取扱説明書など）のご購入については、部品受注センターへお問い合わせください。

部品受注センター

受付　月曜～金曜 ９：３０～１８：００、土曜・日曜・祝日 ９：３０～１２：００、１３：００～１７：００ （弊社休業日は除く）

電話（ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ）０１２０－５－８１０９５　ファックス（ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ）０１２０－５－８１０９６

一般電話　０５３８－４３－１１６１

修理についてのご相談窓口

●お買い求めの販売店に修理の依頼が出来ない場合は、修理受付センターへ（沖縄の方は、沖縄サービスステーションへ）

修理受付センター（沖縄県を除く全国）

受付　月曜～金曜 ９：３０～２０：００、土曜・日曜・祝日 ９：３０～１２：００、１３：００～１８：００ （弊社休業日は除く）

電話（ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ）０１２０－５－８１０２８（ゴーパイオニア）　ファックス（ﾌﾘｰﾀﾞｲﾔﾙ）０１２０－５－８１０２９

一般電話　０３－５４９６－２０２３

沖縄サービスステーション（沖縄県のみ）

受付　月曜～金曜 ９：３０～１８：００ （土曜・日曜・祝日・弊社休業日は除く）

一般電話　０９８－８７９－１９１０　ファックス　０９８－８７９－１３５２

ＶＯＬ．009

JIS C 61000-3-2適合品　D50-5-10-1_A_Ja

JIS C 61000-3-2適合品とは、日本工業規格「電磁両立性－第3-2部：限度値－高調波電流発生限度値(1相当たりの入力電流が20A以下の機器)」に基づき、商用電力系統の高調波環境目標レベルに適合して設計・製造した製品です。

パイオニア株式会社　〒153-8654 東京都目黒区目黒1丁目4番1号

<04G00001>　Printed in　<ARA7197-A>